宮崎市文化財調査報告書　第80集

生目古墳群Ⅰ

－生目５号墳発掘調査報告書－

２０１０

宮崎市教育委員会

序　文

跡江丘陵が形成されて約25,000年、丘陵は時代、時代で様々な景色を人々に見せていたと思われます。その歴史の中でも1700年前に豪族の墓域として採用された200年間余は、大淀川下流一帯に暮らす人々の誰もが知っている「丘」だったに違いなく、その頃が最も栄華を極めた時代であったことでしょう。宮崎市はこの豪族が眠る丘を、千数百年ぶりに甦らせるべく、平成5年より事業を行なってまいりました。そして平成20年4月に生目古墳群史跡公園として開園し、今回報告いたします5号墳は、発掘調査ののち当時の姿に復元整備されました。これからはこの生目古墳群が宮崎市及び宮崎県を代表する文化財の情報発信の基点となり、再び誰もが知っている「丘」になるよう努力してまいりたいと考えております。

今回、ご報告いたします本書が古墳研究の一助となり、活用されますことを願っております。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成22年3月

宮崎市教育委員会
教育長　田　原　健　二

例　言

1　本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴う生目５号墳の発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は宮崎市教育委員会が平成 10 年～平成 15 年の期間実施した。

3　生目古墳群史跡公園整備委員会委員

委 員 長　西 谷　　正（九州大学教授：当時）

副委員長　丸 山 淑 夫（宮崎市助役：平成９年度）

委　　員　高 瀬 要 一（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター計測修景調査室長：当時）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長：当時）

石 野 博 信（徳島文理大学教授：当時）

柳 沢 一 男（宮崎大学教授）

北 川 義 男（南九州大学教授）

奥 野 正 男（宮崎公立大学教授：当時）

整備指導　文化庁記念物課

宮崎県教育庁文化課（現宮崎県文化財課）

4　調査組織

調査主体　宮崎市教育委員会

文化振興課（現文化財課）

（発掘調査体制）

調査年度	平成 10 年度		平成 11 年度		平成 12 年度	
調査総括	課　長	野間重孝	課　長	野間重孝	課　長	野間重孝
文化財係	係　長	永井淳生	係　長	永井淳生	係　長	永井淳生
調査事務	主　事	竹野隆司	主　事	竹野隆司	主　事	竹野隆司
調査員	技　師	鳥枝誠	技　師	鳥枝誠	主　査	田村泰彦
	〃	時任直也	〃	稲岡洋道	技　師	稲岡洋道
	〃	稲岡洋道	〃	宇田川美和	〃	宇田川美和
	〃	宇田川美和	嘱　託	河野賢太郎		
補助員	嘱　託	椎　由美子	嘱　託	椎　由美子	嘱　託	椎　由美子
	〃	松永光雄	〃	松永光雄	〃	熊田原被義
	〃	小川正子	〃	小川正子		
	〃	久富なをみ	〃	久富なをみ		

調査年度	平成13年度		平成14年度		平成15年度	
調査総括	課　長	小椋　聖	課　長	小椋　聖	課　長	小椋　聖
文化財係	係　長	永井淳生	係　長	永井淳生	係　長	田村泰彦
調査事務	主任主事	竹野隆司	主　事	仁尾忠尊	主任主事	富永智美
調査員	技　師	稲岡洋道	技　師	稲岡洋道	主任技師	稲岡洋道
	〃	宇田川美和	〃	宇田川美和	嘱　託	門田奈津子
	嘱　託	河野賢太郎	嘱　託	河野賢太郎		
	〃	川原　愛	〃	門田奈津子		
	〃	門田奈津子				
補助員	嘱　託	椎　由美子	嘱　託	椎　由美子		
	〃	熊田原被義	〃	佐藤小夜子		
	〃	佐藤小夜子	〃	緒方吉継		

報告書作成	平成21年度	
文化財課	課　長	永井淳生
埋蔵文化財係	係　長	富永英典
調査事務	主　査	松崎留美
調査員	主任技師	稲岡洋道
	〃	竹中克繁
	嘱　託	井上誠二

6　本書の執筆は稲岡･竹中･井上が行った。なお、執筆分担については、目次中に記載している。

7　掲載した図面の実測・製図・図版の作成は稲岡･竹中・井上が分担して行った。

8　現場写真撮影は稲岡、遺物写真撮影は稲岡･竹中・井上が分担して行った。

9　空中写真撮影、葺石の実測業務は有限会社スカイサーベーイ九州に委託発注をした。

10　本書の編集は稲岡が行った。

11　本報告で使用する1号墳、3号墳、5号墳、7号墳、14号墳、22号墳、23号墳と及びその周辺部の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳と及びその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。

12　なお、本報告書で使用する座標系は日本測地系である。

13　発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本　文　目　次

第Ⅰ章　生目古墳群の概要
第１節　立地と環境 ……1
（１）　立地と環境 ……1（井上）
（２）　生目古墳群の概要 ……4（稲岡）
第２節　生目古墳群の地形 ……8（稲岡）
第３節　大淀川下流域の古墳群 ……10（井上）
第４節　生目古墳群の研究史 ……12（竹中）
第５節　生目古墳群の調査歴 ……15（稲岡）

第Ⅱ章　５号墳の調査結果
第１節　５号墳の概要 ……16
（１）　５号墳の位置と調査以前の状況 ……16（稲岡）
（２）　５号墳の発掘調査の経緯と発掘調査歴 ……17（稲岡）
第２節　遺構について ……19
（１）　５号墳の調査結果 ……19（稲岡）
①　５号墳の覆土 ……19（稲岡）
②　墳丘の構築状況 ……19（稲岡）
③　周溝及び周辺 ……25（稲岡）
④　その他の遺構 ……26（稲岡）
（２）　地下式横穴墓について ……33
①　生目古墳群の地下式横穴墓の概要 ……33（井上）
②　19号地下式横穴墓 ……38（稲岡）
（３）　出土遺物 ……40
①　５号墳出土埴輪 ……40（竹中）
②　５号墳出土土師器 ……52（稲岡）
③　19号地下式横穴墓出土遺物 ……52（稲岡）
④　出土位置からみた遺物の出自について ……53（稲岡）

第Ⅲ章　まとめ
第１節　５号墳出土埴輪の時間的位置付けについて ……57（竹中）
第２節　５号墳出土土師器について ……60（稲岡）
第３節　19号地下式横穴墓について ……60（井上）
第４節　総括 ……62（稲岡）

写真図版 …… 64

表 目 次

第１表　生目古墳群高塚古墳一覧 …… 7
第２表　５号墳地山整形と盛土構築の境の標高 …… 19
第３表　５号墳墳丘斜面の角度と高さ（復元値）…… 20
第４表　５号墳１段目テラス標高（復元値）…… 20
第５表　５号墳墳丘基底部標高（復元値）…… 20
第６表　５号墳墳丘復元規格 …… 25
第７表　生目地下式横穴墓一覧 …… 37
第８表　出土埴輪観察表① …… 55
第９表　出土埴輪観察表② …… 56
第10表　出土土師器観察表 …… 56
第11表　生目古墳群内既調査前方後円墳外表施設整理 …… 62

挿 図 目 次

第１図　宮崎市の位置 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図 …… 3
第３図　生目古墳群主要部分古墳配置図 …… 5～6
第４図　基本層序模式図 …… 9
第５図　大淀川下流域周辺古墳分布図 …… 11
第６図　長津宗重氏による宮崎県域の主要古墳編年図 …… 12
第７図　柳沢一男氏による墳丘規格の研究 …… 13
第８図　柳沢一男氏による南九州の主要古墳の編年図 …… 13
第９図　橋本達也・藤井大祐氏による南九州の主要古墳編年図 …… 14
第10図　生目５号墳調査前墳丘測量図 …… 16
第11図　生目５号墳平成 10 年度調査区図 …… 17
第12図　生目５号墳平成 11 年度調査区図 …… 17
第13図　生目５号墳平成 12 年度調査区図 …… 18
第14図　生目５号墳平成 13 年度調査区図 …… 18
第15図　生目５号墳平成 14 年度調査区図 …… 18
第16図　生目５号墳平成 15 年度調査区図 …… 18
第17図　生目５号墳墳丘測量図 …… 21～22
第18図　生目５号墳覆土土層図① …… 23～24

第19図　生目５号墳覆土土層図② …… 27
第20図　生目５号墳覆土土層図③ …… 28
第21図　生目５号墳後円部西側調査測量図 …… 29
第22図　生目５号墳後円部東側調査測量図 …… 30
第23図　埴輪検出状況 …… 30
第24図　生目５号墳前方部西側調査測量図 …… 31
第25図　生目５号墳前方部東側調査測量図 …… 32
第26図　生目古墳群内検出地下式横穴墓の一例 …… 34
第27図　生目古墳群地下式横穴墓位置図 …… 35～36
第28図　19 号地下式横穴墓実測図 …… 39
第29図　生目５号墳出土遺物① …… 40
第30図　生目５号墳出土遺物② …… 42
第31図　生目５号墳出土遺物③ …… 43
第32図　生目５号墳出土遺物④ …… 45
第33図　生目５号墳出土遺物⑤ …… 46
第34図　生目５号墳出土遺物⑥ …… 47
第35図　生目５号墳出土遺物⑦ …… 48
第36図　生目５号墳出土遺物⑧ …… 49
第37図　生目５号墳出土埴輪の復元案 …… 51
第38図　5 号墳出土遺物⑧・19 号地下式横穴墓出土遺物 …… 54
第39図　円筒埴輪以前の南九州の埴輪 …… 57
第40図　生目古墳群の埴輪 …… 58

図　版　目　次

図版１　発掘調査状況① …… 64
図版２　発掘調査状況② …… 65
図版３　発掘調査状況③ …… 66
図版４　発掘調査状況④ …… 67
図版５　発掘調査状況⑤ …… 68
図版６　発掘調査状況⑥ …… 69
図版７　発掘調査状況⑦ …… 70
図版８　発掘調査状況⑧ …… 71
図版９　発掘調査状況⑨ …… 72
図版10　発掘調査状況⑩ …… 73
図版11　出土遺物 …… 74

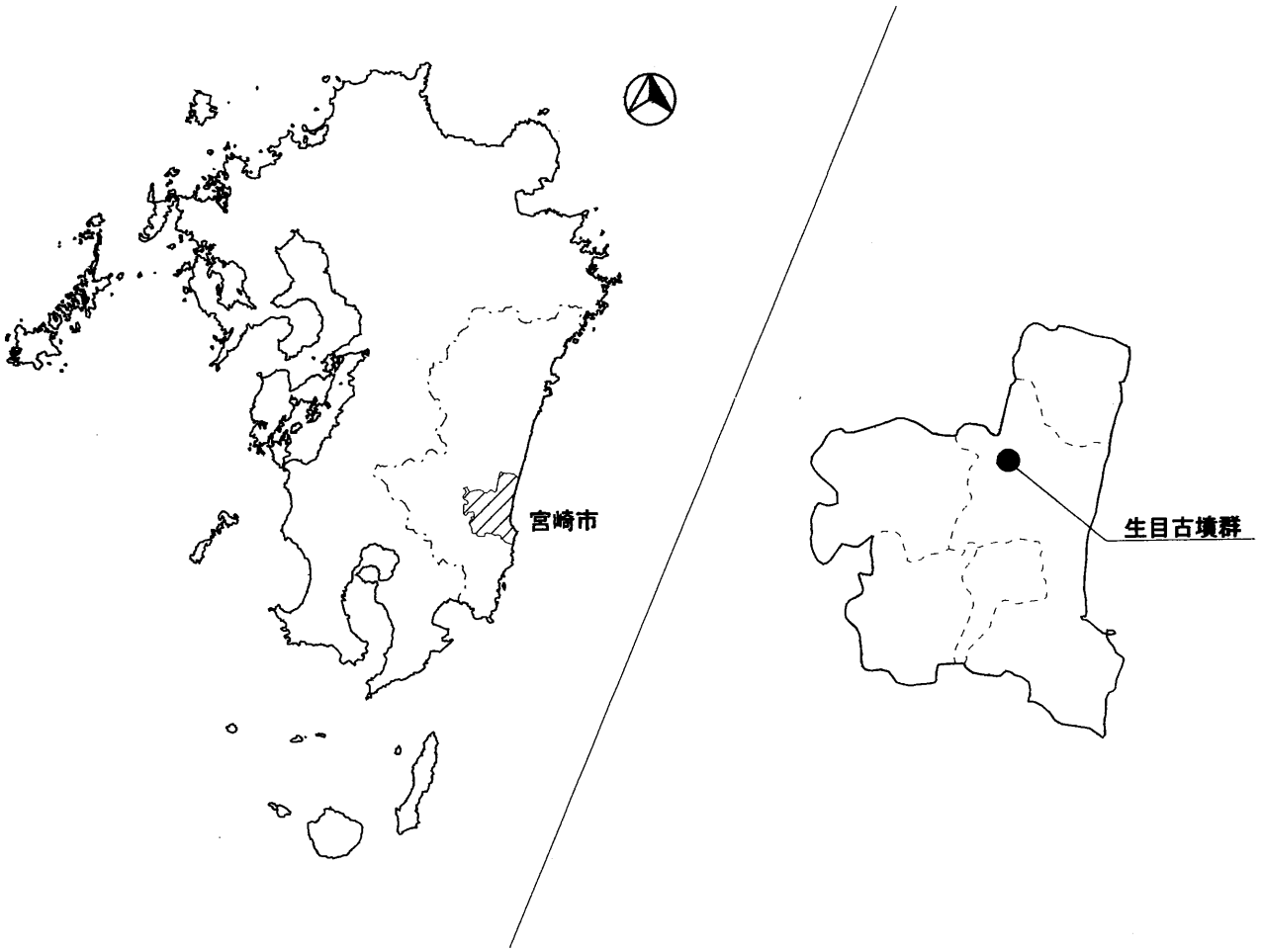
第Ⅰ章　生目古墳群の概要

第１節　立地と環境

（１）立地と環境

生目古墳群の所在する宮崎県宮崎市は、九州島の南東端に位置し、東は日向灘に面している。平成 18 年１月に近隣の佐土原町、高岡町、田野町、平成 22 年３月に清武町と市町村合併をおこない、現在、人口約 39 万人の中核市である。

宮崎市の地形を概観すると、宮崎市の大部分は、県北の美々津・県央の綾・宮崎市南の青島を結んで三角形状に広がる宮崎平野上に位置しているが、北西側には九州山地、南西側においては、標高 1119mの鰐塚山に代表される南那珂山地が連なる。宮崎平野は、主として宮崎層群を基盤としており、宮崎市内においては、標高 20 ～ 80mの台地と標高 10mにも満たない低地からなっている。日向灘に面している東側は、30ｋｍあまりの砂浜海岸であり、大淀川左岸以北の一ッ葉海岸・住吉海岸一帯には、砂堤の発達がみられ、三列の砂丘が南北に走る。宮崎市内を流れる主要河川としては、県下最大の大淀川があげられる。大淀川は、宮崎市の西方、鹿児島県中岳を発し、都城盆地を東流する。宮崎市に入ると蛇行しつつも、市街地を南北に分断しながら、日向灘に注ぐ。この大淀川の沖積作用と海退現象が宮崎平野の形成に大きく寄与したと考えられる。



第１図　宮崎市の位置

生目古墳群は、宮崎市の中央部、市街地から北西へ約７ｋｍのところにある跡江丘陵上とその周辺平地に分布している。この跡江丘陵は、東西 1.2ｋｍ、南北 1.3ｋｍ、標高 25 ～ 28mを測り、最下層に宮崎層群、その上には 24,000 ～ 25,000 年前鹿児島県の姶良カルデラより噴出したテフラ「姶良入戸火砕流堆積物」（以下、シラス）が 10m近く堆積しており、それを基盤層とする独立丘陵である。

跡江丘陵上及び、周辺には各時代の遺跡が多数所在している。縄文時代では、跡江丘陵南東端部に跡江貝塚が所在し、縄文時代早期の押型文土器・塞ノ神式土器など多種にわたる土器が出土している。また本遺跡から北東へ約 1.2ｋｍの大淀川をはさんだ対岸に同じく縄文時代早期の柏田貝塚が所在する。弥生時代では、跡江丘陵上の南東部に弥生時代中期の環濠集落が確認された石ノ迫第２遺跡が所在し、弥生時代中期の集落のほか、土坑墓群、古墳時代の地下式横穴墓、円墳の周溝６基（生目古墳群指定墳 45 ～ 50 号）が確認されている。また、本遺跡内においても、これまで２基の円形周溝墓をはじめ、数基の土坑墓が確認されており、古墳直下での弥生時代の遺構の存在が想定される。

古墳時代に入ると、跡江丘陵上とその周辺において本古墳群が造られるわけであるが、それ以外では、跡江丘陵の北端にある生目１号墳の周囲と生目３号墳西の段丘崖裾部から合計９基の跡江横穴墓が所在している。このうち、生目３号墳西の段丘崖裾部の４基については、土地造成工事の際の発見であり、現在は消滅している。跡江丘陵周辺からは、南東約 800mの位置には間越遺跡が所在しており、弥生時代後期後葉、古墳時代中期～後期の集落が確認され、古墳時代の竪穴住居 30 軒余りを始めとして掘立柱建物、土坑、溝状遺構、地下式横穴墓が検出されている。また跡江丘陵から北東へ約 700mの位置に大屋敷遺跡が所在しており、古墳時代中期の住居跡１軒と古代の住居跡２軒が確認されている。これら２つの遺跡が、本遺跡である生目古墳群の造営に携わった集団の居住域であった可能性は濃厚であるが、両遺跡からは古墳時代前期の住居跡は見つかっておらず、いまだ古墳の築造時期との完全なる重複にはいたっていない。

古墳時代以降の遺跡では、本遺跡から南西に約 600m、現在、生目の杜スポーツ公園が立地する場所に深田遺跡が所在する。深田遺跡は、古代の掘立柱建物、土坑、溝状遺構、井戸や近世の掘立柱建物、柵列、土坑などが検出された集落遺跡である。また中世期に入ると、跡江丘陵上南東部に跡江城が築かれ、生目古墳群の史跡範囲においても、中世期の溝・道路・ピットといった遺構が確認される。特に生目３号墳では、後円部３段目の肩口を削る形で薬研掘を巡らしていることが発掘調査で確認されており、後円部墳頂部に山城もしくは陣に伴う施設が構築されていた可能性がみられる（宮崎市教委 2001）。

さらに、跡江丘陵の北東側の平地には江戸時代における庚申塔・供養塔が点在していることから、本遺跡周辺は古来より連綿と人々にとって住みよい土地であったことがうかがえる。

【参考文献】

旺文社　1988 『宮崎県風土記』
宮崎県　1988 『宮崎県史　資料編　考古１』
宮崎県　1993 『宮崎県史　資料編　考古２』
宮崎市教育委員会　1999 『石ノ迫第２遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 40 集
宮崎市教育委員会　2001 『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ』 宮崎市文化財調査報告書第 46 集
宮崎市教育委員会　2001 『深田遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 47 集
宮崎市教育委員会　2001 『間越遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 48 集
宮崎市教育委員会　2009 『大屋敷遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 77 集

1．生目古墳群　2．笠置遺跡　3．柏田貝塚　4．大屋敷遺跡
5．堂原遺跡　6．跡江横穴墓群　7．石ノ迫遺跡　8．石ノ迫第2遺跡
9．跡江城　10．跡江貝塚　11．井尻遺跡　12．深田遺跡
13．八反田遺跡　14．沖ノ田遺跡　15．雀田遺跡　16．間越遺跡
17．平岩墓地遺跡　18．平岩遺跡　19．石塚遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（S＝1/20000）

（2）生目古墳群の概要

国史跡生目古墳群のこの「生目（いきめ）」とは、昭和18年に国史跡として指定を受けた当時、生目村に所在する古墳群ということでこの名が付いている。その生目村は昭和38年に宮崎市と合併し、現在、「生目」とは古墳群から南に4ｋｍほどの地区を指しており、古墳群が所在する地区そのものは「跡江（あとえ）」であることから、地元ではいささか違和感のある名称となっている。

指定当時、古墳群には43基の高塚古墳が存在していた。その後、幾度かの踏査や確認調査によって、平成18年の追加指定までに51基にまで増えている。高塚墳の大半は標高25～28mの丘陵上に立地するが、4基の円墳については丘陵周囲に広がる沖積地に所在する。これら51基は、前方後円墳8基、円墳43基で構成されている。この前方後円墳8基のうち、1号墳、3号墳、22号墳の3基は墳長が100mを超す大型の前方後円墳で、いずれも4世紀代の築造と考えられ、単一古墳群でこのような例は、九州のみならず岡山県以西でも唯一のものである。特に、3号墳は長さ143mで九州第3位、古墳時代前期に限れば第1位の大きさを誇り、南九州でも突出した首長の存在を想起させる。しかし、生目古墳群が大規模な古墳を築造するのは4世紀の後半までであり、それ以後は60m前後の前方後円墳の築造となり、今回報告する5号墳もその時期に築造された古墳と考えられ、古墳群における前方後円墳築造の終焉は5世紀後半（ＴＫ23段階）の7号墳とされる。

これらの古墳の大半はとても広大とはいえない丘陵上に立地しており、限られた空間でありながら、いくつかの群が見られる。今回は便宜的にＡ～Ｇ群の7群に分ける。Ａ群は1号墳を主体とするもので、古墳の大半が立地する丘陵とは別の独立した丘陵上に位置する。1号墳は、ほぼ東西方向に主軸をもち大淀川の対岸からも遠望できる。1号墳の東側に円墳の2号墳と他3基の円墳が在る。古墳の大半が立地する丘陵には、古墳が所在しない空白地帯があり、確認調査やレーダー探査でも、古墳時代に相当する遺構は殆ど確認されていない。この空白地帯の北にはＢ群があり、古墳群内で最も高塚墳が密集する一帯である。前方後円墳の3号墳、5号墳、7号墳、円墳の9号墳が含まれ、それぞれの周囲には多数の円墳がある。空白地帯の東に4基の円墳のみで構成されるＣ群、空白地帯の西には前方後円墳の14号墳と円墳1基で構成されるＤ群、空白地帯の南には21～23号墳という前方後円墳のみで構成されるＥ群がある。Ｅ群のさらに南、丘陵でいえば南縁あたる一帯に円墳のみで構成されるＦ群がある。また、Ｂ群の西方にはやはり円墳のみで構成されるＧ群がある。今回の群構造の区分けは、あくまでも古墳配置図上で便宜的に分けたもので、現段階では群内での系譜を追える状況でない。ただ、古墳配置図上でもう一点気付くこととして、Ｂ群の3号墳、Ｄ群の14号墳、Ｃ群の22号墳は、墳丘の主軸をほぼ同じに採っており、古墳群内での首長系譜を解明する上での材料のひとつになるかもしれない。

平成10年度以降の史跡整備に伴う発掘調査以後、生目古墳群で新たな事実として注目されたのが、地下式横穴墓の存在である。これまでに45基確認されており、前方後円墳の周囲に寄生するような状態築造されるのが特徴である。生目古墳群における地下式横穴墓は遅くとも5世紀の早い段階から築造を開始しており、4世紀代に位置づけられる3号墳や22号墳でも周囲に地下式横穴墓の構築が確認されており、その開始時期についても今後遡る可能性がある。地下式横穴墓は墳丘周囲の周溝の外縁付近で検出され墳丘とは反対側に玄室を設けることが多く、3号墳、7号墳、21号墳での検出が著しい。ただ、7号墳では前方部と後円部、それぞれに造られる大規模な地下式横穴墓の存在も明らかになっており、特に後円部に造られる地下式横穴墓（18号）は埋葬主体の可能性として注目される。地下式横穴墓についてはⅡ章であらためて解説をおこなう。

第３図　生目古墳群主要部分古墳配置図（S=1/3600）

第1表　生目古墳群高塚古墳一覧

現No	旧No	墳形	規模(m) 長×円径×高	規格	葺石	出土遺物	備考
1	6	前円	136×86×17		有		
2	5	円	27				
3	17	前円	143×88×12.7	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世？の薬研掘の溝が巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×29×4.4	後円部前方部2段	有	円筒埴輪？、壺形土器、高杯	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造り出し有	有	土師器(甕、壺、椀、高杯)、須恵器(杯、高杯、ハソウ、把手付鉢、大甕、脚台付壺、筒型器台、石製垂玉、石製小玉、石製紡錘車	後円部中心に向かって、18号地下式を構築、その他周溝内から8基、周溝外から4基の地下式横穴墓を確認
8	22	円		無段築	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25	円	34				
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×38×4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より20号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16				
17	32	円	14				
18	29	円	17				
19	28	円	15				
21	35	前円		後円部2段	無	壺形埴輪	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段か？	有	壺形埴輪、土師器甕、高杯、壺	周溝内より 張り出し部、23号地下式横穴墓を確認
23		前円	57×30×4.9		有		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認(5号墳と7号墳の間)
32	未G	円			無		平成16年度確認(7号墳南側)
33	41	円			無		平成14年度確認(9号墳・新30号墳間)・概報Ⅵで旧15号墳と誤認・誤表記
34	42	円					
35	36	円					
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12・13号地下式を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

第２節　生目古墳群の地形

生目古墳群の大半が立地する跡江丘陵は、地元では「シラス」と呼ばれる 24,000 ～ 25,000 年前鹿児島県の姶良カルデラより噴出したテフラ「姶良入戸火砕流堆積物」(以下、シラス) が厚く堆積し、それが後に侵食され形成された独立した丘陵である。その後、6,300 ～ 6,500 年前のアカホヤ火山灰 (以下、K - Ah)、10 ～ 13 世紀の霧島大谷第 5 テフラ「霧島高原スコリア」(以下、Th-S) と大淀川下流域で発掘調査をする上で鍵層となるテフラがこの跡江丘陵上でも安定して確認される。以下に示した基本層序は古墳群内における全般的な層序であり、丘陵上すべてを網羅するものではなく、特に、Ⅵ層までは近年の耕作により削平されている部分が多い。なお、厚く堆積するシラス層の以下には拳大の砂岩円礫を主体とする層が 1mほど堆積し、さらに下には宮崎平野の基盤をなす「宮崎層群」(150 ～ 700 万年前に堆積) がみられる。

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：黒褐色土 (0 ～ 50 cm)

純粋な自然堆積ではなく、旧耕作土を主体とする層。場所によっては桜島第 3 テフラ (1471 年　通称「文明ボラ」)、霧島新燃享保軽石 (1717 年) を認めることができる。本土壌形成時に、墳丘墳端部、周溝外縁の立上りを削平されている場所が多い。近世以降の遺物を包含する。

Ⅲ層：黒色土 (0 ～ 30 cm)

黒ボク土に Th-S を含んだ層。Th-S 自身が密集して層をなす場合もある。Th-S は古墳群内の安定した平場では削平・撹乱を受けていない限り堆積し、墳丘平坦面、周溝内でも容易に認められる。当古墳群で発掘調査をする上で、一番重要な層であり、本層からは慎重な掘下げ作業を行なわなければならない。また、10 号墳や 22 号墳前方部とされていた「隆起」が、本層の上位で盛土をおこなっていたため、墳丘盛土ではないということが判明した。またそれとは逆に墳丘との判断が不明確であった 27 号墳と 31 号墳は本層を覆土とする盛土が確認されたため、墳丘として認定することができている。なお、中世期における遺構の堆積土にも本土壌が混入しており、その時期を判定する上でも重要なものとなる。

Ⅳ層：黒色土 (0 ～ 30 cm)

墳丘構築後の黒ボク土の自然堆積層。本丘陵上では、黒ボク土の堆積中に古墳の構築が行われているため、本来は次のⅤ層と同一堆積層なのかもしれないが、古墳の整形、覆土、周溝埋土を検討するに当たっては異なる層として取り扱わなければならない。そのため古墳構築の影響のない平坦面には存在しない。Ⅴ層とは基本的に違いがみられないが、周溝内に堆積する本層は周溝壁面、底面の地山となるⅥ～Ⅶ層が混合されるためか、Ⅴ層よりも僅かに砂質を帯びる傾向がある。さらに、下位の周溝底面に近くなるとさらにその影響が強くなり、褐色層 (Ⅳb 層) を認めることができる。墳丘から流れ込んだ遺物を包含する。

Ⅴ層：黒色土 (0 ～ 50 cm)

古墳構築面となる黒ボク土の自然堆積層。先述したとおり、Ⅳ層と基本的に違いがなく、互いが直接重なった際は非常に難しい調査となる。基本的に墳丘では本層以下を地山整形、これより上が盛土整形となる。また、弥生時代中期後半から終末期における集落の文化層も含まれており、この層以下で相当期の遺構遺物が確認されることが多い。

Ⅵ層：アカホヤ土 (0 ～ 30 cm)

K - Ah の堆積層。橙色、黄褐色であり、丘陵全体に広がる。無遺物層である。本層と次のⅦ層付近が

墳丘基底部となることがほとんどである。また、14号墳周辺では、本層の風成層が堆積しており、他と比べしまりがなく、色が淡い。

Ⅶ層：暗褐色土（80 cm前後）

ローム層。さらに、2層に分けることができ、上位は硬くしまるが粘性が無く壊れやすいが、下位は上位に比べしまりがあり粘性を帯びる。墳丘基底部付近から、周溝底面に認められる。古墳群内の地下式横穴墓は本層内で玄室天井を納める。縄文時代早期の跡江貝塚の文化層でもあり、その時期に相当する土器、焼石が確認されることが多い。下位の層では、霧島小林軽石（14,000 ～ 16,000 年前）が認められることがある。

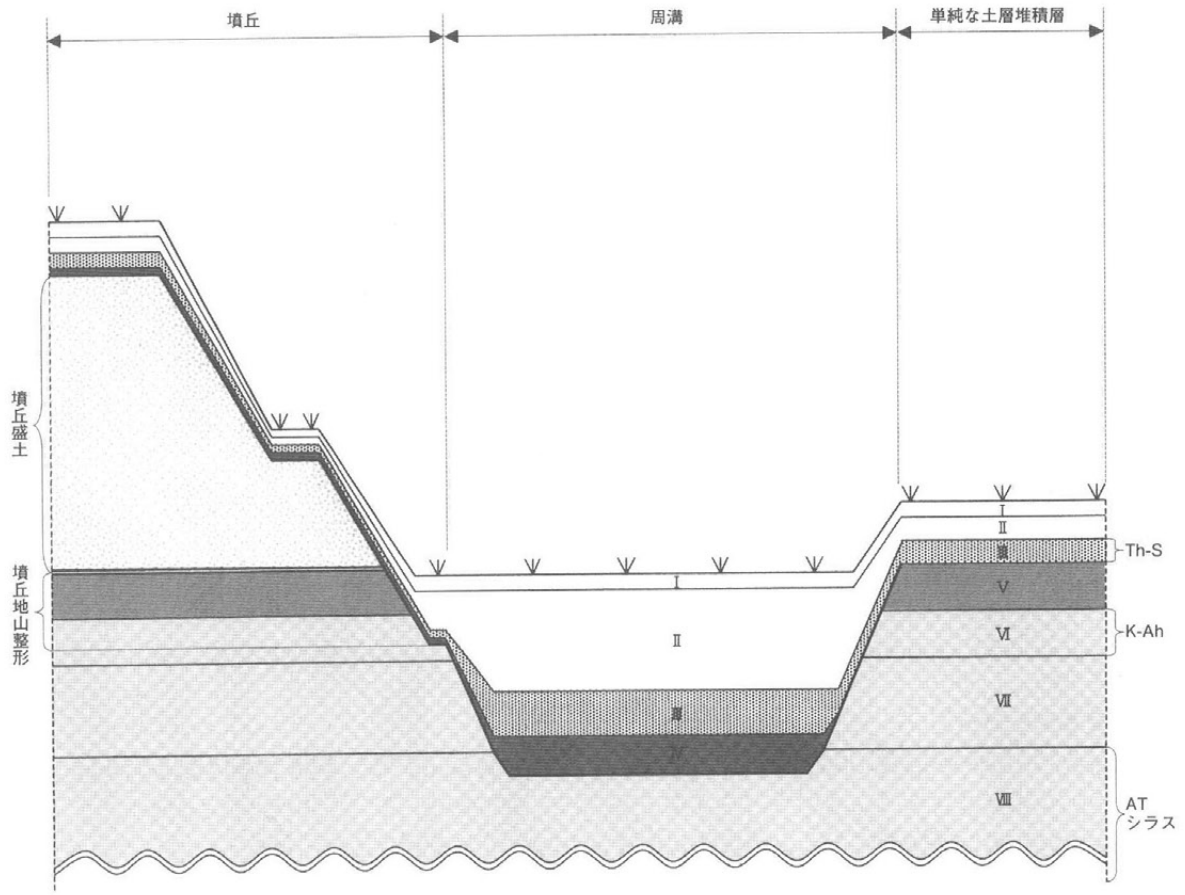
Ⅷ層：シラス（500 cm以上）

跡江丘陵の基盤層。場所、高さの違いで、橙色、白色、桃色のものがみられる。無遺物層である。周溝を深く設ける3号墳、7号墳、22号墳では底面がシラス層に達するものがあり、7号墳で見られた地下式横穴墓の竪坑上の封土の主体もこのシラスであり、玄室がその層まで達していることが窺える。なお、このシラスと同様の姶良カルデラより噴出したテフラである姶良丹沢火山灰（AT）も、場所によっては確認されているが、今回は同層として扱う。

【参考文献】

宮崎県　1997 『宮崎県史　通史編　原始・古代1』

宮崎市教育委員会　2007 『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅶ』 宮崎市文化財調査報告書第65集



第4図　基本層序模式図

第３節　大淀川下流域の古墳群

生目古墳群の位置する宮崎平野南部には宮崎県下最大の河川である大淀川が東流する。この大淀川が宮崎平野にさしかかる下流域には、生目古墳群をはじめ数多くの古墳、地下式横穴墓、横穴墓が確認されており、古墳時代当時においても、大淀川が人々の暮らしに様々な恩恵を与えていたことが感じ取れる。以下、大淀川下流域を中心に主だった古墳の分布と変遷を概観する。

宮崎平野において３世紀代まで遡る古墳は確認されておらず、最初の首長墳系譜として挙げられるのが生目古墳群である。生目古墳群は、現在、前方後円墳８基、円墳 43 基、地下式横穴墓 45 基を数える古墳群である。そのうち、１・３・22 号墳は 100mを超える前方後円墳であり、築造年代は１・３号墳が墳丘形態から、22 号墳は発掘調査の結果から３基とも４世紀代に比定される。この時期の古墳の規模としては、大淀川流域だけでなく、九州の中でも最大級の規模の前方後円墳を継続して築造していることから、当時の生目は、南九州における盟主的な地位にあり、生目を中心とした首長連合の存在が想定される。４世紀後半築造とされる生目 22 号墳を最後に生目古墳群内の前方後円墳はその規模を縮小していく。その後、宮崎平野北部の一ツ瀬川流域に位置する西都原古墳群では男狭穂塚・女狭穂塚古墳といった共に 170mを超える前方後円墳が築造され、その類型墳が一ツ瀬川流域一帯を中心に築造されている。このことから、この時期には西都原への盟主権の移動が見て取れる。それだけでなく、大淀川下流域では、生目古墳群の規模が縮小するのと同時に対岸の下北方古墳群の築造がはじまり、約７ｋｍ上流の本庄古墳群では、前期から連綿と全代にわたって前方後円墳の築造がおこなわれているが、この時期に呼応してその規模が拡大していく傾向がみられる。その後、生目古墳群は５世紀後半の７号墳を最後に前方後円墳の築造が終わり、それに平行して、下北方古墳群では累代的に前方後円墳が築造される。特に６世紀に入ると墳長 100m級の 13 号墳が築造されており、この時期には下北方は宮崎平野南部における第一勢力であったと考えられる。以後の主だった古墳としては、下北方古墳群より南東に約１ｋｍのところにある船塚古墳、大淀川河口付近から南に約１ｋｍのところに位置する赤江町古墳（福長院塚）が大淀川下流域の最後の有力首長墳として挙げられている（今塩屋　2009)。その他では、同下流域の本庄古墳群や宮崎平野北側を流れる石崎川流域付近の住吉古墳群などがあるが、具体的な調査が行われておらず、今後これらの古墳群がどう関わってくるのか課題となるところであるが、現在までの調査結果等を踏まえると、大淀川下流域においては、６世紀中～後葉頃に古墳の築造は終わり、代わって横穴墓、地下式横穴墓が盛んに造られており、群集して分布している。

【参考文献】

有馬義人　2006 「南九州における前期古墳編年の検討」『前期古墳の再検討』 第９回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

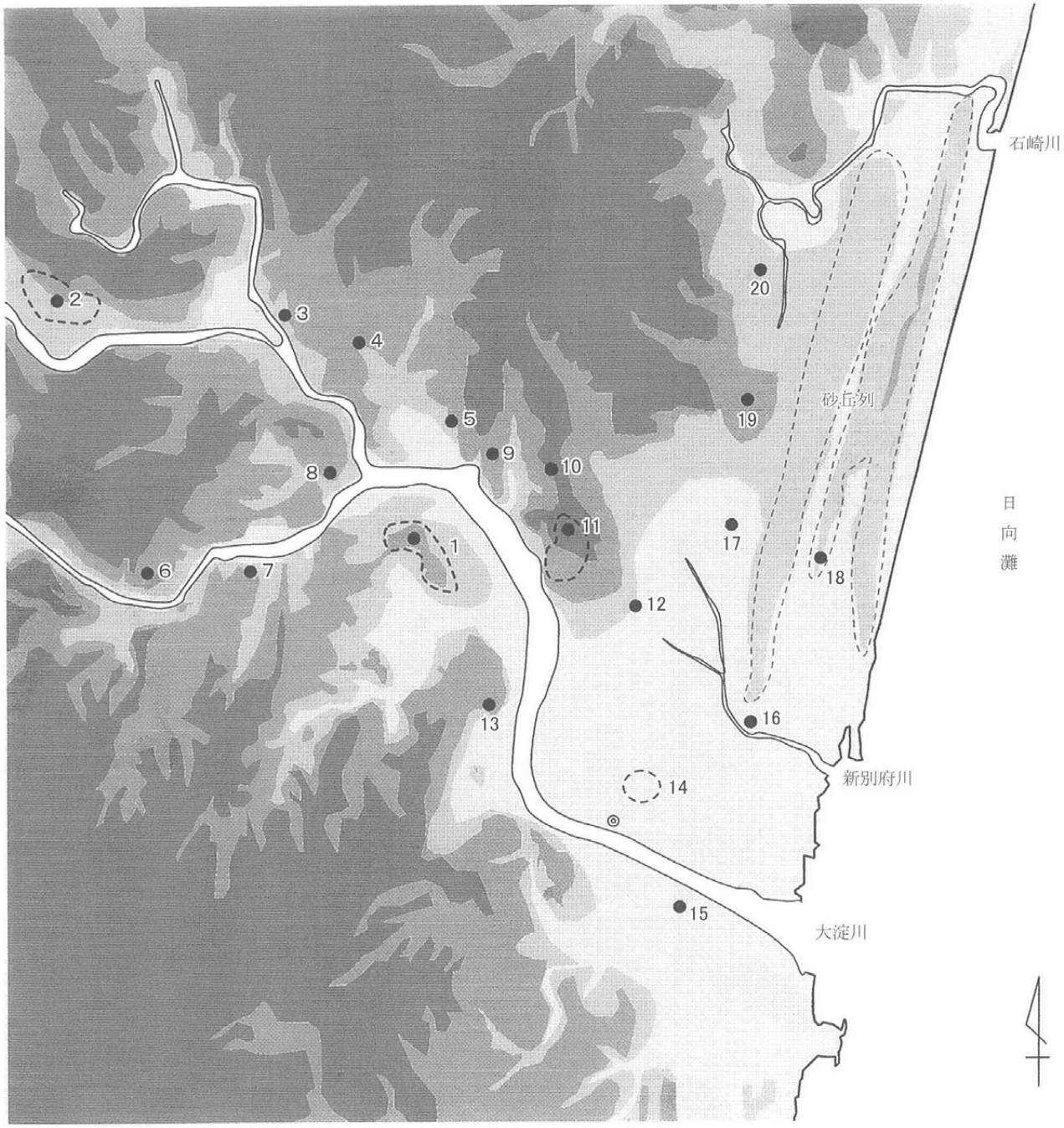
今塩屋毅行　2009 「日向における後・終末期古墳」『終末期古墳の再検討』 第 12 回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

竹中克繁　2003 「３.南部平野部の古墳と古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』 第 29 回九州古墳時代研究会資料集　九州古墳時代研究会

藤井大祐　2007「九州南部の中期古墳」『九州島における中期古墳の再検討』 第 10 回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

宮崎県　1993 『宮崎県史　資料編　考古２』

宮崎市教育委員会　2006 『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅵ』 宮崎市文化財調査報告書第 61 集



1．生目古墳群　2．本庄古墳群　3．木脇古墳群　4．野首古墳
5．アブミ古墳群　6．高岡町古墳　7．生目村古墳　8．倉岡村古墳
9．瓜生野村古墳　10．池内横穴墓群　11．下北方古墳群　12．船塚古墳
13．大淀古墳群　14．広島古墳群　15．赤江町古墳　16．檍古墳群
17．村角古墳　18．山崎古墳　19．蓮ヶ池横穴墓群　20．住吉古墳群

第５図　大淀川下流域周辺古墳分布図

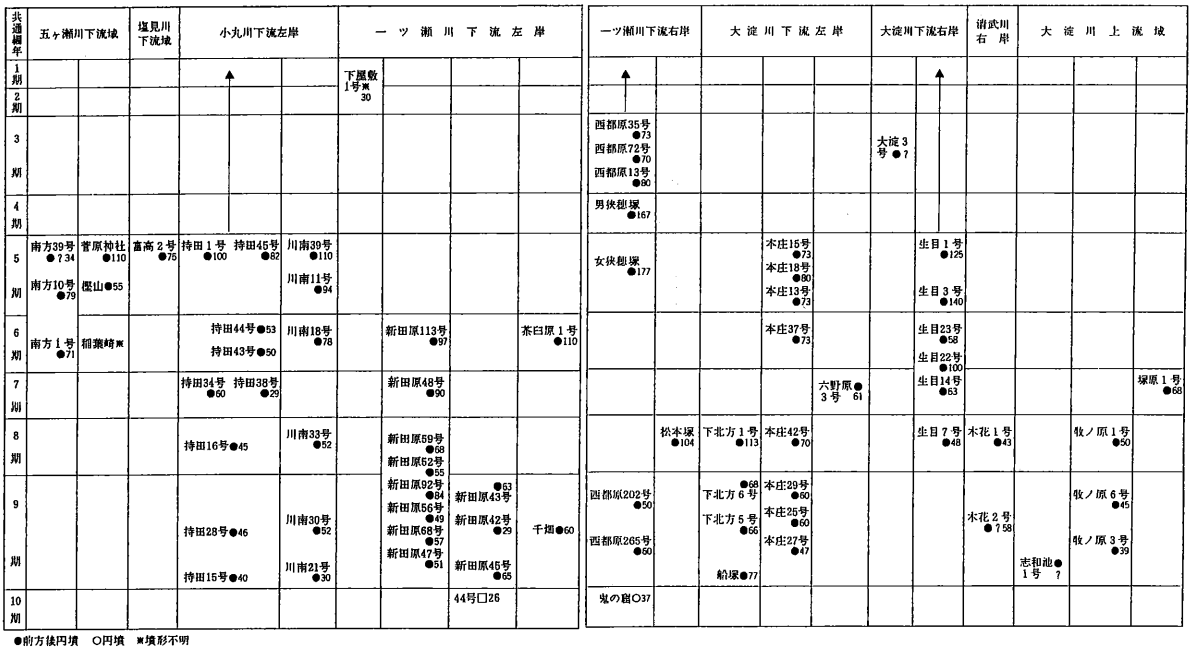
第４節　生目古墳群の研究史― 編年的位置付けの推移 ―

宮崎県内の古墳は、戦前、戦中に国指定、県指定史跡となったものが多く、非常に多くの古墳が今日まで良好な状態で保存されてきた。その反面、発掘調査による内容解明が殆ど行われず、結果、時間的位置付けをするに確定的なものがなく、1990 年代前半まで、根拠不明のまま古墳時代中期以降に位置付けられてきたものが多い。

生目古墳群も例外ではなく、野間重孝氏は、１号墳、３号墳については古式古墳の形態を備えるとしながらも、古墳群としては「古墳時代中期前半には築造が行われ始めたものと思われる」としている（野間 1993）。また県内全域の主要古墳を対象として詳細な時間軸上の位置付けを行った長津宗重氏の編年では、１号墳、３号墳が集成編年５期に、23 号墳、22 号墳、14 号墳が６・７期に、７号墳が８期に比定され、中期段階の累代的首長墓系譜と位置付けられている（長津 1995）。

生目古墳群中の１号墳、３号墳、22 号墳は墳長 100m を超える大型墳であり、特に 143mの３号墳は、西都原古墳群中の女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳に次いで九州第３位（ないし４位）の規模を誇る。しかし、５世紀前半に位置付けられる女狭穂塚・男狭穂塚古墳と同時期の築造と見られたことから、その影に隠れ、研究者間での認識は薄かったようである。長津氏の編年図から見て取れるように、生目古墳群に限らず、宮崎県地域には、前期に遡る古墳は殆ど存在しないと考えられてきた。

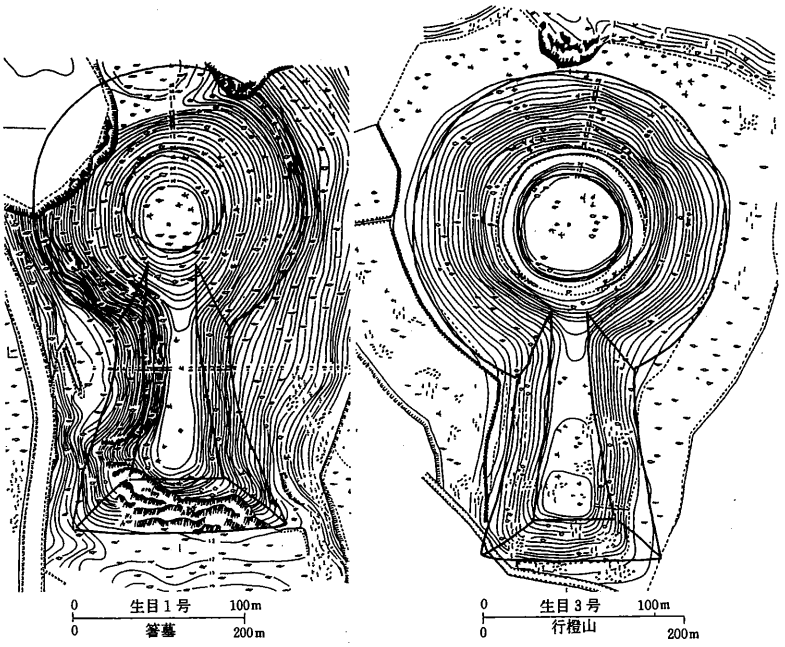
これを、「前半期古墳の年代を必要以上に引き下げる傾向が少なくない」（柳沢 1995ｂ）と指摘し、その時間的位置付けの大胆な見直しを行ったのが柳沢一男氏である。氏は、発掘調査により内容が判明している古墳の少ない当地域において、その時間軸上の位置付けを検討する方法として現況測量図による墳丘規格の比較という手法を用い、主要古墳の多くが、古墳時代前期に遡ることを論証した（柳沢 1995ａ・ｂ）。また、そうして導き出された、従来の編年観とは大きく異なる首長墓の変遷により、首長連合の形成と盟主墳の存在、盟主権の移動など、日向地方における古墳時代政治史をダイナミックに描き出している。生目古墳群については、1940 年頃に原田仁氏によって作成された測量図と、1977 年に宮崎市教育委員会が作成した航空測量図の二種を用いて詳細に検討し、１号墳が箸墓古墳の１/２規模の、３号墳が行燈山古墳の３/５規模の相似形墳である可能性が高いことを指摘し、１号墳を集成編年



●前方後円墳　○円墳　✖墳形不明

第６図　長津宗重氏による宮崎県地域の主要古墳編年図（長津 1995 より転載）

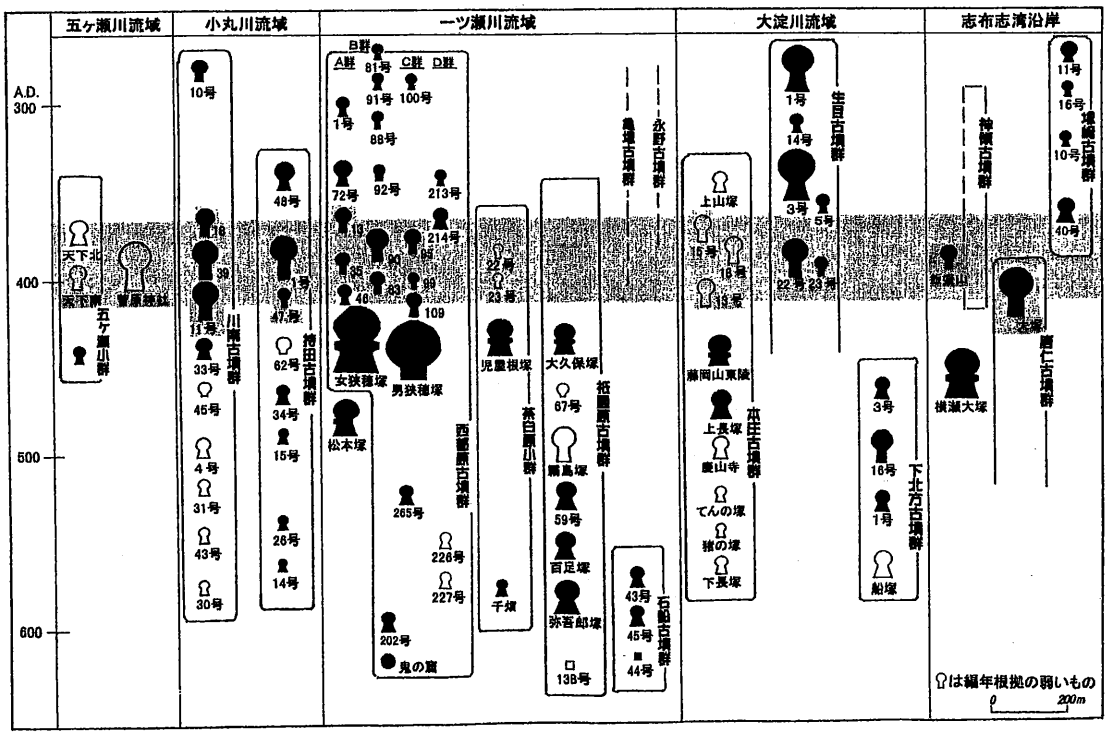
1期、3号墳を3期、22号墳を4期に比定した。その後、氏を中心とした宮崎大学考古学研究室による墳丘測量図の作成が行われ、これをもとに3号墳を渋谷向山古墳の1/2規模の相似墳として評価し直すとともに、5号墳、7号墳、14号墳、23号墳の時間的位置付けも行われている（柳沢1997・1999）。



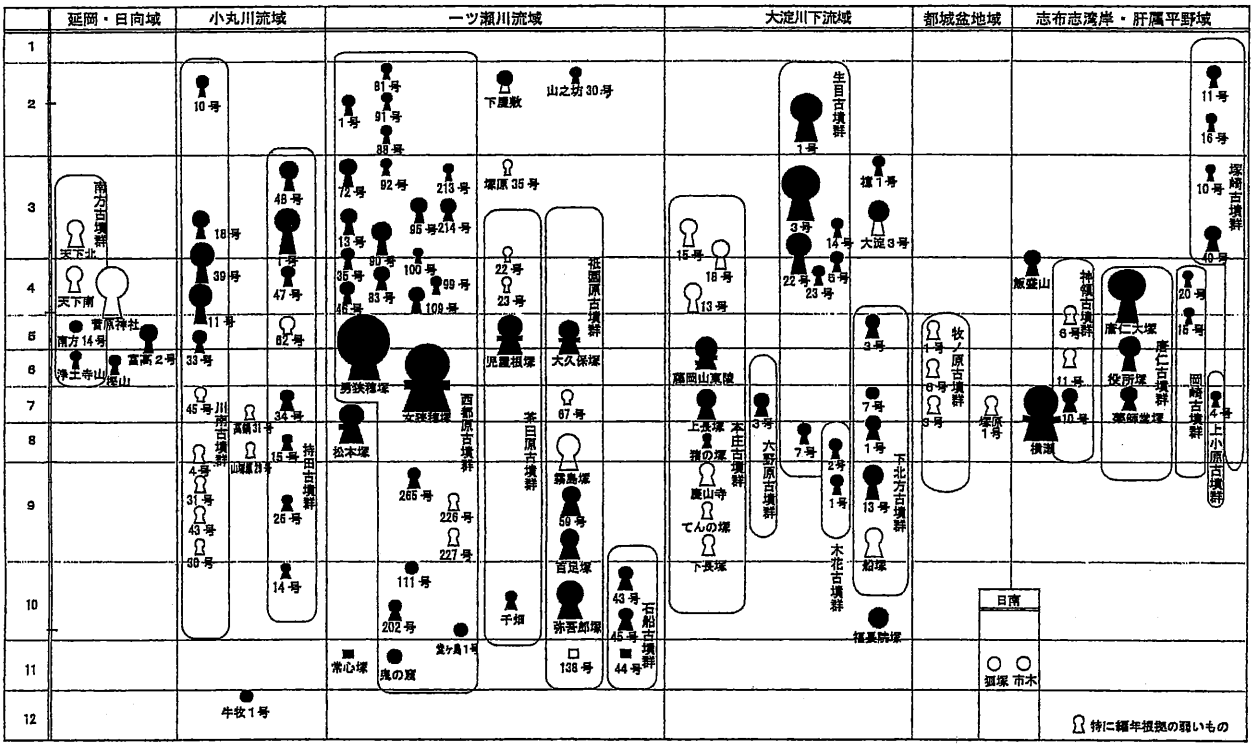
第7図　柳沢一男氏による墳丘規格の研究（柳沢1995bより転載）

生目古墳群の首長墓系列が前期に遡る可能性を指摘した氏の論考は他の研究者に大きな影響を与え、以降、最初の首長墓と目される1号墳の築造時期を、どこまで遡らせるかについては各研究者間で齟齬があるものの、生目古墳群は前期を中心とした首長系譜として認識されることとなった（北郷1995, 東1997）。

柳沢氏の生目古墳群に対する再評価と前後するタイミングで始まった宮崎市教育委員会による発掘調査では、現在までに、21号墳（平成19・20年度調査による新規発見の前方後円墳。墳長30m強。平成22年度概要報告書刊行予定）から集成編年2期後半から3期に比定される二重口縁壺が、22号墳からは4期に比定される土師器が、また5号墳、14号墳からは底部穿孔二重口縁壺を祖形に発展したと思しき異形の埴輪が出土している。生目古墳群が前期に遡る首長系譜であることは、発掘調査からも実証されつつあると言え、近年の編年研究は、柳沢氏の編年案を基に、発掘調査の成果を用いて修正を



第8図　柳沢一男氏による南九州の主要古墳編年図（柳沢2003より転載）



柳沢2003をもとに改変作成

第９図　橋本達也・藤井大祐氏による南九州の主要古墳編年図（橋本・藤井 2007 より転載）

加えるという形になっている(稲岡 2003, 有馬 2006, 橋本・藤井 2007)。

これまでに述べてきた先学の編年案を概観すると、生目古墳群の位置付けを大きく変えた 1995 年の柳沢氏の論考以前より、100m 級の３基については１号墳→３号墳→22 号墳という相対的順番になること、および前方部の大型化した７号墳を最後の首長墓とすることは各研究者間で共通している。また柳沢氏の論考以降、１号墳を集成編年１期とするか２期とするかは研究者間で意見の分かれるところであるが、３号墳を３期に、22 号墳を４期に比定するということ、および最後の首長墓である７号墳の登場以前、中期前半段階に首長系譜の断絶期を設けることは、各研究者間での共通認識となっている。何より、古墳時代前期を中心とした首長系譜であるとの認識が一致していることが重要であろう。

柳沢氏の一連の研究を契機として、生目古墳群の、「墳長が 100m 以上の前方後円墳が一古墳群内で継続する前期の首長墓系列は、九州内はおろか、吉備以西最大」(柳沢 1998) というその実像が明らかになるとともに、古墳時代前期の南九州における盟主的首長系譜と目されるようになった。

ただし、発掘調査によりその時間的位置付けが定まっているのは、先述の 21 号墳と 22 号墳、およびＴＫ23 型式の須恵器が出土した７号墳の３基のみである。また異形の埴輪を出土した５号墳、14 号墳については、研究者間での位置付けが定まっていない。何より、最初の首長墓と目される１号墳と、古墳群中最大規模の３号墳という、首長墓系列の中で最も主要な位置を占める古墳について、発掘調査からの築造時期確定がなされていないのが現状である。今後、これら研究史上の重要性も考慮し、発掘調査を進めていく必要があろう。

【参考文献】

稲岡洋道　2003　「３．４ 生目古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』第 29 回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集　九州古墳時代研究会

長津宗重　1992　「第９章 日向」『前方後円墳集成』九州編　山川出版社

長津宗重　1995　「②日向」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同学会発表要旨資料

九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会
野間重孝　1976　「生目古墳群内にみる横穴出土遺物」『宮崎考古』第２号　宮崎県考古学会
野間重孝　1981　「生目古墳群内にみる古式須恵器」『宮崎考古』第７号　宮崎県考古学会
野間重孝　1993　「第２章 第７節 85 生目古墳群」『宮崎県史』資料編 考古２　宮崎県
橋本達也・藤井大祐　2007　『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』　鹿児島大学総合博物館
東　憲章　1997　「第４章 第３節 五 大淀川下流域」『宮崎県史』通史編 原始・古代１　宮崎県
北郷泰道　1995　「日向」『全国古墳編年集成』　雄山閣出版
柳沢一男　1995a　「日向・筑紫－古墳時代最大の内戦の地」『歴史を読みなおす２ 古墳はなぜつくられたのか』朝日百科 日本の歴史別冊　朝日新聞社
柳沢一男　1995b　「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第９号　宮崎県
柳沢一男　1997　「第１章 9 宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書』　宮崎県前方後円墳集成　宮崎県
柳沢一男　1998　「宮崎県生目古墳群」『季刊考古学』第 65 号　雄山閣出版
柳沢一男　1999　「古墳時代日向の王と生目古墳群」『浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』　生目古墳群シンポジウム '99 資料集　宮崎市教育委員会
柳沢一男　2003　「南九州における古墳の出現と展開」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』　第６回九州前方後円墳研究会発表要旨集　九州前方後円墳研究会

第５節　生目古墳群の発掘調査歴

生目古墳群は昭和 18 年９月８日に国史跡として 53,456.83 ㎡が指定を受けた。それ以前の昭和 16 年、原田仁によって、１号墳、３号墳、22 号墳の墳丘測量図が作成された。当時のものとしては非常に精度の高いものであり、平成になり詳細な墳丘測量図が作成されるまでは、最も細かいものであった。
史跡指定後、30 年余りは生目古墳群に関する保護の方向性はとくに定められていなかった。その間、古墳群が立地する丘陵上では「上ノ迫土地改良事業」が昭和 36 ～ 38 年にかけて行なわれ、古墳が開発の危機にさらされることもあった。

昭和 51 年、ようやく生目古墳群における史跡の保全の方向性を定めた「生目古墳群保存管理計画策定書」が纏められた。平成５年に「宮崎市制 70 周年記念事業」に生目古墳群史跡公園整備事業が取り上げられ、同年から３ヵ年をかけ、古墳の周辺部及び周辺域を対象とした「生目古墳群周辺遺跡発掘調査」を行なった。平成８年には生目古墳群整備委員会が発足、平成 10 年に「生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書」が作成された。

その間の平成 8 年には古墳群そのものの考古学的価値を再認識させる材料となった宮崎大学考古学研究室による墳丘測量図の作成がある。前方後円墳の３･5･7･14･22･23 号墳の墳丘測量図の作成が行なわれた。平成９年以降、国庫補助を受け史跡公園化に向けた本格的な発掘調査を開始した。

平成 18 年２月６日には、墳丘単位程度しか括られていなかった史跡指定地を、それまでの調査結果等を踏まえ、古墳とその周辺、及び周辺域を一体的に保護することを目的とし、89,525.27 ㎡が追加指定され、指定面積の合計が 142,982.10 ㎡となった。

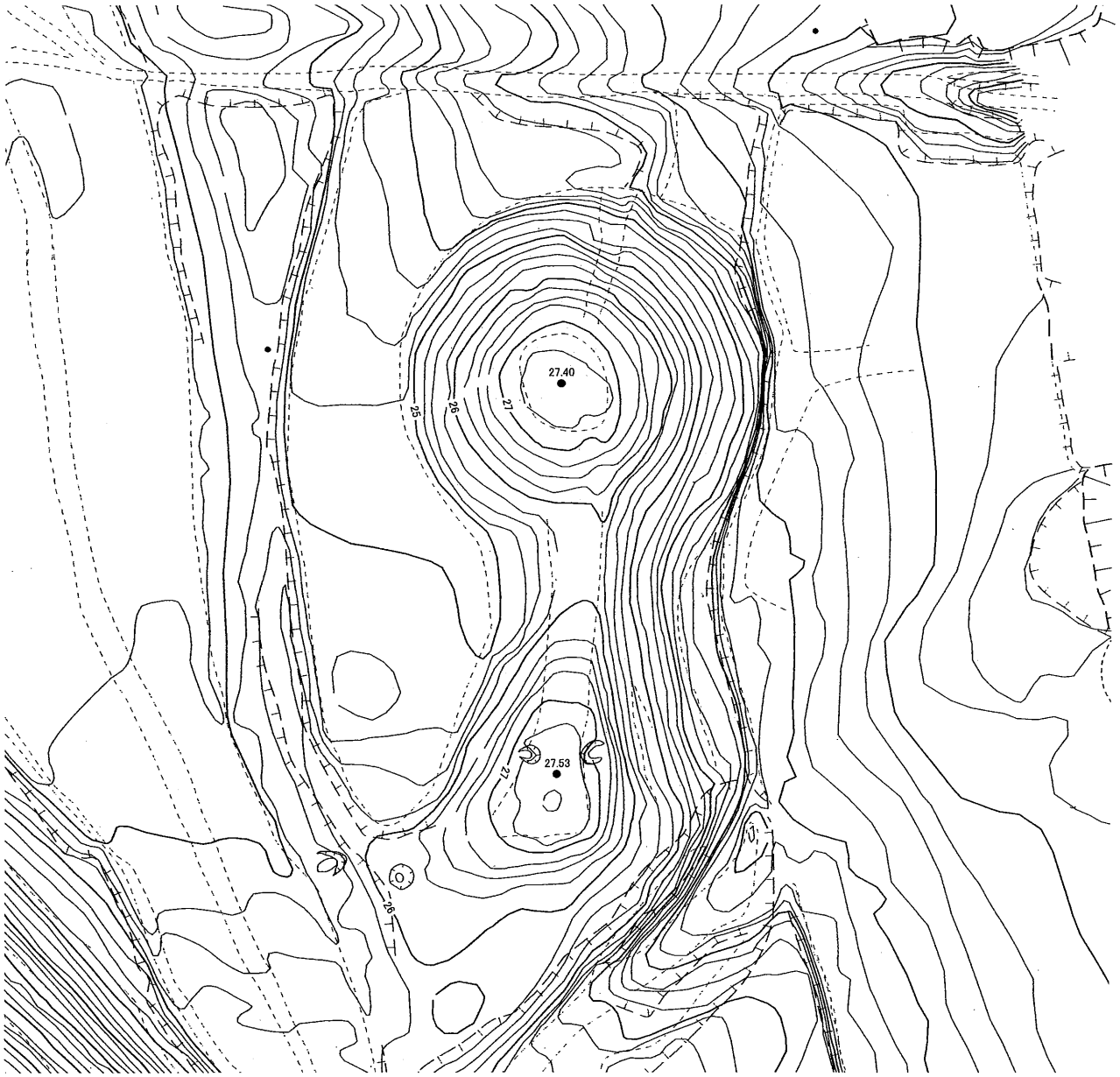
平成 20 年４月に「生目古墳群史跡公園」として開園、現在も発掘調査と公園整備を引き続き行っている。

第Ⅱ章　5号墳の調査結果

第1節　5号墳の概要

(1)5号墳の位置と発掘調査前の環境

5号墳は丘陵の北東部にあり、丘陵の縁辺部に近い位置に立地する。南西方向から北東方向に向かって緩やかな下り勾配の場所に造られる。3号墳の東側で、接するように位置することも特徴的で、3号墳との間にある巾8m程の周堤は共有しているようにも見える。墳丘の東側は、畑耕作により開墾されており、後円部東側、前方部東側隅角は大きく削られた状況がある。墳丘の主軸はほぼ南北軸に持つ。調査以前は墳長54m、後円部径29m、後円部高4.4m、前方部長26m、前方部幅24m、前方部高4.5m、くびれ部巾12mを測り、前方部が僅かに高い。発掘調査前の5号墳は西側の周溝や後円部上には植林されたスギ、それ以外はアラカシやコジイ、マテバシイなどが繁茂していた。

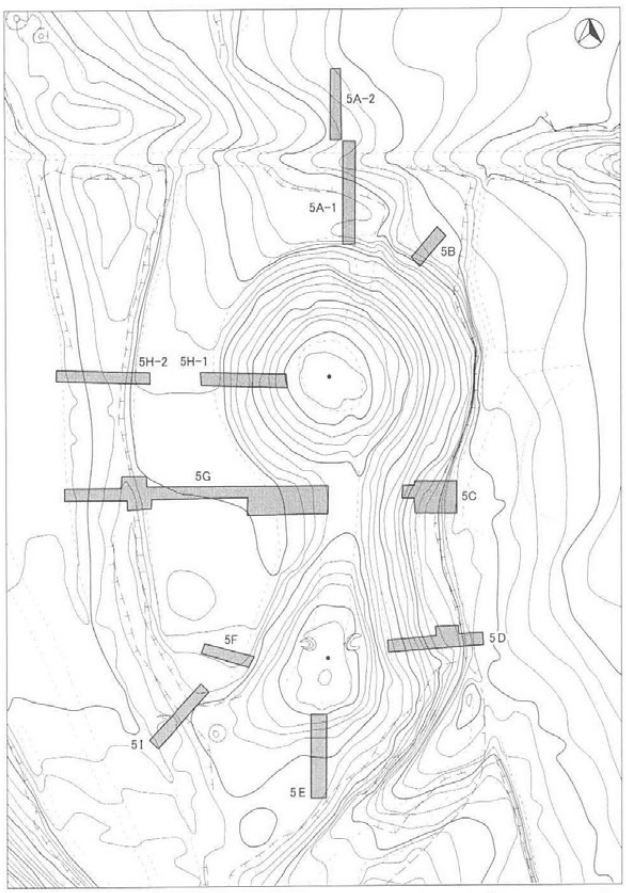


第10図　生目5号墳調査前墳丘測量図（S＝1/400）

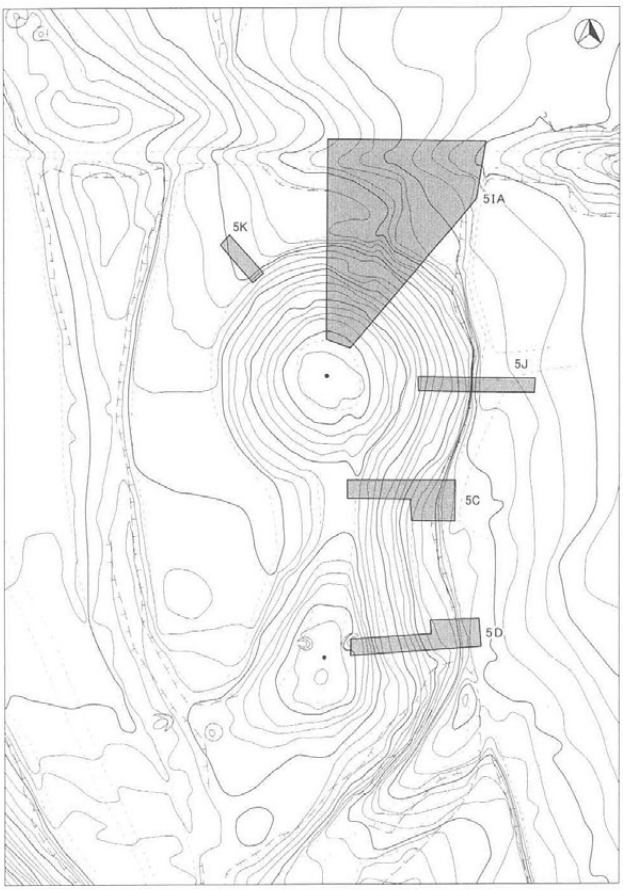
（2） 5号墳発掘調査の経緯と発掘調査歴

生目5号墳の調査は平成10年度から平成16年度にかけて実施した。平成10年度にまとめられた「生目古墳群史跡公園基本構想・基本計画の中では、「前方部隅角部分の削平された部分を調査結果に基づき、現状の形（調査前の形）に復旧する。墳丘上の樹木を部分的に伐採する」と、際立った整備は計画されていなかった。当初は、整備計画に則り、墳丘規格と形態を確認するトレンチ状の調査区で発掘調査を進める予定であった。また、その計画の中では、墳丘を築造当時の形状に復元する古墳は前方後円墳の7号墳と14号墳の2基としていた。

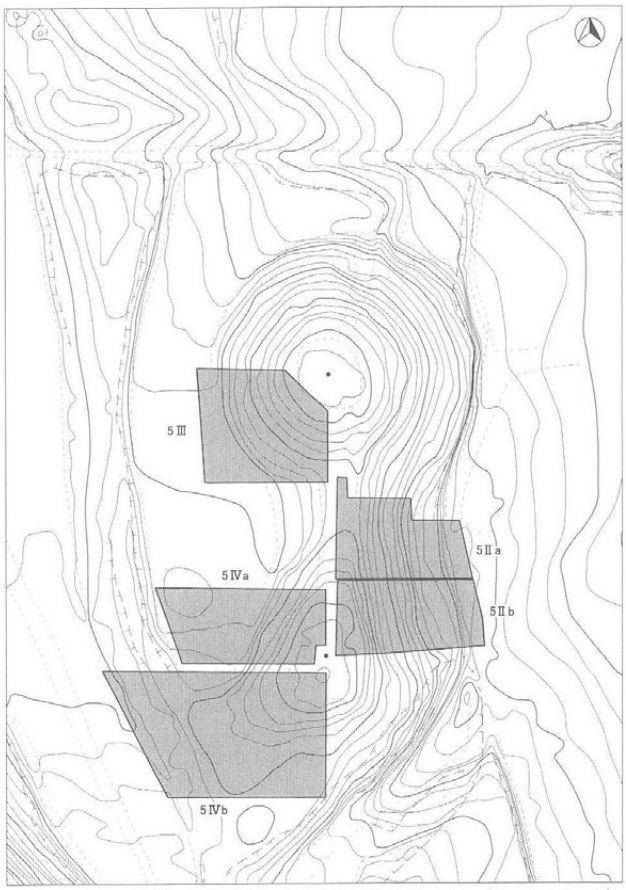
しかし、平成10年度、平成11年度に実施した確認調査において、発掘調査以前の形態から捉えていたより、予想以上に墳丘の崩壊していることが判明した。墳丘の周囲、特に墳端部付近は、畑地耕作等により削られており、特に後円部東側と前方部東側隅角ではその状況が著しかった。そこで、計画で定められた墳丘の築造当時の形状に復元する7号墳と14号墳のうち、14号墳については比較的良好な状態で保存されていることから、保存状態の良い古墳の復元整備を行うよりも、むしろ崩壊著しい5号墳を復元することが望ましいという見解になり、整備計画の変更をおこなった。それに合わせ、それ以降の発掘調査は、墳丘と周辺部分を年次的に面的な発掘調査を行い、調査結果をもとに復元整備することとした。それ以降については、新たな計画のもと毎年度面的な調査区を設定し発掘調査にあたった。



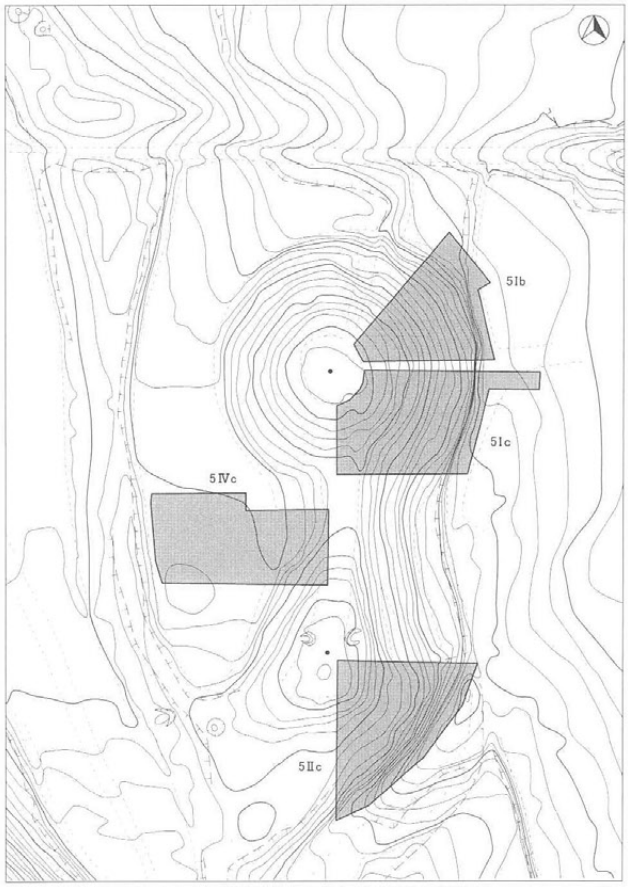
第11図 生目5号墳平成10年度調査区図（S=1/500）



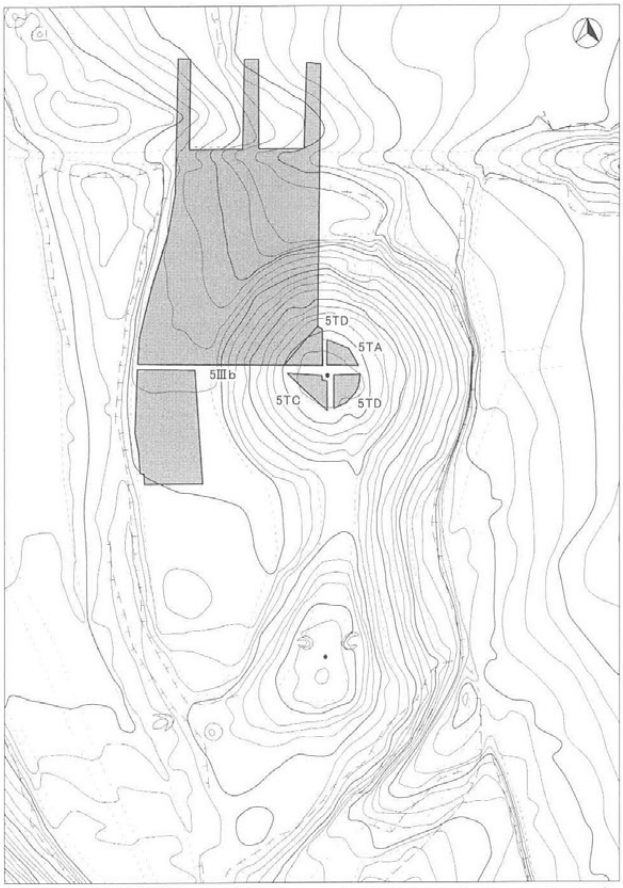
第12図 生目5号墳平成11年度調査区図（S=1/500）



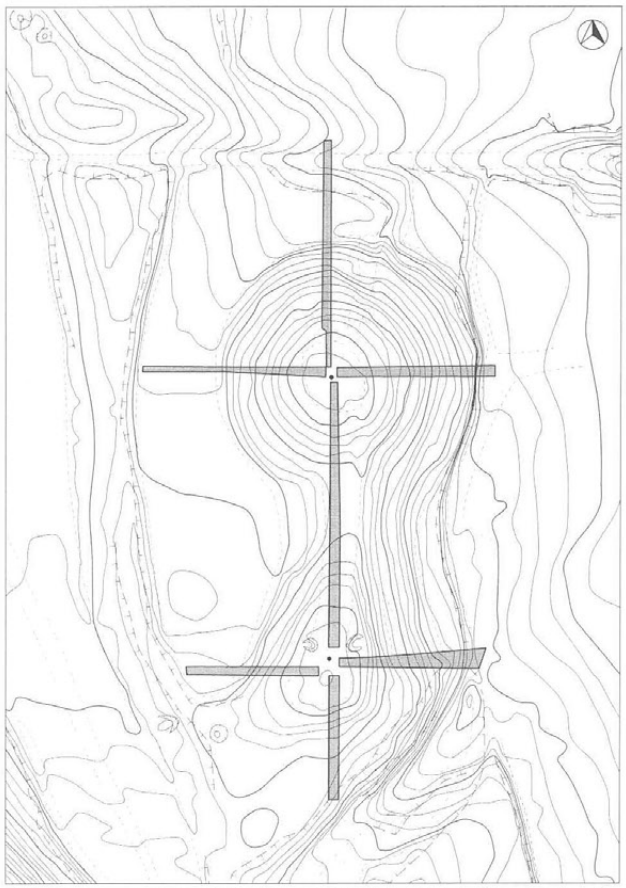
第13図　生目5号墳平成12年度調査区図（S=1/500）



第14図　生目5号墳平成13年度調査区図（S=1/500）



第15図　生目5号墳平成14年度調査区図（S=1/500）



第16図　生目5号墳平成15年度調査区図（S=1/500）

第２節　遺構について

(１)５号墳の調査結果

①５号墳の覆土

５号墳の調査は、史跡整備に伴い復元整備を目的とした発掘調査であったため、基本として古墳構築時の面までで、留める調査であった。古墳表面に堆積する土壌は基本層序Ⅳ層～Ⅰ層表層が、理論上観察されるべきであるが、堆積前の地形の形状と土壌の種類、後世の土地利用により、安定した堆積が認められるのは稀である。５号墳で安定した土層の堆積していたのは周溝内のみで、他はⅣ～Ⅰ層いずれかの欠損が見られる。墳丘上では過去に目立った土地利用が行なわれなかったにもかかわらず、安定した堆積は殆どなかった。ひとつが環境が関係していると考えられる。墳丘を直接覆うべき土壌はⅣ層の黒ボク土であるが、殆どを認めることができない。これは墳丘斜面が葺石に覆われていたため、イネ科植物の腐植土層である黒ボク土が育成されにくい環境だったと考えられる。場所によっては、表面から遺構面まで 10cm にも満たない箇所もあり、遺構面に直接、Ⅲ層が薄く覆うことが多い状況であった。もうひとつは流出した墳丘土が堆積する覆土と混濁したことが原因と考えられ、後にも述べるが、墳丘盛土にローム土を主体とする箇所はそれが著しかった。

②墳丘の構築状況

a. 地山整形と盛土構築

墳丘は、基本層序Ⅴ層上面で構築している。この状況は墳丘の葺石が崩壊した結果、地山と盛土の境界を確認することができたためである。検出されたⅤ層上面と墳丘盛土下部の境は右の表のとおりである。この状況から、古墳築造前は、西から東及び南から北へ下っていた土地だったことがうかがえる。このことはのちに述べる築造にも大きく影響したと考えられる。この境界は、一様に墳丘 1 段目斜面の中ほどになり、それ以下が地山整形、それ以上が盛土構築により造られる。

盛土はその積層の状況を観察することはできなかった。墳丘全体での表面観察では、後円部２段目の南東側約１/４と、前方部２段目の東側斜面を除く殆どがローム土（基本層序Ⅶ層）を主体とする盛土で、それ以外が黒ボク土（基本層序Ⅴ層）を主体とする盛土である。ローム土主体の盛土は粘性が弱く、パサパサした感触で、黒ボク土を主体とする盛土は粘性が強く締りがあった。それぞれには、基本層序Ⅵ層のアカホヤ火山灰のブロックや粒子が多く含まれるが、意図的に混和させたというより、産出時に混入したと考えられる。この盛土材の違いが遺構の保存環境にも影響を与えたと考えられ、ローム土を主体とする前方部２段目の平坦面は、土砂の流出が著しい状況がみられた。

後円部背面境界(A)		A-B
23.5m		-2.3m
後円部西側境界(C)	後円部東側境界(D)	D-C
24.8m	22.0m	-2.8m
くびれ部西側境界(E)	くびれ部東側境界(F)	F-E
24.9m	22.9m	-2.0m
前方部西側隅角境界(G)	前方部東側隅角境界(H)	H-G
26.3m	24.1m	-2.2m
前方部前面境界(B)		B-A
25.8m		-2.3m

第２表　５号墳地山整形と盛土構築の境の標高

b. 墳丘規格

墳丘は表面のほぼ全体を調査した後円部東側では、１段目斜面以下の殆どが損なわれた状態であった。

調査の結果、後円部と前方部は共に 2 段築成であることが判明した。それぞれの検出時の最高点の標高は後円部が標高 27.2m、前方部が標高 27.4mで、前方部が若干高くなる。くびれ部の平坦面は25.7mで、前方部の最高点から緩やかに下る状況が見られた。遺存していた墳丘の状況から導き出した

各部位の斜面角度と各段の基底部からの高さは第３表のとおりになる。西側に比べ、東が高くなる状況が見られ、墳丘東側が丘陵縁辺部になることに起因していると考えられる。

部位		斜面	高さ	部位		斜面	高さ
後円部背面	１段目	20°	2.1m	後円部背面	２段目	22°	2.1m
後円部西側	２段目	18°	1.7m	後円部東側	２段目	25°	2.7m
	１段目	20°	1.4m		１段目	18°	1.5m
前方部西側（くびれ部寄り）	２段目	18°	0.7m	前方部東側（くびれ部寄り）	２段目	34°	1.0m
	１段目	20°	0.6m		１段目	24°	1.5m
前方部西側（隅角寄り）	２段目	23°	1.3m	前方部東側（隅角寄り）	２段目	23°	1.6m
	１段目	18°	0.6m		１段目	21°	1.7m
前方部前面	１段目	18°	0.9m	前方部前面	２段目	21°	1.3m

第３表　５号墳墳丘斜面の角度と高さ（復元値）

１段目テラスは調査時には明確に検出されなかったが、その位置は遺存した葺石の基底部の状況から判断できる。また、テラスの幅は各部位における１段目の斜面の復元角度から算出したテラス法肩と２段目の基底部の間で復元した。その結果、概ね幅 40 ～ 50cm の幅狭のテラスが巡っていたと考えられる。復元されたテラスの高さは、墳丘の北と南（前方部前面と後円部背面）、西と東（後円部西と後円部東、くびれ部西とくびれ部東、前方部西側隅角と前方部東側隅角）では著しい高低差がある。各位置のテラスの復元高は第３表のとおりで、各部位において、南から北、西から東に向かって大きく下る。この状況は、古墳構築前の旧地形と同じ状況で、テラスによって地形補正を行なわずに、地形の形状に合わせて一段目を造り上げた結果だと考えられる。また、くびれ部では西側と東側でその形状も違う。２段目基底部葺石の状況から、西側は前方部と後円部が鋭角に曲がっていたのに対し、くびれ部西側では前方部から緩やかにカーブを描いて後円部に接続していた状況が見られた。

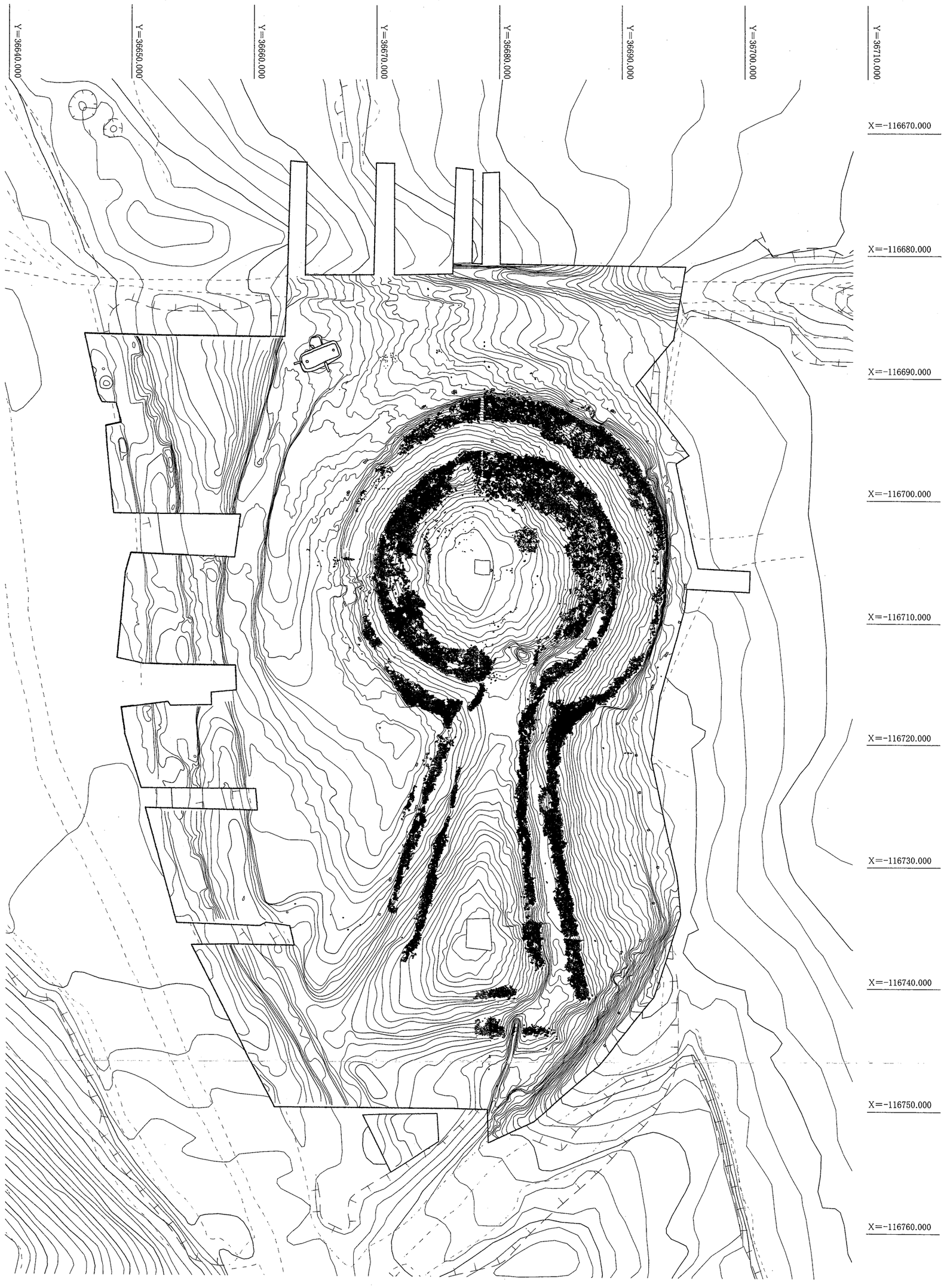
後円部背面テラス（A）		A-B
24.5m		-1.6m
後円部西側テラス（C）	後円部東側テラス（D）	D-C
25.5m	24.0m	-1.5m
くびれ部西側テラス（E）	くびれ部東側テラス（F）	F-E
25.7m	24.7m	-1.0m
前方部西側隅角テラス（G）	前方部西側隅角テラス（H）	H-G
26.4m	26.0m	-0.4m
前方部前面テラス（B）		B-A
26.1m		1.6m

第４表　５号墳１段目テラス標高（復元値）

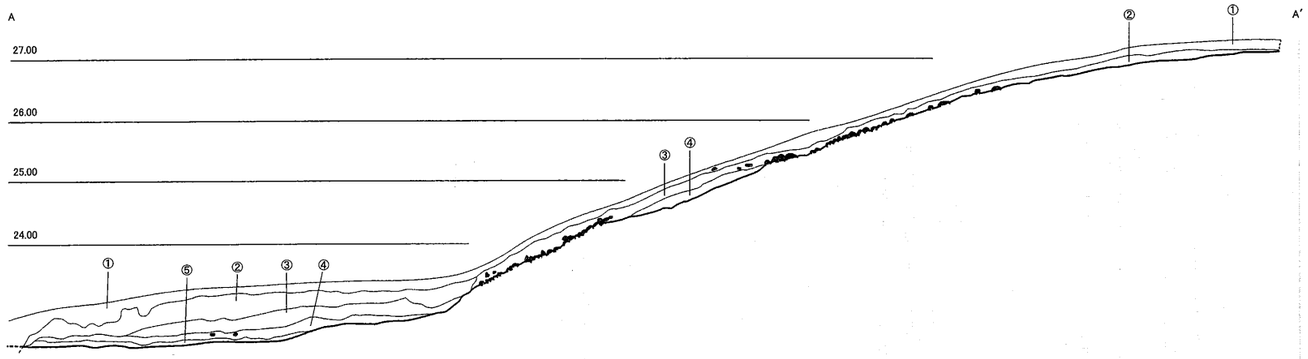
墳丘基底部は前方部東側１段目が唯一といってもよく、それ以外の場所は、殆どが削平を受けていた。検出された前方部東側は、葺石の基底部の外側でも墳丘斜面のような下り勾配の地形が延々と続いており、元々は丘陵の縁辺まで続いていたと考えられ、崩壊著しい後円部側も同様な状況だったと考えられる。今回は葺石の根石列を墳端として捉える。墳丘基底部の崩壊が著しいため、その復元も非常に困難であったが、墳丘斜面の角度、周溝の検出位置から算出したのが第５表になる。

後円部背面基底部（A）		A-B
22.8m		-2.4m
後円部西側基底部（C）	後円部東側基底部（D）	D-C
23.9m	22.7m	-1.2m
くびれ部西側基底部（E）	くびれ部東側基底部（F）	F-E
24.5m	23.2m	-1.3m
前方部西側隅角基底部（G）	前方部東側隅角基底部（H）	H-G
26.0m	24.4m	-1.6m
前方部前面基底部（B）		B-A
25.2m		-0.0m

第５表　５号墳墳丘基底部標高（復元値）

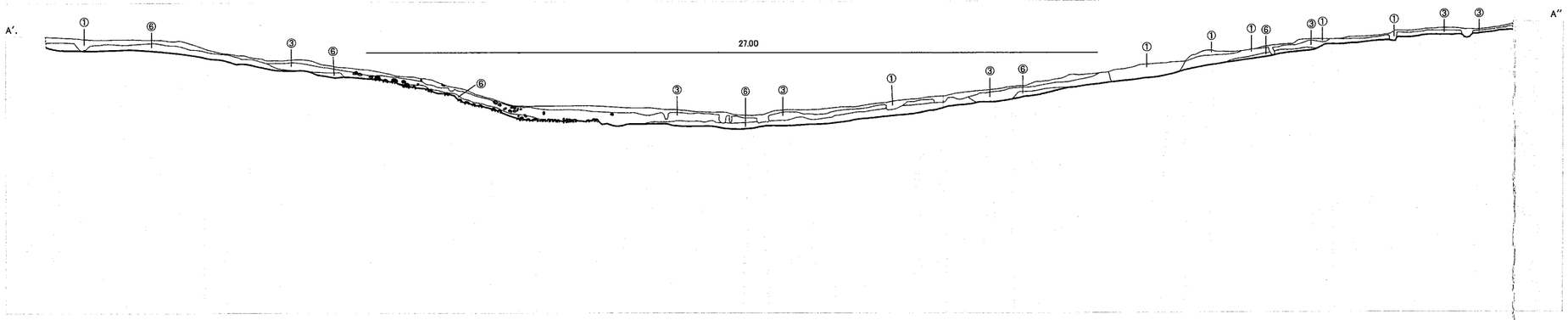


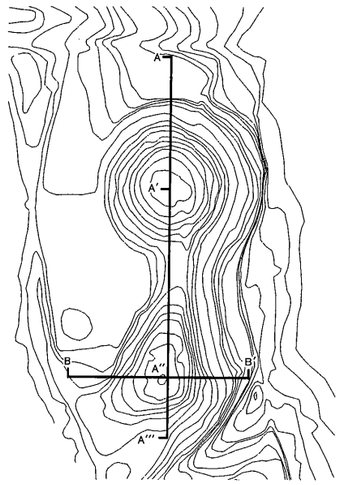
第17図　生目5号墳墳丘測量図（S=1/300）

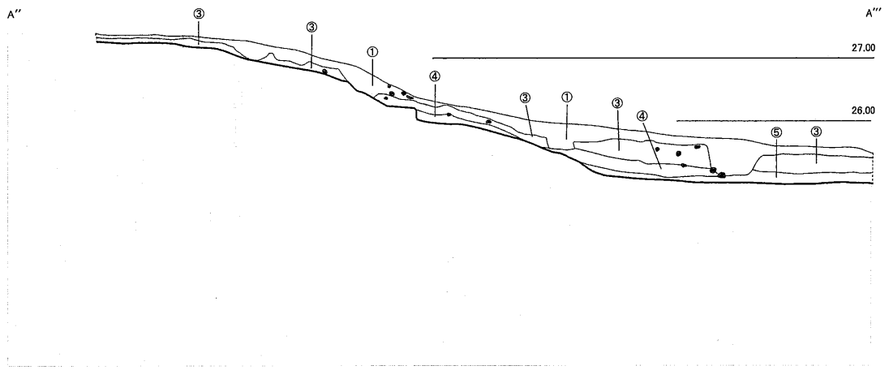


①表土・樹根等　基本層序Ⅰ層に相当
②暗褐色土　基本層序Ⅱ層に相当
③黒褐色土　黒ボク土に Th-S を含む層。基本層序Ⅲに相当
④黒色土　黒ボク土。不純物がほとんど含まれない。しまりがあり、粘性が強い。基本層Ⅳ層に相当
⑤暗褐色土　しまりがなく、ローム質が強い。④に比べ明るい。墳丘からの流出か
⑥黒褐色土　しまりがなく、アカホヤの粒やブロックを多く含む

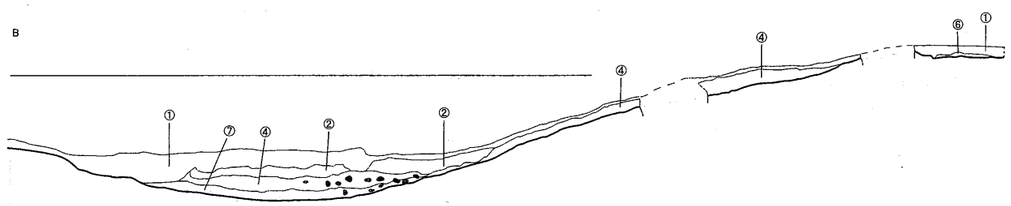
0　5m

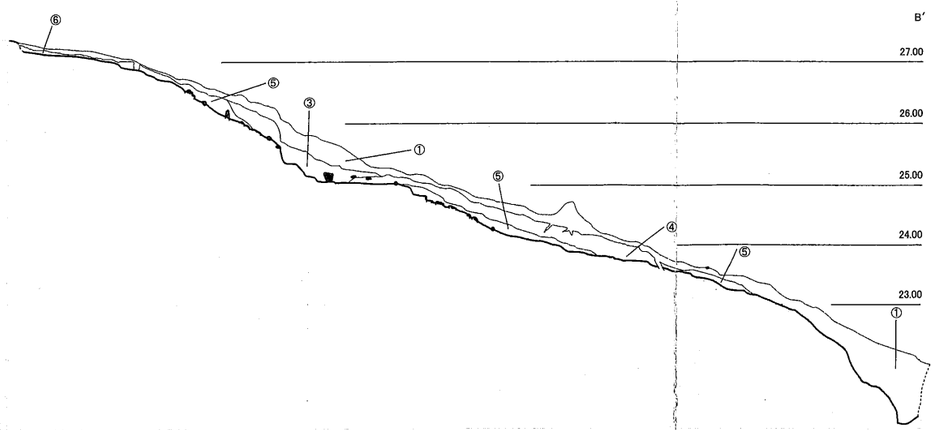






①表土・樹根等　基本層序Ⅰ層に相当
②暗褐色土　黄色橙色土のブロックを多く含む。墳丘からの流出か
③黒褐色土　黒ボク土に Th-S を密に含む層。基本層序Ⅲに相当
④黒褐色土　黒ボク土に Th-S を含む層。基本層序Ⅲに相当
⑤黒色土　黒ボク土。不純物がほとんど含まれない。しまりがあり、粘性が強い。基本層序Ⅳ層に相当
⑥黒褐色土　しまりがなく、ローム質が強い。⑤に比べ明るい。墳丘からの流出か
⑦黒褐色土　しまりがなく、アカホヤの粒やブロックを多く含む





第18図　生目５号墳覆土土層図①(S=1/100)

以上が、墳丘基底部の状況であるが、テラスの状況と同様に旧地形の形状に左右された形状をとっている。これらの、調査の状況と復元した各部位の値から求められた5号墳築造当時サイズは以下のとおりである。

墳長	57m		
後円部径(西側基底部、東側基底部間)	28m	後円部高(後円部背面墳丘基底部から)	4.5m
くびれ部幅	13m	くびれ部高さ(左：西側から、右：東側から)	1.3m、2.6m
前方部長	25m	前方部高(前方部前面墳丘基底部から)	2.3m
前方部前面幅(両側隅角間)	22m		

第6表　5号墳墳丘復元規格

c. 葺石

葺石は人為的な墳丘の削平と、自然崩落により決して良好な状態は保たれていなかったが、部分的に当時の状況が確認できた。葺石材は砂岩を主体とする円礫を用いている。円礫は非常に小さく 5～30cm 程度のもので、大半は拳大以下のものを使用している。砂岩以外ではごく稀に、凝灰岩、流紋岩などが含まれていた。これら葺石材は、古墳群から程近い大淀川から運搬されたものと考えられ、現在も古墳群の北西 1.4ｋｍの大淀川と本庄川が合流する地点で、同様の円礫群が露頭している。葺石は、その葺き方についても特徴的である。通常、墳丘基底部に根石を配し、縦筋に区画列石を企画的に配置し、最後にその間の面的な部分を埋めていく。しかし、5号墳ではこの工程を思わせる状況を確認することができなかった。基底部の根石が遺存したものは、後円部2段目の基底部、前方部東側基底部の一部だが、他の葺石材と粒の大きさの違いが解らないものが多い。区画列石は皆無に近く、後円部西側の2段目で、他よりも粒が大きめの葺石材が基底部から縦筋に通っているが、途中から曖昧になっている。このように、一定の「標準的な作業工程」を踏まえていないため、粗雑な計画と作業を想起してしまうが、葺き方については丁寧な作業が見られる。葺石材の円礫は扁平なものを使用し、小口部分を基本的には横位に配置している。その配置は墳丘斜面に対して垂直に差し込んでいる。礫間に目地が通らないほど密に葺かれる部分もある。葺石を固定するための材料等は見られない。この葺き方は、古墳群内の他の古墳でも確認することができ、3号墳や14号墳ではさらに墳丘テラスと平坦面にも石を施し、墳丘表面全体が石に覆われた状態であったが、5号墳ではその状況は見られなかった。

d. 埴輪

5号墳では埴輪の樹立が認められた。しかし、定位置を示したと考えられる状況で検出されたものは、前方部東側2段目の平坦面から検出された3個体分にすぎない。これら3個体はそれぞれが 0.8m の間隔で検出されており、樹立のための掘方はなく、墳丘上に置いたのみと考えられる(第23図)。埴輪の破片は墳丘東側の2段目基底部以上で分布が集中しており、2段目基底部辺りでは形態が確認できるほどの破片もあった。これらの状況から、埴輪は墳丘東側の 2 段目の平坦面にのみに樹立していたと考えられるが、出土量からも解るように整然と配置された印象ではない。

e. 埋葬主体

埋葬主体は、後円部平坦面でその掘方と判断できるものを確認している。後円部中心より、やや前方部寄りの位置で確認され、東西方向に長軸を持つ、長さ 5.7m、幅 2.6m を呈する長方形プランの掘方である。検出に留める調査であったため、詳細は不明である。

③周溝と及び周辺

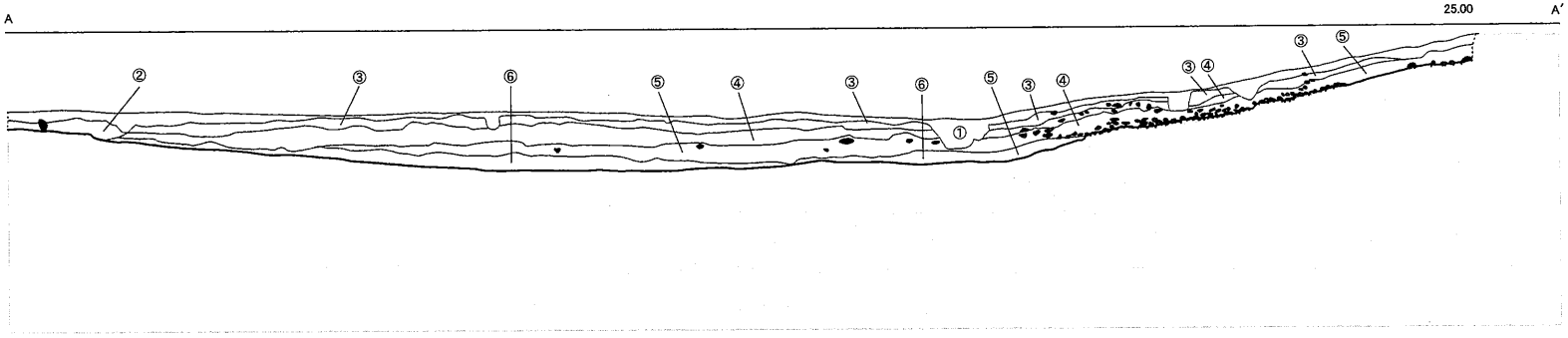
周溝は墳丘周囲を環周していない。確認されたのは墳丘西側と後円部背面のやや東側にかけてである。前方部西側の隅角は土橋状に 3 号墳周堤と繋がっており、周溝はその部分を基点にするように後

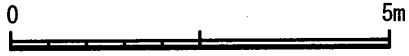
円部に向けて発生している。墳丘と同様に周溝も構築前の地形に合わせた構造で、隅角付近を基点とした場合、後円部背面付近の終点付近では、約 3.8m下っている。平面形は「鍵穴形」に近いが、墳丘くびれ部付近はそれほど絞まらない。幅はくびれ部付近が最も広く 13.5mで、前方部側面付近が 7.0m、後円部周囲が 4.0mである。周溝底面の最深部は前方部側では中心辺り、後円部周囲は外縁近くになる。墳端から測った深さは、前方部側面付近が 50cm、くびれ部付近が 50cm、後円部周囲が 30cm である。周溝は後円部背面付近で認められなくなるが、調査時には後世の造成等により削平を受け、その先から墳丘東側にかけて、周溝が設けられていたのかどうかについて判断できなかった。周溝の形態でもっとも特徴的なのは、著しく立上る外縁の構造にある。特に後円部周囲の周溝でそれが顕著で、周溝外縁付近は、後世の造成によって基本層序Ⅴ～Ⅶ層の途中までが消失していたが、築造時の高さを復元すると本来は 50°～60°の角度で 100～140cm ほど立上っていたと考えられ、この状況は 5 号墳に限った特徴ではなく、調査の行なわれた 21 号墳を除く、3 号墳、7 号墳、14 号墳、22 号墳でも確認されている。周溝内からは、墳丘から流出した葺石材が出土した。また、くびれ部付近の周溝底面では、形態を確認できる程の壺(52)と、別固体の壺の底部から胴部の破片(53)が出土した。また後円部中心から北西位置の周溝外縁付近で、土師器の高坏の破片が纏まって出土しているが、出土位置と状況から 5 号墳に伴わないと考えられる。

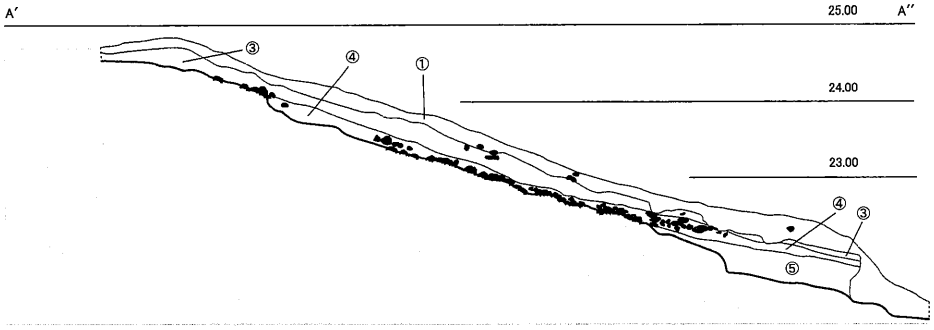
前方部前面側の墳丘基底部の外は明確な周溝を検出できず、基底部の先は一様に幅広い平坦面が続いていた。この平坦面は基本層序Ⅶ層(ローム土)で揃えられ、墳丘基底部に合わせるように緩やかに西から東へ下っており、隅角付近より墳丘主軸ラインよりやや東よりの位置あたりまでで、0.8m下る。古墳構築時からの形態と判断でき、Ⅳ層黒ボク土が覆っていた。この平坦面の先(南方向)には地山整形のみで造られた 31 号墳がある。5 号墳との先後関係は判明していないが、ここで注目したいのが、31 号墳の調査で検出された墳頂部の高さと地山の種類である。31 号墳は、墳長部付近の標高 25.1mの位置で基本層序Ⅴ層黒ボク土が認められる。5 号墳前方部前面は、墳丘上の 26.0m付近でこのⅤ層が確認されており、5 号墳の前方部前面付近から、後に 31 号墳が造られる方向に向かって、下り勾配の地形だったことが伺える。このような地形上の制約があったため、5 号墳前方部前面側には大規模な工事を必要とする周溝を設けなかったと思われる。しかし、墳丘自体はある程度の立体感を表現する必要があったため、Ⅶ層まで削り込み(削り出し)、それを補ったと考えられる。その行為が前方部前面の平坦面と考えられる。この前方部前面の平坦面の状況は、東側の周溝が見られない部分でも同様に言える。墳丘東側は丘陵縁辺部に向かって下っていく状況がある。こういった場所に、あえて墳丘西側とシンメトリーな周溝を構築しようと仮定した場合、かなり深い周溝を設ける必要があり、大規模な土木工事となってしまう。またそれに伴い大量の廃土が発生する。そのため、墳丘の立体感を表現するための最低限の工事に留め、周溝を巡らさなかったと考える。

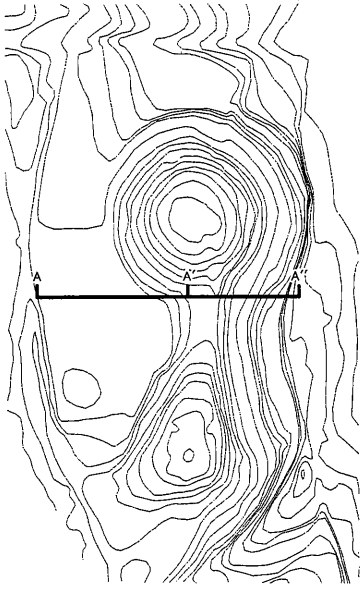
④その他の遺構

5 号墳の北側で東西方向に走る溝状遺構を確認した。この溝は調査区内で完結せず、調査以前の墳丘測量図でもそのラインが認められ、地元で使用した丘陵への山道の一部であった。調査の結果、その堆積土には Th-S を多く含んでおり、古代～中世にかけて築造されたものと判断される。この溝は、底面が著しく硬化しており、古来より道路の役目を果たしていたと考えられる。また、前方部前面から後円部東側にかけては 1 段目斜面に並行するような状態で走る溝状遺構も確認されている。堆積土中には Th-S を含んでいる。前方部前面の 1 段目斜面では、墳丘を深く抉る。底面までの深さは 80cm であるが、東側隅角に向かっては墳丘に這い上がるように底面が急激に上がり、前方部の 1 段目テラスを削り飛ばし、後円部の 2 段目斜面の途中で止まる。この溝状遺構の用途は不明である。



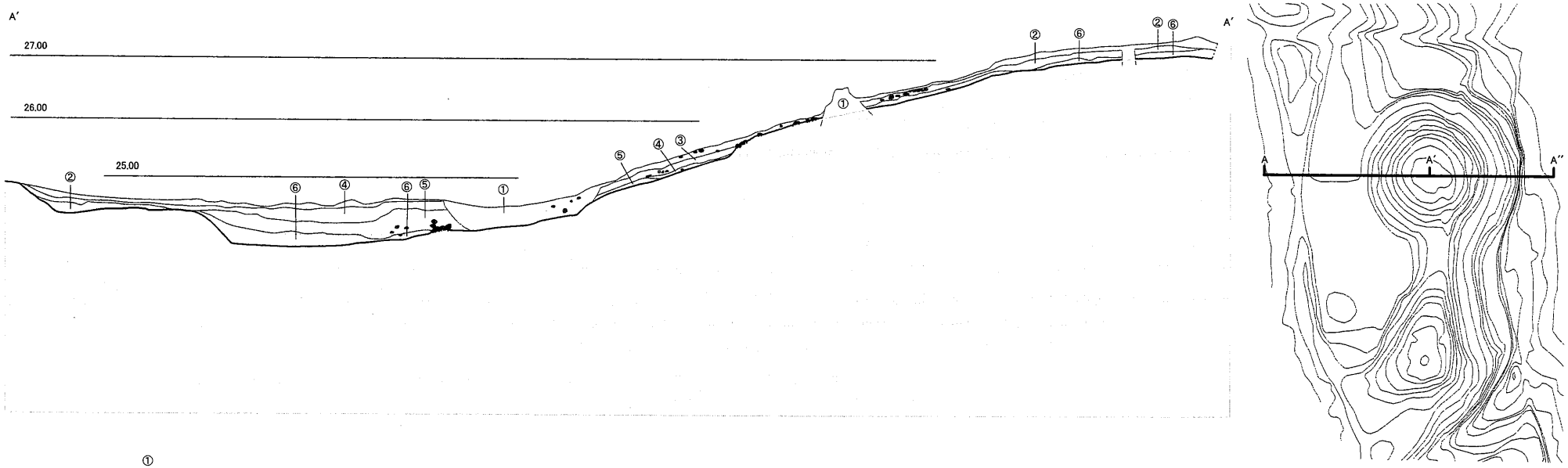


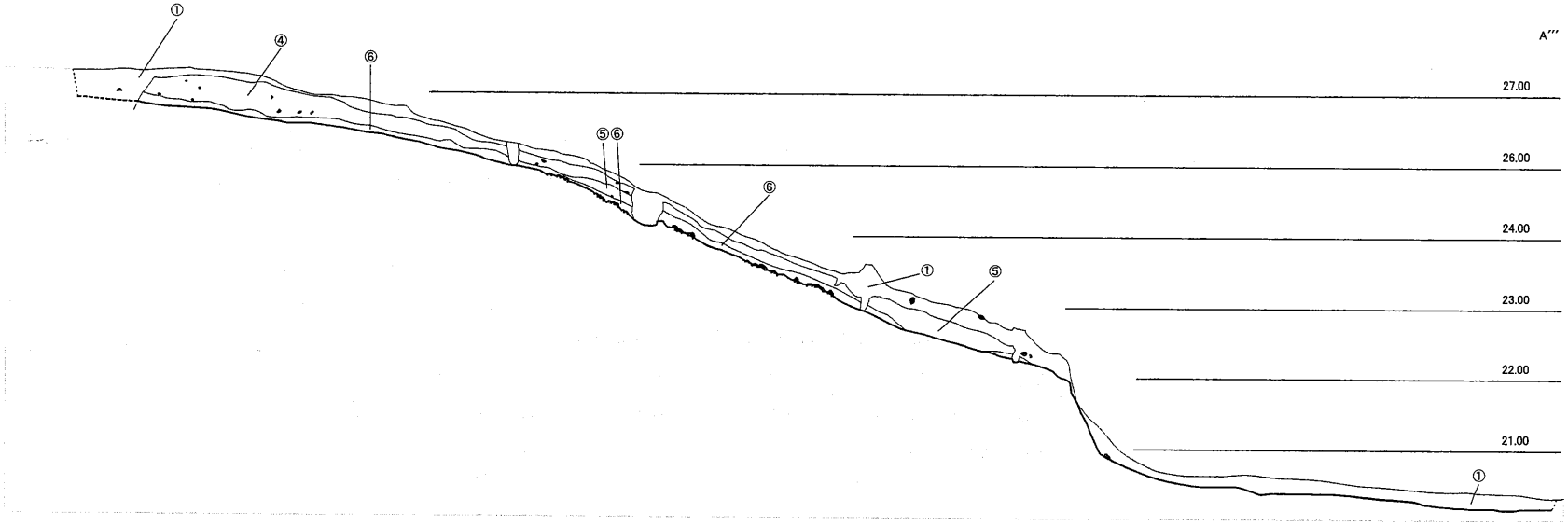




①表土・樹根等　基本層序Ⅰ層に相当
②暗褐色土　基本層序Ⅱ層に相当
③黒褐色土　黒ボク土に Th-S を含む層。基本層序Ⅲに相当
④黒色土　黒ボク土に Th-S を密に含む層。基本層序Ⅲに相当
⑤暗褐色土　黒ボク土。不純物がほとんど含まれない。しまりがあり、粘性が強い。基本層Ⅳ層に相当
⑥黒褐色土　しまりがなく、アカホヤの粒やブロックを多く含む

第19図　生目5号墳覆土土層図②(S=1/100)

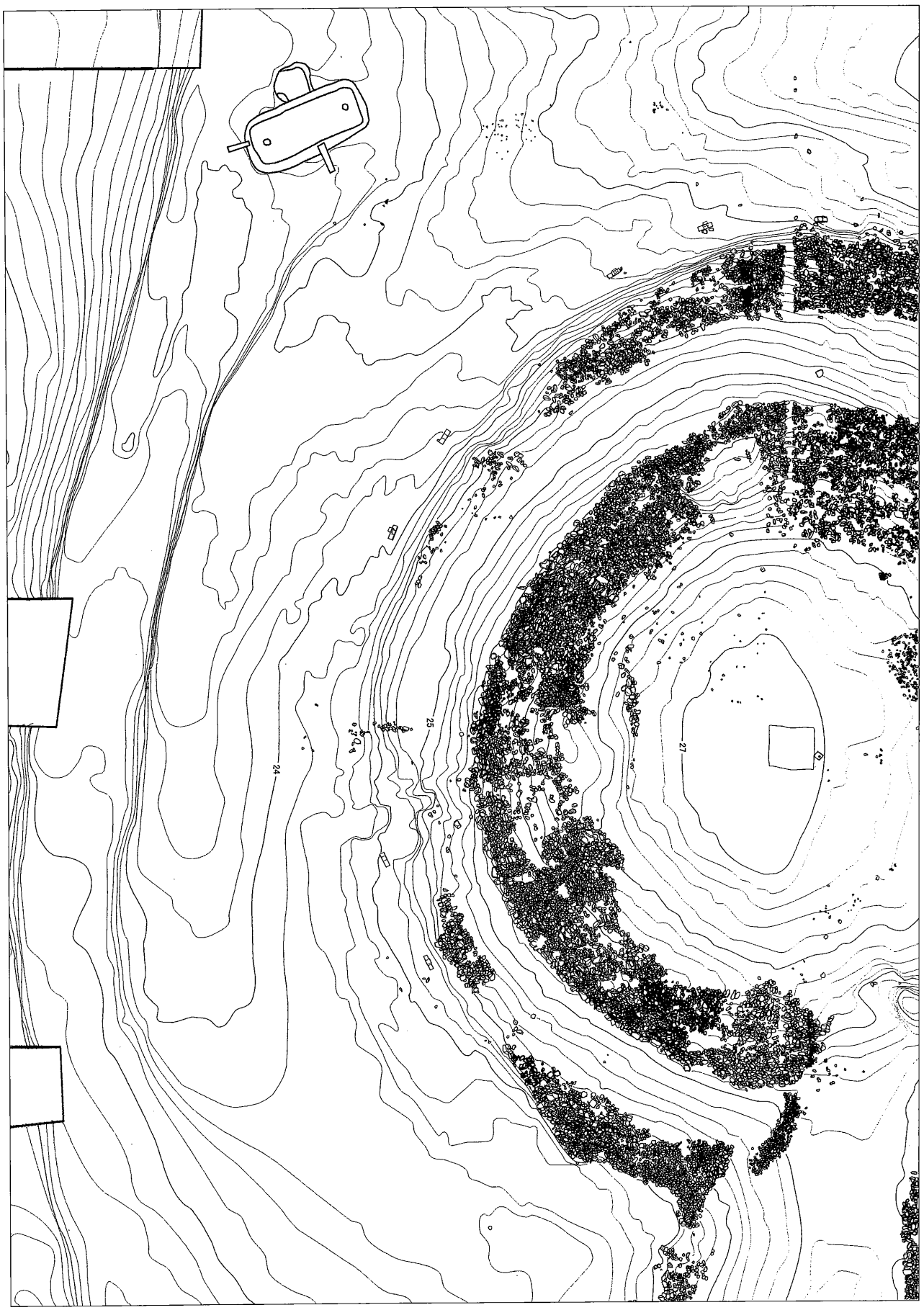




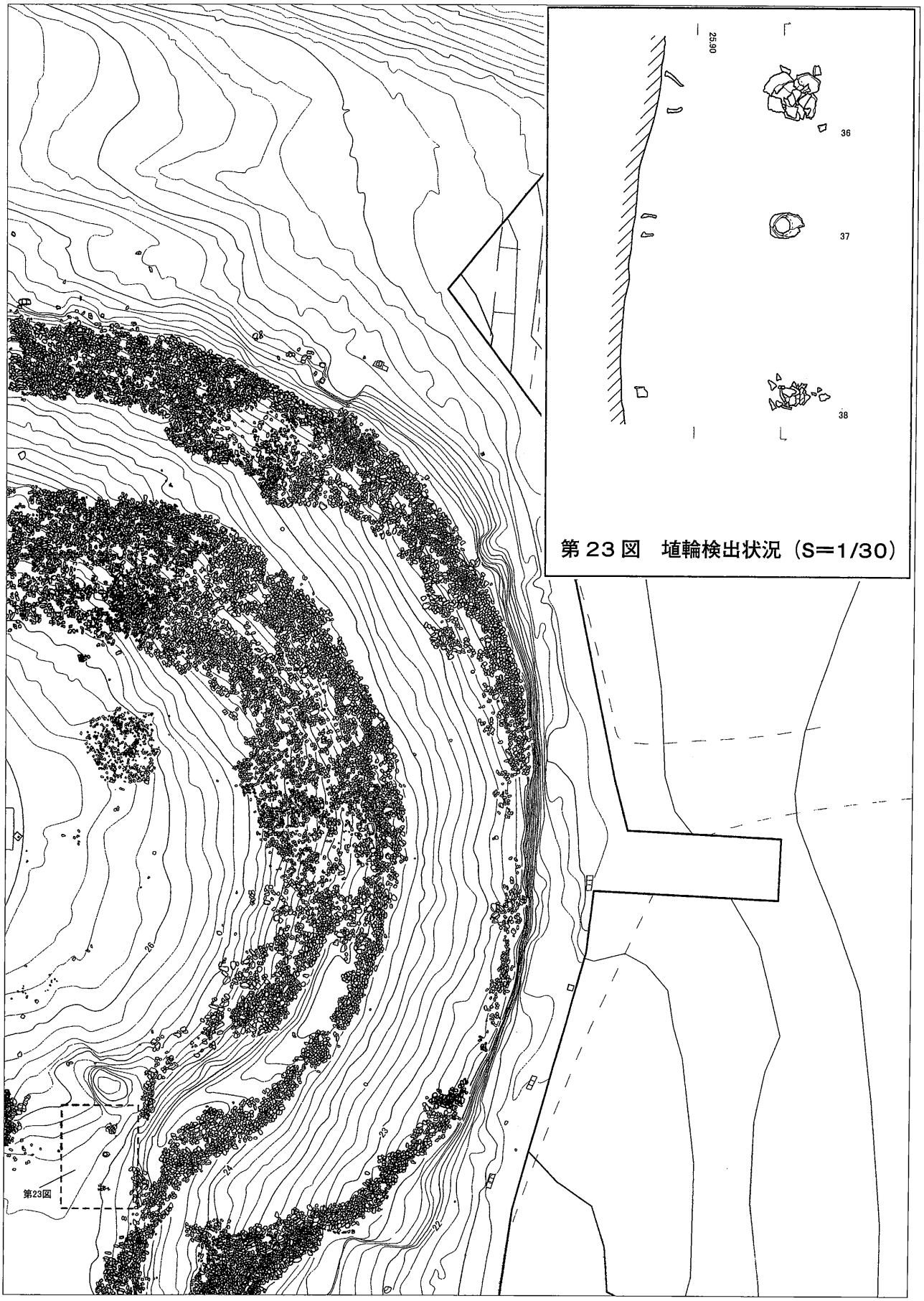
①表土・樹根等　基本層序Ⅰ層に相当
②黒褐色土　しまりがなく、ボラを僅かに含む。基本層序Ⅱ層に相当
③黒褐色土　Th-S を含むが、二次堆積である
④黒褐色土　黒ボク土に Th-S を含む層。基本層Ⅲ層に相当
⑤黒色土　黒ボク土。不純物がほとんど含まれない。しまりがあり、粘性が強い。基本層Ⅳ層に相当
⑥黒褐色土　しまりがなく、アカホヤの粒やブロックを多く含む

0　5m

第20図　生目5号墳覆土土層図③(S=1/100)

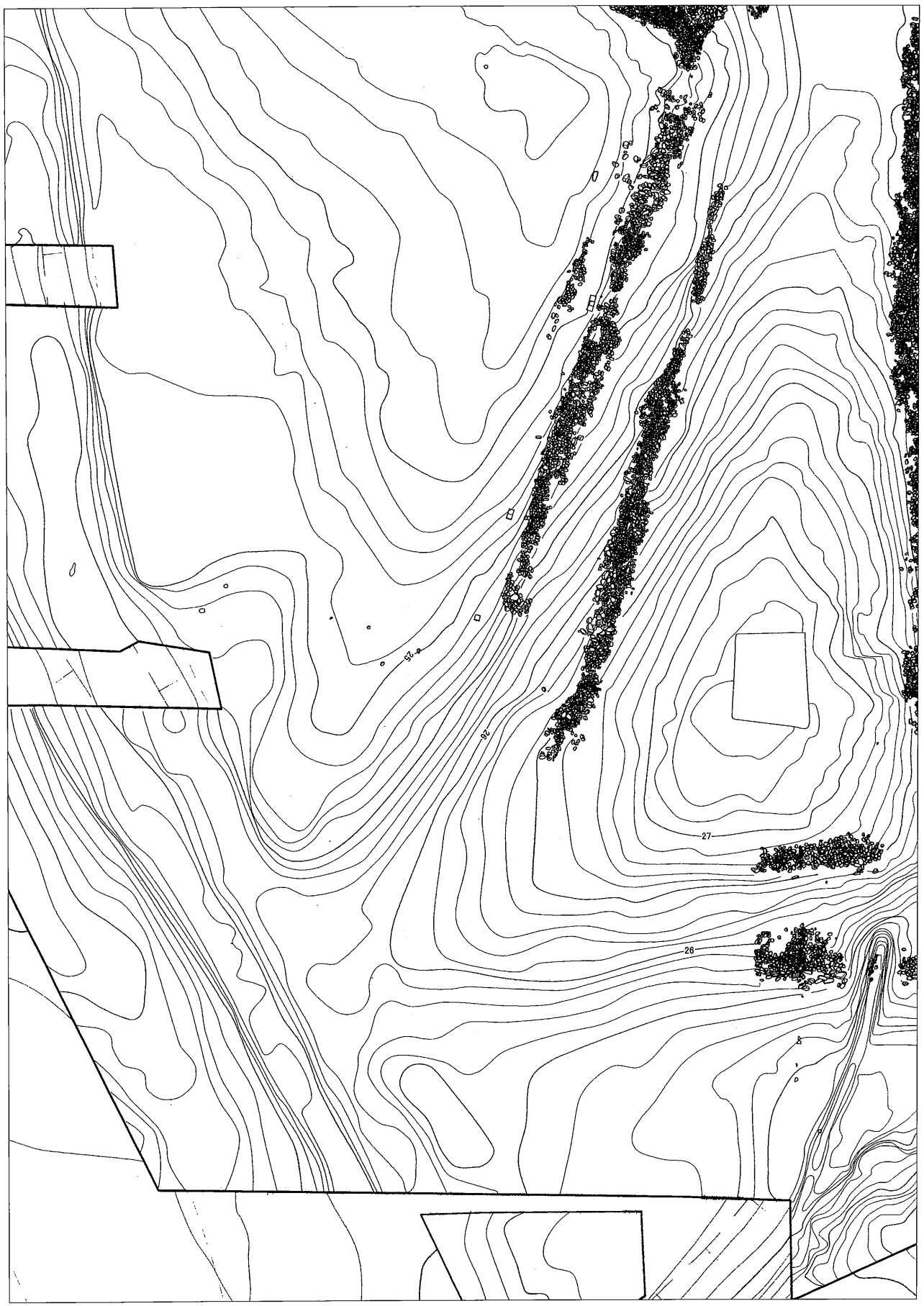


第21図　生目5号墳後円部西側調査測量図（S=1/150）



第23図　埴輪検出状況（S=1/30）

第22図　生目5号墳後円部東側調査測量図（S=1/150）



第24図　生目5号墳前方部西側調査測量図（S=1/150）

21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
-1
-2
-3
-4
-5
-6
-7
-8
-9
-10
-11
-12
-13
-14
-15
-16
-17
-18
-19
-20
-21
-22
-23
-24
-25
-26
-27
-28
-29
-30
-31
-32
-33
-34
-35
-36
-37
-38
-39
-40

（2）地下式横穴墓について

①生目古墳群の地下式横穴墓の概要

地下式横穴墓は、古墳時代における南九州特有の墓制である。その分布域は、宮崎県南部、熊本県の人吉盆地周辺、鹿児島県の北部と大隈半島に限られ、現在確認されているだけでも、約1000基以上を数える。生目古墳群では、現在までに45基の地下式横穴墓を確認している（平成21年9月現在）〔第7表〕。しかし、その大半は、完堀までにいたっておらず、検出までででの確認となっている。

地下式横穴墓は、その名のとおり、地表面より竪坑と呼ばれる竪穴を掘り、その竪坑の床面より横方向に掘って玄室を設ける墓のことであるが、一般的には平坦な地表面から掘り込まれているのに対し、生目古墳群の地下式横穴墓は、その大半が、前方後円墳ないし円墳の周溝の立ち上がりを利用して造られることが特徴の一つと言える。

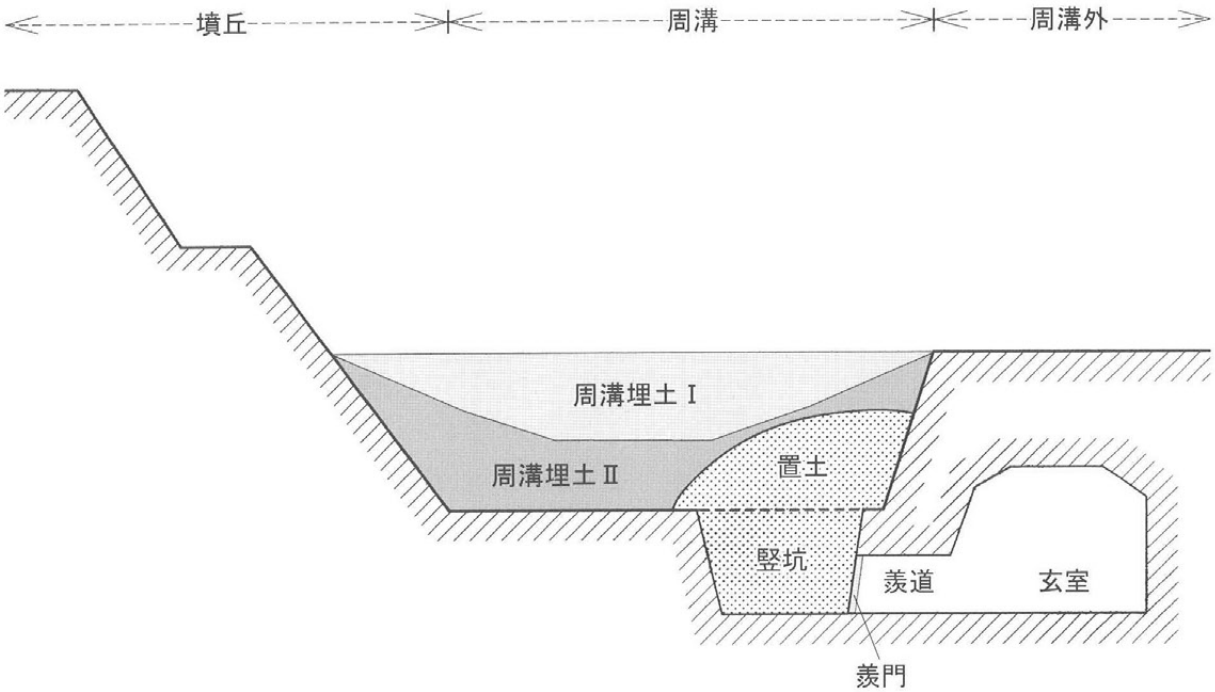
具体的に述べると、周溝の立ち上がり付近の床面から、竪坑を掘り、周溝の立ち上がる傾斜面下に横穴を掘り、羨道並びに玄室を設けるといった具合である。これによって、平坦な地表面から地下式横穴墓を造ることより、竪坑を掘る作業量が格段に少なくなるといった構築上の利点だけでなく、地下式横穴墓の被葬者ならびに築造に携わった人々が、古墳の周溝と認識したうえで造ったものであると理解できる。そうであるならば、生目古墳群において、古墳の周溝内より検出される地下式横穴墓は、古墳に付随する形であり、築造時期としては、墳丘と同時期もしくはその直後と捉えられ、古墳の被葬者の近親者の墓といった陪塚の意味合いが含まれる可能性がある。このような、古墳に付随する形で検出される地下式横穴墓は、近年、報告例が増えてきており、宮崎県内では下北方古墳群、西都原古墳群、県外では鹿児島県の岡崎古墳群などが挙げられる。

もう一つ特徴を挙げると、周溝内に造られる地下式横穴墓の中には、外側の立ち上がりだけでなく、内側の立ち上がり、つまり、墳丘内に玄室を設ける例が確認されていることである。古墳では、7・28・32・47・48・50号墳にあたり、7号墳以外は円墳である。これまで、墳丘内部に玄室を設ける地下式横穴墓を持つ円墳は、十数例報告されているものの、生目7号墳のように前方後円墳内部に玄室を設ける地下式横穴墓は、下北方1号墳（宮崎市）、岡崎15号墳（鹿屋市）と全国でわずか3例しか報告されていない。特に生目7号墳の地下式横穴墓（18号地下式横穴墓）は、墳丘内部の陥没坑から、玄室は、妻入り形で後円部中心に向かっており、陥没坑の長軸は6.7mを測る。そのため、前方後円墳の主体部としての地下式横穴墓の可能性を大いに有する（宮崎市教委 2006）。

先述したように、これまで生目古墳群において確認している地下式横穴墓は、検出までであり、遺構内部まで調査を行っていないものが大半を占める。完掘までに至ったものは、45基中2・7・8・10・11・12・15・19号の8基のみである。検出段階で45基もの地下式横穴墓を確認できた経緯については、竪坑のプランに加え、玄室の天井が崩落し、玄室のプランが明らかに確認できるものもあるが、生目古墳群内では、竪坑の直上に土を饅頭のようにかためて置き、その上で祭祀行為をおこなった形跡が確認できることによる。この土饅頭を本文中では「置土」と称す。この置土は、アカホヤ・ローム・シラスといった地山の土を多く含むことから、玄室を掘り抜いた際に出た土と考えられる。地下式横穴墓は、竪坑を掘り、竪坑床面から横方向に羨道、玄室を掘りぬく。その際、玄室は遺体を埋葬するため空洞となり、それを羨道で閉塞し、竪坑内を埋め戻す。これが一般的な地下式横穴墓の構築法であるが、埋め戻すのは竪坑のみであるため、羨道ならびに玄室を掘り抜いた際に出た土はあまることとなる。そのあまった土が置土となると考えられる。この置土は、これまでの地下式横穴墓研究のなかで、他地域の地下式横穴墓群において、群集して検出されているにもかかわらず、なおかつ時期の異なる地下式横穴墓がまったく切りあわずに造られていることや、竪坑と玄室の造られる向きがほとんど同じといった現象

が確認できることから、目印という形でその存在は、必然的に考えられていたが、確実な発見までは至っていなかった。しかし、生目古墳群内では、地下式横穴墓 45 基中 13 基に置土が確認でき、その存在を立証したと言えよう。

【参考文献】
鹿児島大学総合研究博物館　2008 『大隈串良岡崎古墳群の研究』 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No 3
中野和浩　1998 「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』 第 16 号　宮崎県考古学会
東憲章　2001 「日向（宮崎県）の地下式横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』 第 4 回九州前方後円墳研究会大会資料集　九州前方後円墳研究会
宮崎市教育委員会　1996 『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』 宮崎市文化財調査報告書第 28 集
宮崎市教育委員会　1999 『石ノ迫第 2 遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 40 集
宮崎市教育委員会　2004 『史跡生目古墳群　概要報告書Ⅴ』 宮崎市文化財調査報告書第 57 集
宮崎市教育委員会　2006 『史跡生目古墳群　概要報告書Ⅵ』 宮崎市文化財調査報告書第 61 集
宮崎市教育委員会　2007 『史跡生目古墳群　概要報告書Ⅶ』 宮崎市文化財調査報告書第 65 集
宮崎市教育委員会　2008 『下北方 5 号墳周辺遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 68 集
宮崎市教育委員会　2008 『下北方 1 号墳周辺遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 71 集



第 26 図　生目古墳群内検出地下式横穴墓の一例

第27図　生目古墳群地下式横穴墓位置図（S=1/3800）

第7表　生目古墳群地下式横穴墓一覧

番号	構築位置	玄室方向	置土有無	玄室プラン	調査状況	出土遺物
1	25号墳周辺	－	－	－	竪坑半載、羨門確認	－
2	3号墳周堤外	－	－	平	完掘	－
3	7号墳周辺	－	－	平？	玄室陥没、プラン確認	鉄斧
4	7号墳周辺	－	－	－	竪坑半載、羨門確認	－
5	7号墳周辺	－	－	－	竪坑確認	－
6	7号墳周辺	－	－	－	竪坑確認	－
7	9号墳周辺	－	－	平	完掘	鉄鏃、ヤリガンナ
8	9号墳周辺	－	－	平	完掘	鉄鏃、刀子、鉄斧、鉄鎌
9	15号墳南東約50m	－	－	－	竪坑確認	－
10	47号墳周辺	－	－	平	完掘	－
11	47号墳周溝内	墳丘内	－	平	完掘	－
12	48号墳周溝内	周溝外	－	平	完掘	－
13	48号墳周溝内	墳丘内	－	平	完掘	－
14	50号墳周溝内	墳丘内	－	平	完掘	－
15	3号墳周溝内	周溝外	－	平	完掘	鉄鏃
16	28号墳周溝内	墳丘内	－	－	竪坑確認	－
17	7号墳周溝内	周溝外	－	平	竪坑、玄室確認・玄室一部削平	刀子
18	7号墳周溝内	墳丘内	－	妻？	玄室陥没、プラン確認・竪坑完掘、羨門確認	－
19	5号墳周辺	－	－	平	完掘	鉄鏃、高坏
20	21号墳周溝内	周溝外	－	平？	玄室一部陥没・竪坑半載、羨門確認	－
21	7号墳周溝内	周溝外	○	平？	玄室陥没、プラン確認・竪坑サブトレ、羨門確認	置土上より土師器出土
22	14号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
23	22号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
24	7号墳周溝内	墳丘内	○	－	竪坑サブトレ、羨門確認	置土上より土師器出土
25	7号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
26	7号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
27	8号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
28	8号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	置土上より土師器出土
29	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	－
30	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	－
31	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	－
32	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	－
33	3号墳周溝内	周溝外	－	－	竪坑確認	－
34	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	置土上より土師器出土
35	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	－
36	3号墳周溝内	周溝外	○	－	置土検出	置土周辺より鉄剣出土
37	21号墳周溝内	周溝外	－	－	※未報告。竪坑確認	－
38	21号墳周溝内	周溝外	－	平？	※未報告。玄室陥没、プラン確認	竪坑埋土より土師器出土
39	21号墳周溝内	周溝外	○	平	※未報告。竪坑、玄室トレンチ範囲完掘	置土上より土師器出土
40	21号墳周溝内	周溝外	○	－	※未報告。玄室一部陥没	置土上より土師器出土
41	21号墳周溝内	周溝外	－	妻？	※未報告。玄室陥没、プラン確認	－
42	21号墳周溝内	周溝外	－	－	※未報告。竪坑サブトレ、羨門確認	－
43	21号墳周溝内	周溝外	○	平	※未報告。玄室サブトレ	玄室埋土より土師器出土
44	21号墳周溝内	周溝外	－	平？	※未報告。玄室一部陥没・竪坑半載、羨門確認	－
45	32号墳周溝内	墳丘内	○	－	※未報告。置土検出	置土上より土師器出土

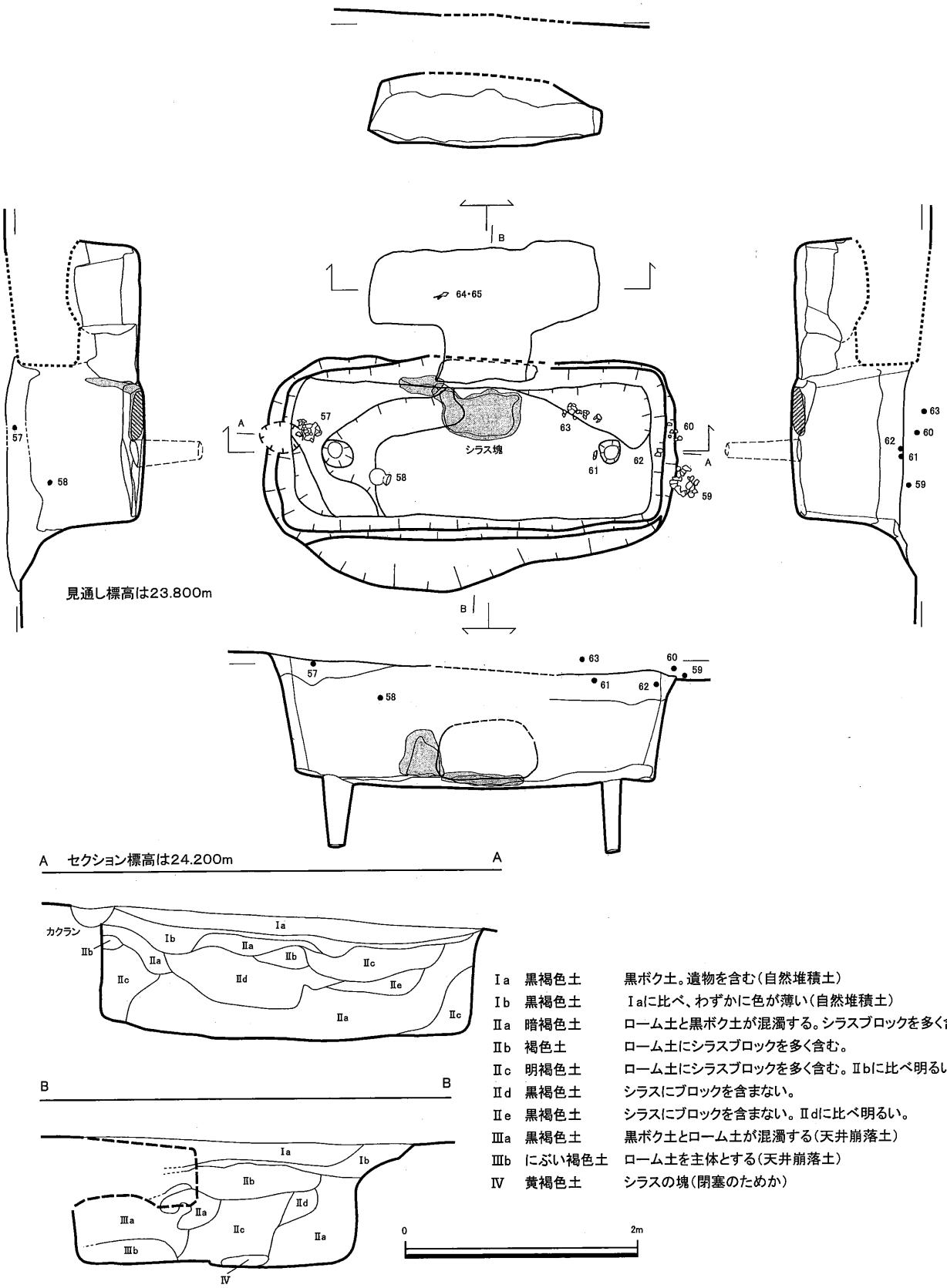
②19 号地下式横穴墓

5 号墳後円部の北西側の周溝外側では地下式横穴墓が確認された。構築位置周囲の平坦な地形は後世に改変を受けた結果によるもので、本来は基本層序第Ⅴ層黒ボク土堆積時の構築でⅦ層ローム土の中位で検出されており、1mほど遺構の上部を削平された状態での検出であったと考えられる。地下式横穴墓は竪坑を 5 号墳後円部側、玄室を外側に向かって構築している。羨門から玄室にかけての天井の殆どが崩落して検出された。竪坑、玄室ともに基本層序Ⅷ層シラス土まで掘削しており、壁面の下半はシラスになる。竪坑は幅 3.5m、奥行き 2.0m、現状の深さが 120cm を測り、削平された地山の厚みを復元すると、本来は深さ 200cm ほどだったと推測される。平面プランは長方形を基調とする。竪坑床面は平坦に近いものの僅かに中心に向かって下っている。また、竪坑の東壁、西壁から、それぞれ 25cm 中心側でピットが確認された。東側のピットは直径 20cm、深さ 65cm、西側のピットは直径 30cm 深さ 60cm を測る。羨門は竪坑底面から 5 cm 程上がった位置に床が設けられ、幅は 85cm、天井が崩落しいているが高さは約 50cm だったと推測される。竪坑堆積土は最上層がⅣ層黒ボク土の自然堆積層でそれ以下は不純物が多く混入するシラス土、褐色のローム土、黒ボク土が塊り状に堆積する。玄室は幅 195cm、奥行きが 65cm を測り、長方形の平入プランを呈する。竪坑の規模に比べ小さい。天井は玄室両側で遺存し、西側隅付近で 50cm、東側で 30cm を測り、西側が高くなる。床面は両側が中心部より僅かに上がる。また、羨門付近の竪坑内からは純度の高いシラス土の板状の塊が出土した。このシラス塊は羨門西側袖付近の竪坑壁に貼りついた状態のものと羨門正面で厚さ 15cm の板状のものが確認された。羨門を板閉塞の支えに使用したものか、もしくはシラス塊そのものを閉塞に使用したと考えられる。遺物は玄室内の中央部からやや西側で鉄鏃が 2 点(64、65)重なった状態で出土しており、刃先は玄室の中心部を向いている。また、竪坑周囲から竪坑埋土最上層にかけては土師器の小型の甕、壺形土器、高坏が出土している。

19 号地下式横穴墓において、他の地下式横穴墓との違いがいくつかある。ひとつは竪坑内のピットの存在である。竪坑内にピットを持つ例は他にもあるが、それらは羨門閉塞のための木板を固定するための柱の穴と判断できる。しかし 19 号地下式横穴墓の竪坑のピットは、その構築位置から、閉塞用の柱穴とは考えにくい。

今ひとつ違う点として、竪坑堆積土最上層にあたるⅣ層黒ボク土の自然堆積層である。遺体埋葬後、竪坑は完全に埋め戻され、遺構検出時には基本的に自然堆積層は生じない。時折、竪坑内に黒ボク土が流入している状況が認められる地下式横穴墓がある。それらについては、羨門閉塞の木板が腐食し、竪坑内の埋土が玄室側に流入し、その減量分を補うように竪坑上に黒ボク土が流入する、と判断できる。

先述したとおり、19 号地下式横穴墓は構築時よりも 1mほど削平された状態で確認され、本来ならば、このⅣ層黒ボク土が 1.2mほどの厚みで堆積していたと考えられる。19 号地下式横穴墓にも他と同様に、仮に竪坑内の埋土が玄室を充満させるほど流入したとした場合、0.8m^3(玄室容積) ほどが竪坑から流入したと考えられるが、竪坑内の黒ボク土の堆積は 8.4m^3(復元した値)であり、この黒ボク土の堆積が現室内に竪坑埋土が流入したあとの減量分を補ったものとは考えられない。以上のことを踏まえ、竪坑内で確認されたピットを加味して想定すると、19 号地下式横穴墓は以下のような構造だったと想定したい。遺体埋葬後、竪坑は埋め戻さずに、竪坑開口部分を木蓋で閉塞することとした。それを安定させるために竪坑内に柱を 2 本建て棟木を支えた。その時の柱の穴が竪坑内のピットと考える。木蓋の上や周辺には残土(玄室掘削時の土＋竪坑掘削時の土)を置土として配置し、最終的に、置土の周囲で祭祀を行ったと考える。そして時間の経過によって木蓋天井が腐食し、陥没して置土の土が流れ込んだが満たされることなく、Ⅳ層黒ボク土と祭祀後に配置されたままの土器が流れ込んだと想定したい。



Ⅰa	黒褐色土	黒ボク土。遺物を含む(自然堆積土)
Ⅰb	黒褐色土	Ⅰaに比べ、わずかに色が薄い(自然堆積土)
Ⅱa	暗褐色土	ローム土と黒ボク土が混濁する。シラスブロックを多く含む。
Ⅱb	褐色土	ローム土にシラスブロックを多く含む。
Ⅱc	明褐色土	ローム土にシラスブロックを多く含む。Ⅱbに比べ明るい。
Ⅱd	黒褐色土	シラスにブロックを含まない。
Ⅱe	黒褐色土	シラスにブロックを含まない。Ⅱdに比べ明るい。
Ⅲa	黒褐色土	黒ボク土とローム土が混濁する(天井崩落土)
Ⅲb	にぶい褐色土	ローム土を主体とする(天井崩落土)
Ⅳ	黄褐色土	シラスの塊(閉塞のためか)

第28図　19号地下式横穴墓実測図（S=1/50）

(3)出土遺物

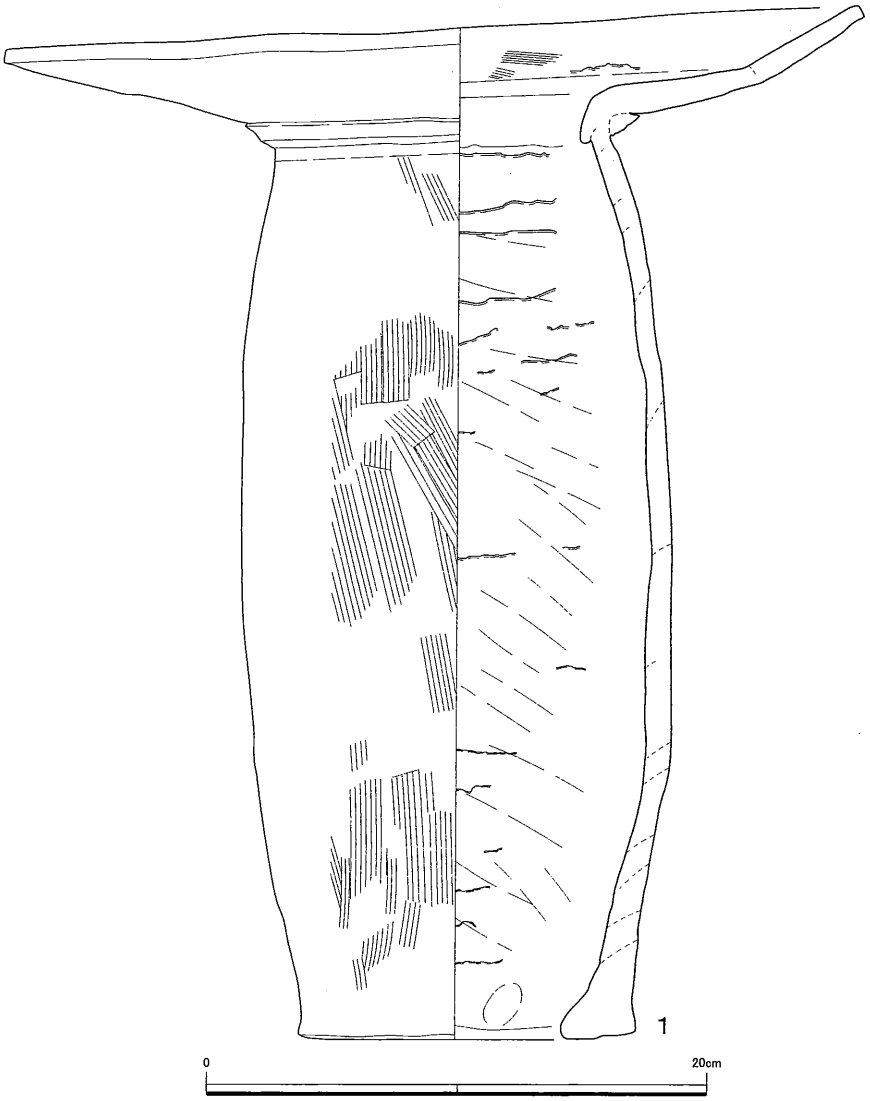
①5号墳出土埴輪

当墳出土の埴輪は、他に例を見ない特異な形態を有し、極めて独自性が強い。壺形埴輪、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪などの通有の分類にあてはめることができず、口縁部、胴部、底部とも様々な形状で、1古墳樹立の埴輪として統一された形態を有していない。円筒形の胴部を持つものもあるが、通常の円筒埴輪のように多段構成を採らず、透かし孔の穿孔もない。突帯を付設するものもあるが、各個体につき1条巡らすのみに留まる。総じて摩滅が激しく、遺存状態はあまり良好ではない。外面に黒斑の認められるものが多く、焼成は野焼きによる。詳細な時間的位置付けに関しては、第Ⅳ章第1節を参照していただきたい。

なお以下に報告する資料の多くは、これまでに刊行した概要報告書Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ(宮崎市教委 2001・2002・2003・2004)において報告したものであるが、本書では再検討を行った上で報告している。また過去報告時との対応は第8・9表の遺物観察表に明記している。

以下、各部位毎に詳述する。なお、第29図1・第30図3・第36図36・37以外の資料はすべて反転復元により、遺物観察表における径の計測値も、同様に復元径の値である。

1はやや壺に近い形態を持つ異形埴輪の完形品である。中位がやや膨らんだエンタシス状の胴部に、大きく開いた皿状の口縁部が乗り、口縁部と胴部の境には突帯が巡る。口縁部は、中ほどでやや屈曲す



第29図　生目5号墳出土遺物①(S=1/3)

る部分があり、二重口縁の退化形態とも見えるが、これは口縁製作の接合時に、一部が歪んだためで、形としては単口縁と見てよい。全体に器壁は薄手であるが、底部は大きく肥厚させている。外面調整はやや目の粗い縦ハケないし縦位に近い斜めハケの上からナデを施す。底面より 12cm ほどの高さを境にハケ調整の流れが変わり、この高さまでが底部製作における小工程の単位かと思われる。内面調整においては全面的にナデである。外面および口縁部内面に赤色顔料の付着が認められ、古墳樹立時に視認できる箇所は全面的に赤彩されていたようである。

2は完形ではないが、1/3 周ほどが残り、底部から口縁部までが揃う。底部から直線的に立ち上がり、そのまま大きく開いて二重口縁状となる異形の埴輪である。全体に薄手であるが、1同様、底部は大きく肥厚させている。外面調整は目の細かなハケ調整により、他の多くの個体のようなナデは施されない。底部は斜めハケ、胴部は縦ハケ、口縁部は横ハケによる。底面より 6.5cm ほどでハケ調整の流れが変わり、1と同様、底部製作における小工程の単位かと思われる。底部および胴部内面には、ハケやナデ調整は行われておらず、粘土紐の接合痕がほぼそのまま残る。口縁部内面は、摩滅が激しいが、かすかに横方向のハケが見て取れる。外面には黒斑が明瞭に残る。

3は普通円筒に相当する形状を持った大型の埴輪で、口縁部から胴部にかけての資料である。その大きさに比して器壁は薄く、そのために大きく歪みが生じているが、底部から口縁部まで、直線的に、垂直に近く立ち上がる形状と思われる。透かし孔は勿論、突帯も付設されておらず、外見は非常にシンプルである。外面には黒斑と赤色顔料が明瞭に残り、目の細かなハケによる調整がわずかに確認できる。

口縁部　4は二重口縁部片で、第2口縁が大きく外反し、皿状に大きく開く形態を成す。第1口縁成形後に第2口縁を接合しており、有段部における第1口縁端部形成が明瞭である。

5～8は色調、調整、胎土、傾き、復元径、線刻等が類似しており、同一個体かと思われる。

5は二重口縁の第 2 口縁に相当する部位である。下端部に第 1 口縁と剥離した痕跡がある。内面には線刻が認められるが、モチーフは判然としない。内面、外面ともに赤色顔料の付着がわずかに認められる。

6は口縁部片である。外反し、皿状に大きく開く形状を為し、二重口縁の第2口縁と思われる。内面に二重の線刻があるが、モチーフは判然としない。調整は内外面ともに丁寧なナデによる。

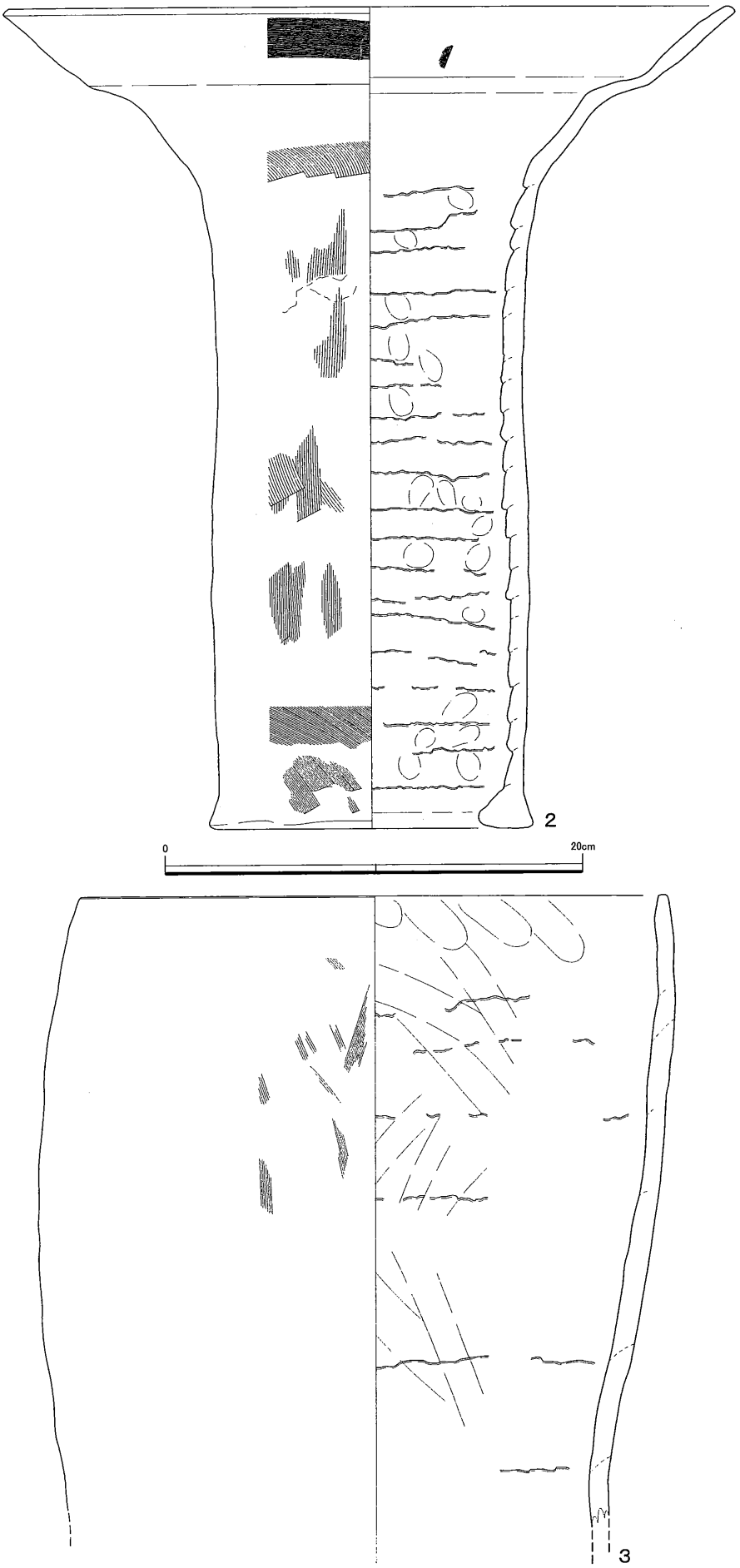
7は二重口縁の第 1 口縁に相当する部位で、口縁端部が大きく屈曲する。上端部に第 2 口縁の剥離した痕がある。内面に線刻があり、モチーフは不明であるが、鋸歯状の文様とも見える。また、線刻を施す前に、径の小さな穿孔を一箇所施しているが、用途は不明である。直線的に下方へすぼまりながら伸びるが、2と同じく、そのまま直立する胴部へ繋がって行くものと考えられる。外面に、わずかながら赤色顔料の付着が確認できる。

8は二重口縁の有段部片で、内面に二重線による線刻がある。断面には、第1口縁、第2口縁接合の粘土継ぎ目が観察される。

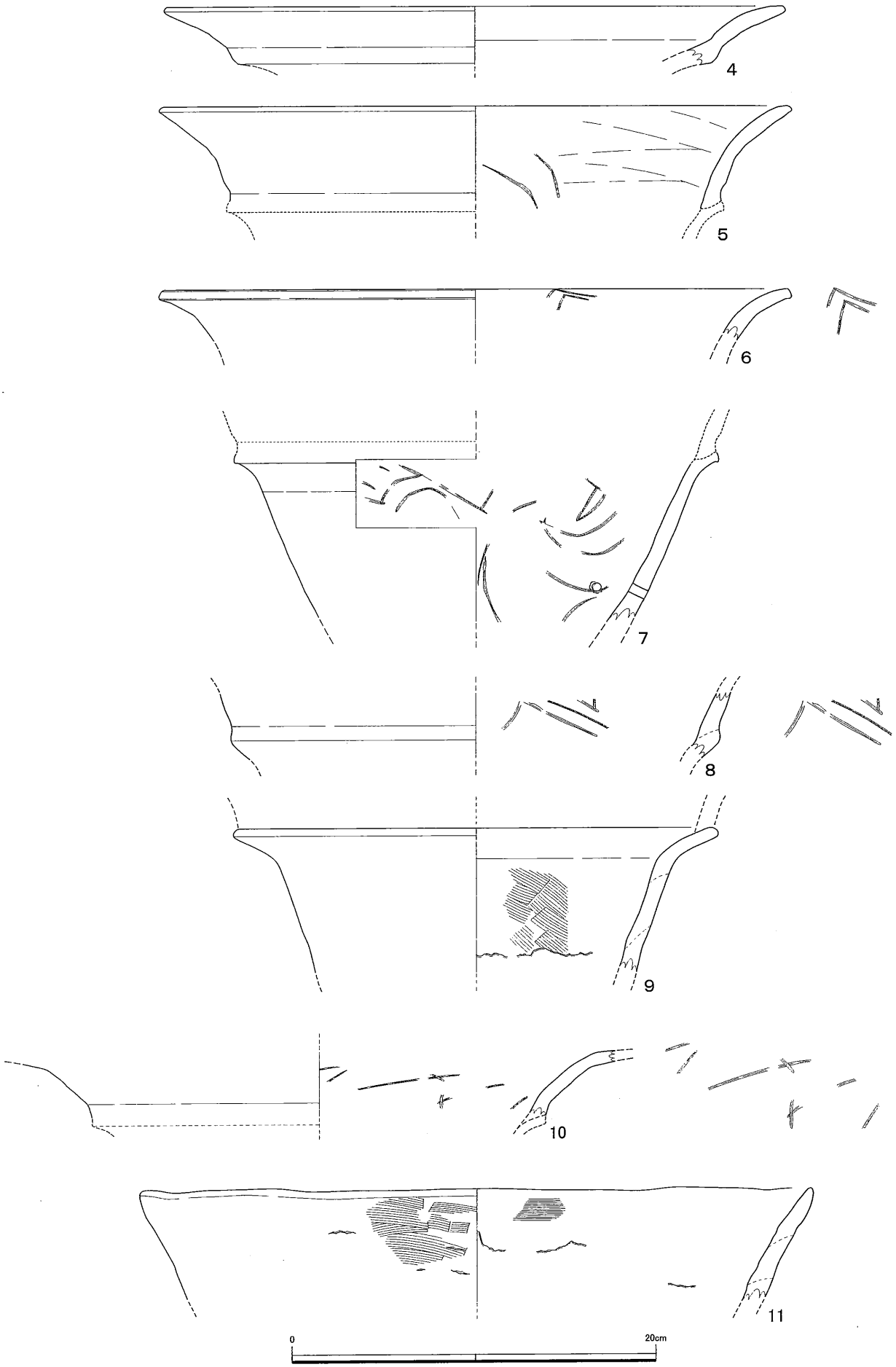
9も、二重口縁の第1口縁に相当する部位で、7と同じく端部が大きく屈曲し、内面には第2口縁の剥離した痕が観察される。外面は摩滅が激しく調整不明であるが、内面には目の細かなハケが残る。

10は二重口縁の第2口縁片である。4同様大きく外反し、皿状に開く形状をなす。下端部に第1口縁と剥離した痕跡がある。内面に線刻が認められるが、モチーフは不明である。外面はナデにより平滑に整えられる。

11は非常に径の大きな口縁部片である。二重口縁の第2口縁に相当する部位とも考えられるが、傾きが浅いため、3と同じく普通円筒に近い形状の個体かと思われる。外面、内面ともにわずかではあるが、目の細かなハケによる調整が確認できる。



第30図　生目5号墳出土遺物②(S=1/3)



第 31 図　生目 5 号墳出土遺物③(S=1/3)

胴部　12 ～ 17 はやや中位の膨らむ胴部で、1 と同じく壺に近い形状のものと思われる。
12 は胴部下位から口縁部の一部までが残る。外面には黒斑が残り、ナデによって平滑に整えられるが、内面には粘土紐接合後の調整が行われておらず、粘土継ぎ目が明瞭に残る。これにより 1.5cm ほどの幅が輪積みの単位であることが知れる。

13 は、形状、調整、胎土、色調等、12 と酷似しており、同一個体と思われる。

14 は胴部下半である。外面調整は板状工具によるナデ、内面調整は摩滅により判然としない。

15 はやや薄手の胴部片で、外面に細い二重線によりスイジ貝文様が線刻される。施文具は刀子状工具ないし指爪ではないかと思われる。外面調整、内面調整ともに目の細かなハケにより、特に、外面は、他の個体に見られるような、ハケ調整後のナデが施されていない。また外面には黒斑が残る。

16 は細片であるが、器壁の湾曲から、12 ～ 17 と同種の胴部と思われる。外面に 15 のスイジ貝文様に類似する線刻がなされ、色調や胎土等、15 に酷似し、同一個体かとも思われる。ただし 15 と異なり、線刻文様が三重線で構成されているようにも見え、確実ではない。

17 は胴部上位片で、外面に線刻が施される。具象的なモチーフと思われ、向かって左手の人物が矢で右手の鹿を射る瞬間の光景とも、右手のモチーフが魚とも見えるが、判然としない。施文具は細い棒状のものと思われる。器面は丁寧なナデによって平滑に整えられる。

18 ～ 22 も壺に近い形状の湾曲した胴部片であるが、突帯が付設、ないし突帯が剥落した痕跡が認められる。いずれの個体も突帯は 1 条しか認められない。また突帯が剥落した器面において、沈線、刺突などによる突帯設定技法の施工も認められない。突帯が残存するのは 18 と 20 のみであるが、双方ともに突帯貼り付けのナデがそれほど丁寧に行われてはおらず、突帯と器面が一体化していない。

18 は突帯が認められる個体の中で、唯一、胴部下半に突帯が巡る。突帯は突出度が高く、上辺が飛び出した断面台形状である。なお、突帯の遺存はわずかで、ほとんどは剥落している。

19 は胴部上半において突帯の剥落した痕跡が巡る。外面調整はハケの上からナデを施しているが、最終調整のナデにより、ハケ原体の櫛間等は判然としない。外面に一部赤色顔料が付着する。

20 は胴部のほぼ中位に突帯が巡る。突帯は 11 と同じく突出度が高く、上辺が張り出した断面台形状である。外面調整として目の細かな斜位の縦ハケが施され、その上からのナデは施されていない。

21 は胴部中位のやや上寄りの位置において突帯が剥落した痕跡が認められる。外面調整は平滑なナデ、内面調整は板状工具によるナデである。

22 は胴部上位に突帯が剥落した痕が観察される。外面には、わずかではあるが、タタキの痕跡が認められ、外面調整としてタタキの上からナデを施していると思われる。

23 は直線的に立ち上がり、2 ないし 3 のような円筒系の胴部を持つ器種かと思われるが、細片のため判然としない。18 ～ 22 と同様、突帯の剥落した痕跡が見られる。

24 ～ 27 は胴部が直線的に垂直に近く立ち上がる 2 と同じ器種と思われる。

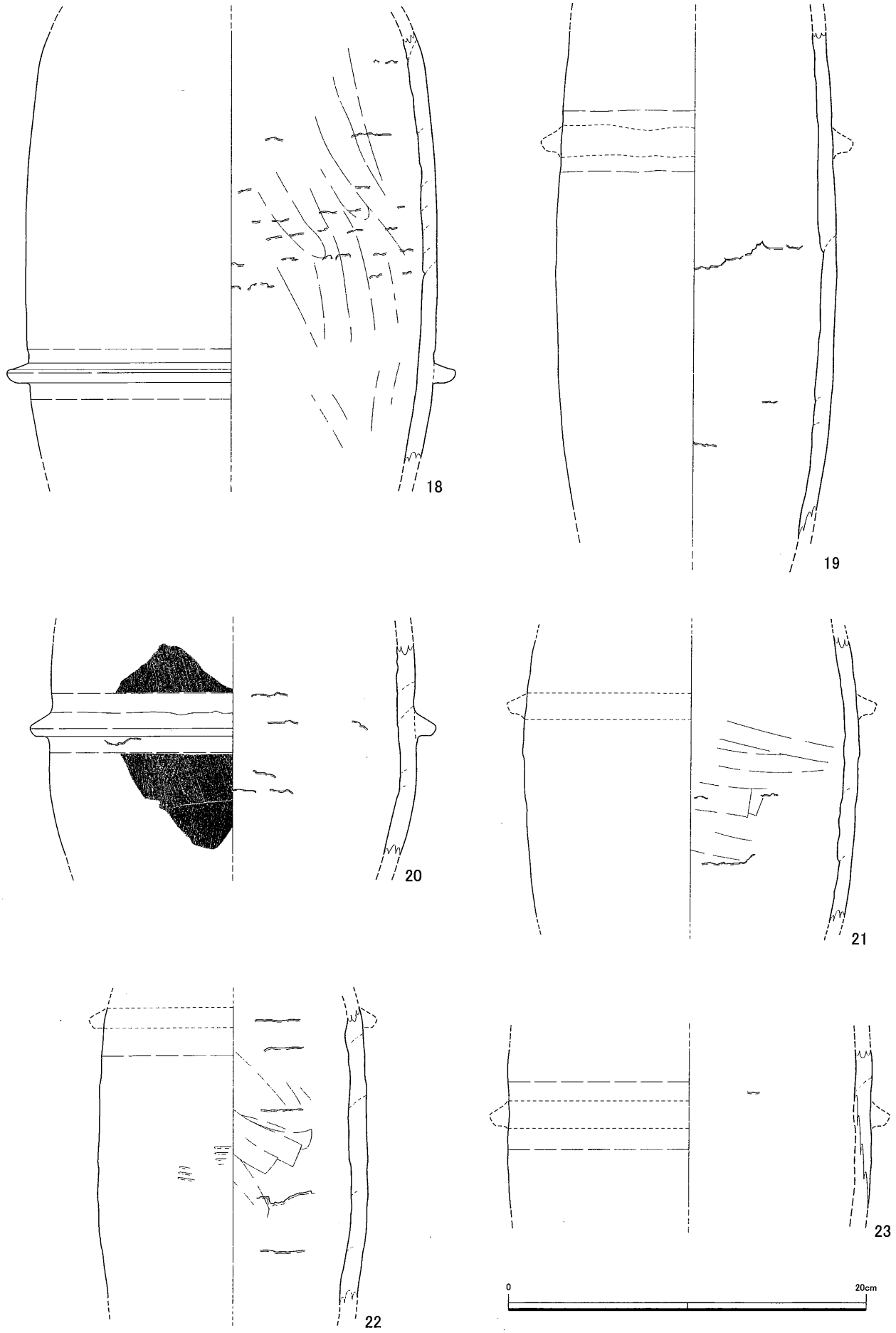
24 は口縁部との境以下が残る胴部片である。胴部と口縁部との境である現況の上端部はやや肥厚し、外傾しているため、二重口縁の第 1 口縁に相当する表現かとも思われる。表面摩滅により、調整は判然としない。

25 は胴部と口縁部の境の部位である。器壁の屈曲する位置が突帯状の粘土紐で肥厚されており、第 1 口縁に相当する表現かと思われる。粘土紐の形成及び貼り付けに伴うナデは見て取れるが、外面、内面ともに摩滅により調整は判然としない。

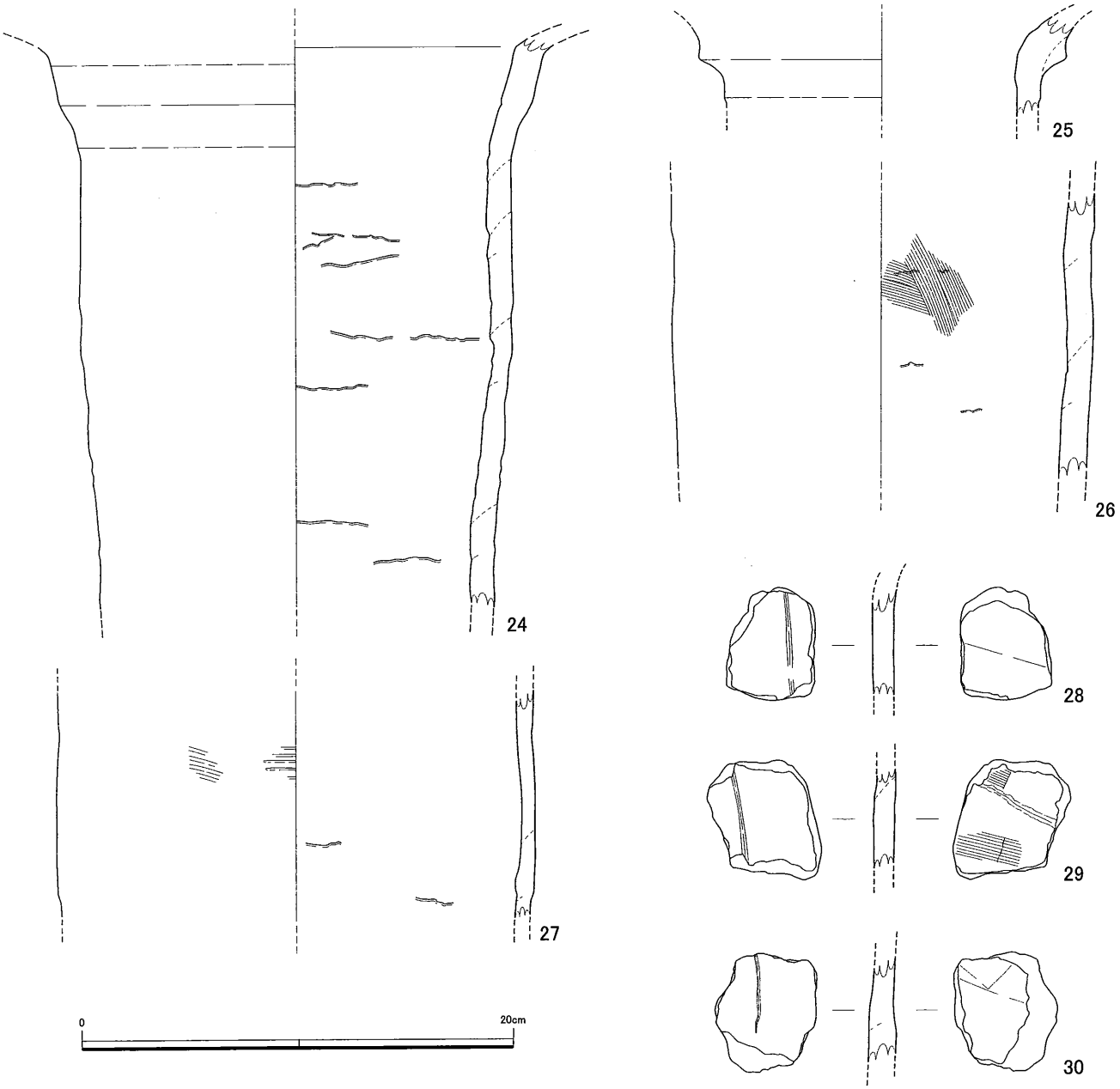
26 は直立する胴部である。内面調整として、目の細かなハケが施されている。

27 も直立する胴部片で、極めて器壁が薄い。22 同様、外面調整としてタタキが見え、その上からナデ

第32図　生目5号墳出土遺物④(S=1/3)



第 33 図　生目 5 号墳出土遺物⑤(S=1/3)



第 34 図　生目 5 号墳出土遺物⑥(S=1/3)

が施されている。

28 ～ 30 はいずれも胴部片であるが、色調や胎土、外面における線刻などが共通しており、同一個体と思われる。線刻は刀子状工具により、いずれも縦位の沈線が 1 条施されている。

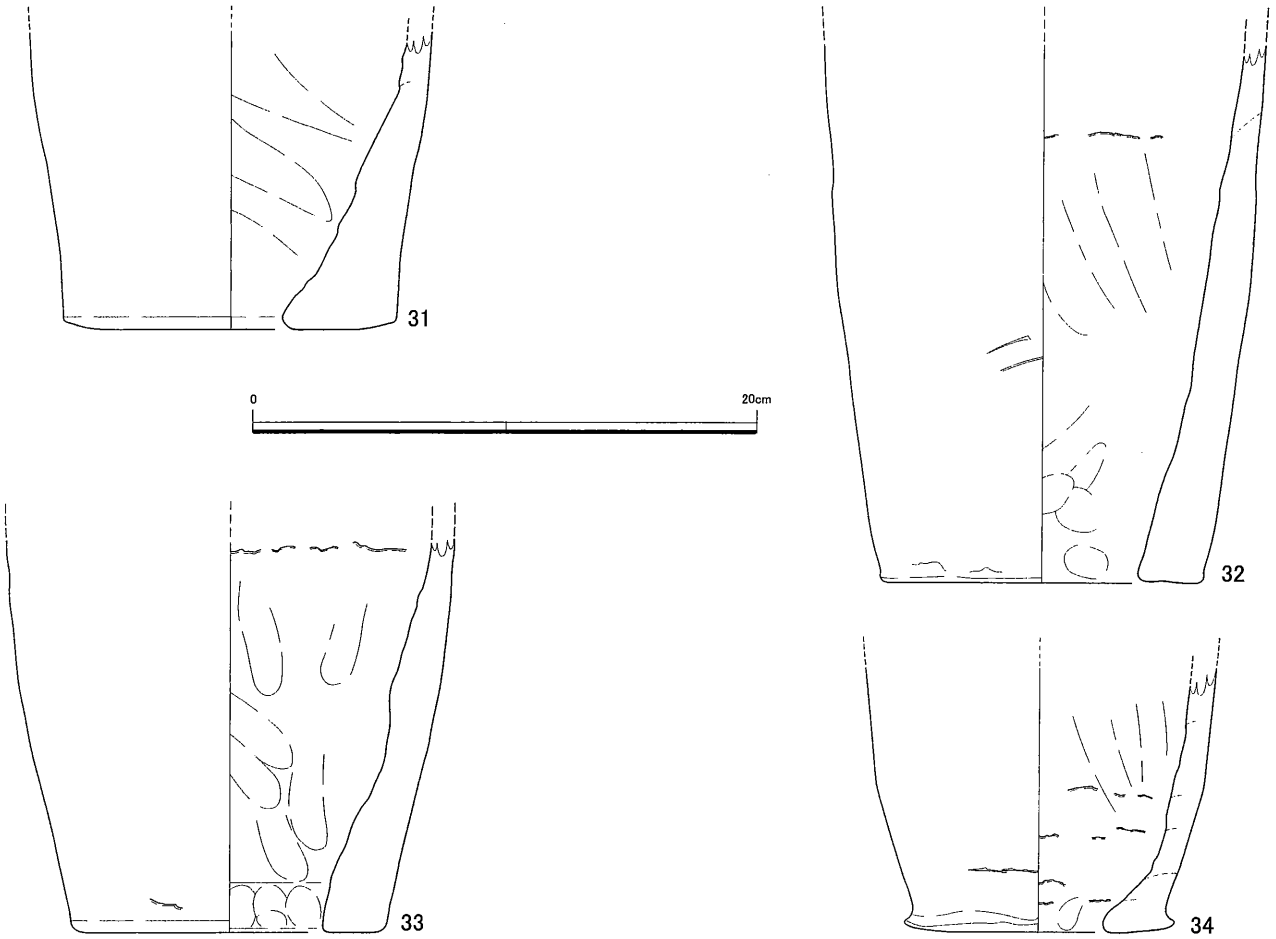
28 は上部がやや外反しており、口縁部近くの部位かと思われる。内面上半は指ナデ、下半は板状工具によるナデである。

29 は内面にハケ調整が施され、また、何らかの工具が当ったかと思しき傷が確認できる。

30 は内面上半に板状工具によるナデが施される。

底部　31 ～ 34 は外見上、下にすぼまる形状で、壺に近い形状を持った器種の底部である。ただし、底部孔の成形は焼成前、焼成後において底面に孔を穿孔する刳り貫き成形ではなく、円筒埴輪と同じく、最初から孔が設けられたドーナツ状の基底に粘土紐を積み上げていく積み上げ成形による。

31 は底に下がるに従って器壁が大きく肥厚し、断面三角形状をなす。相対的に底部孔が小さい。外面調整は摩滅により不明であるが、内面調整は指ナデによる。



第35図　生目5号墳出土遺物⑦(S=1/3)

32も底に下がるに従って器壁が厚くなるが、極端に肥厚するわけではなく、比較的均整がとれている。外面調整は摩滅により不明であるが、工具端の痕跡がかすかに見て取れ、板状工具によるナデかと思われる。内面は強めのナデによる。

33も32と同じく、底に下がるに従って器壁が肥厚化するが、極端に肥厚化するわけではない。外面調整は摩滅により不明、内面調整は指ナデによる。

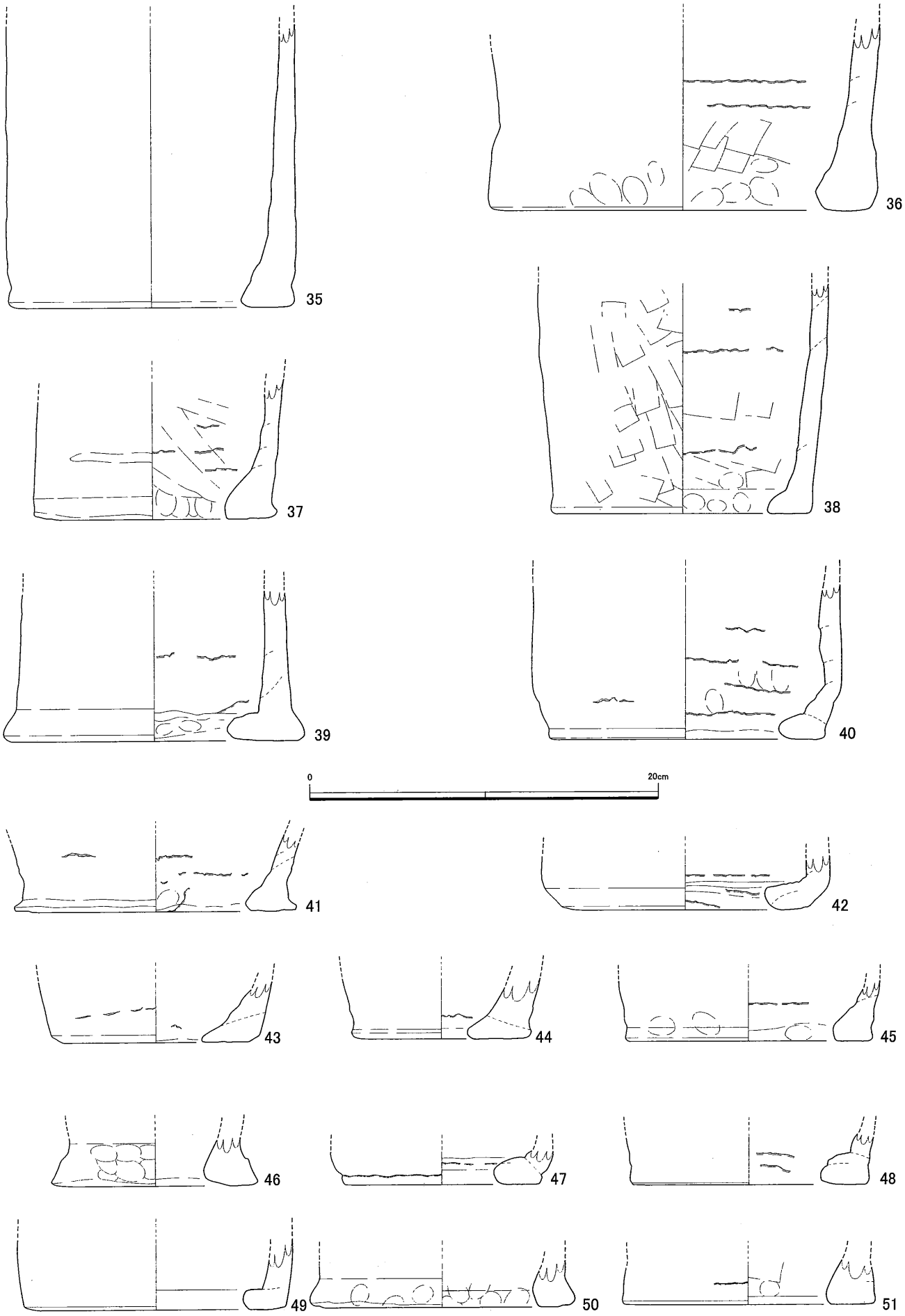
34は底面付近のみが肥厚する。他の個体のように内面だけでなく、外面においても端部が突出し、断面T字状の形態を成す。外面調整は摩滅により判然としないが、板状工具によるナデかと思われる。内面調整は板状工具によるナデである。

35～40は、いずれも底部から胴部にかけて直線的に垂直に近く立ち上がる器種の底部である。径が大き目の36以外は2と同じ器種と思われる。すべて底面付近を肥厚させているが、先述の31～34のように胴部下半から徐々に肥厚して断面三角形になるものの他に、底面が内側に飛び出し、断面L字状になるものがある。

35は断面三角形状に肥厚した底部である。内外面ともに摩滅により調整は不明である。

36も断面三角形状に肥厚した底部である。他の個体に比して径が大きいため、3のような円筒埴輪に相当する器種の可能性もある。内面には板状工具によるナデの痕が残る。

37も断面三角形状に肥厚した底部である。内面調整は板状工具によるナデである。また外面には、何らかの工具があたったかと思しき傷が付いている。



第 36 図　生目 5 号墳出土遺物⑧(S=1/3)

38 は断面Ｌ字状の底部である。外面、内面ともに板状工具によるナデが施されている。

39 も断面Ｌ字状の底部であるが、基底が内側だけでなく外側に張り出し、Ｔ字状を呈している。摩滅により、内外面ともに調整は判然としない。

40 も断面Ｌ字状の底部である。断面に残る粘土継ぎ目により、底面内側に粘土を充填して肥厚させたのではなく、もともと一回り太い粘土紐を基底に使ったことがわかる。

41 は断面三角形状の底部で、基底は外側にも大きく張り出す。傾きから壺に近い形状を持つ器種の底部かと思われるが、胴部の残りが少なく、判然としない。基底内面には、粘土紐を輪状に繋いだ時の接合痕が残る。また外面にも一部、粘土紐輪積みの接合痕が残る。

42 は断面Ｌ字状の底部で、基底が内側に大きく張り出ている。摩滅により内外面ともに調整は不明である。

43･44 は断面三角形状に肥厚した底部である。傾きから壺に近い形態を持つ器種の底部と思われる。43 は外面にも粘土紐の接合痕が残る。ともに調整は判然としない。

45 も断面三角形状の底部である。基底付近の内外面に、成形時の指オサエ痕が残る。

46 も断面三角形状の底部であるが、基底の内側だけでなく外側にも大きく張り出している。外面には基底成形時の指オサエが明瞭に残る。

47 は断面Ｌ字状の底部である。断面に残る粘土継ぎ目により、40 と同じくもともと一回り径の太い粘土紐を基底に使ったことがわかる。

48 も 47 同様一回り径の大きな粘土紐を基底に使い、断面Ｌ字状になる。

49 は断面Ｌ字状に整形された底部である。外面調整はナデと思われるが確実ではない。

50 は断面三角形状の底部であるが、基底が外側に大きく張り出している。また外面、内面には基底成形時の指オサエが明瞭に残る。

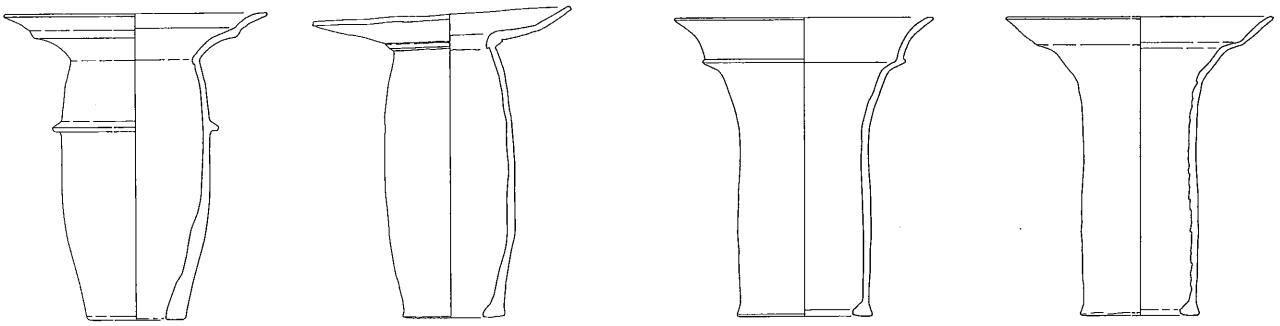
51 も断面三角形状の底部である。内面にはわずかに板状工具によるナデの痕が残る。

以上に見てきた埴輪片は、同じ部位の資料であっても、口縁部形態、底部形態等、細部において様々な違いがあり、所謂「一個体一型式」とでも言うべき煩雑な状況を呈する。完形に近い資料３点（１～３）についても、それぞれが別種の埴輪であるが、この３点を軸として見ると、他の資料もほぼすべてこの３種に分類できるようである。

完形に近い３点の特徴は、１：胴部の伸長化した壺に近い形態を有し、皿状に大きく広がる口縁部を持つ、２：円筒状の直立する胴部、底部を持ち、胴部から直接、二重口縁の退化したと思しき口縁部へと繋がる、３：円筒形の口縁部、胴部を持つ、となる。これらを便宜上それぞれＡ類、Ｂ類、Ｃ類と呼称し、前項までに見た各部位毎の資料を分類する。

口縁部については、まず 11 がＣ類と考えられる。11 は直線的に外傾する口縁部片で、直立する口縁部の３とはやや異なるが、その径の大きさから、Ａ類・Ｂ類には整合せず、３に近似するため、Ｃ類と思われる。なおＣ類に分類されるものはこの３・11 のみで、他に胴部、底部資料においても、確実にＣ類に含まれると思しきものはない。二重口縁の７・９は第１口縁の傾斜角が垂直に近く、そのまま胴部へと繋がると考えられ、Ｂ類に分類される。また５・６・８は７と同一個体である可能性が高いため、同じくＢ類に含まれる。４は第２口縁が皿状に大きく広がり、第１口縁の傾斜角度も水平に近く広がるものであるため、１の口縁部形状に近く、Ａ類に含まれる。

次に胴部であるが、エンタシス状に中ほどが膨らむ 12 ～ 17 はＡ類、円筒状に直立する 24 ～ 27 はＢ類となる。また１条の突帯が巡る資料のほとんどはエンタシス状に膨らみ、Ａ類に分類される。唯一



第37図　生目5号墳出土埴輪の復元案（S＝1/10）

23のみが直立する胴部のように見えるが、何分、細片のため、確定的ではない。

最後に底部であるが、底面に向かって先細り気味の外形となる31～34はA類、直立する胴部へと繋がる35・37～40はB類である。36は他の資料に比して径が大きく、C類の可能性があるが、確実ではない。

以上をまとめると、以下のようになる。

A類　完　形：1
　　口縁部：4
　　胴　部：12・13・14・15・16・17
　　18・19・20・21・22(有突帯)
　　底　部：31・32・33・34
B類　完　形：2
　　口縁部：5・6・7・8・9
　　胴　部：24・25・26・27
　　23？(有突帯)
　　底　部：35・37・38・39・40
C類　完　形：3
　　口縁部：11
　　胴　部：23？(有突帯)
　　底　部：36？

以上の3種において、円筒形の口縁部を持つC類は資料数が極めて少ないために言及のしようもないが、壺状の口縁部を持つA類・B類については、胴部が壺状か円筒状かの差異であり、それ以外の要素に大きな違いはなく、径や器高なども整合性が高い。二重口縁に近い形状の口縁部を持つことからも、ともに壺形埴輪を基として変容したものと考えられるが、円筒状の胴部を持つものは、その胴部形態に円筒埴輪の一部要素を取り込んで成立したものであろう。

また、二重口縁のA類・B類は、それぞれの中で口縁部の様相に二相が見出せる。すなわち、二重口縁における第1口縁の端部が明確に作り出され、第1口縁と第2口縁の境が明瞭なものと、第1口縁の端部が明確ではなく、第1口縁と第2口縁がほぼ同化したものの二種である。この口縁部における二相は、時期差ないし工人の習熟度の度合いとも取れるが、この口縁部における差異は、同古墳群内の生目

14 号墳にも見られる。14 号墳は 5 号墳における A 類と類似した埴輪を持ち、かつ 5 号墳に先行する様相を持つ。つまり二重口縁の作りにおける差異を、時間的要因によるものとするのは、14 号墳、5 号墳ともに同じ新旧の要素を持つということになるために、成立しない。ここでは単純に工人の違いによる差異ととらえておきたい。

以上を踏まえて、5 号墳における A・B 両類の埴輪を復元したものが第 37 図である。両類ともに、有段部における第 1 口縁端部が明瞭な二重口縁壺の口縁部に近い形態を持つものと、第 1 口縁と第 2 口縁が同化した二重口縁ないし単口縁を持つものという別があるが、壺の頸部に相当する部位はない。また、突帯を有することが確実なのは A 類のみで、B 類における突帯の付設は確定的ではない。なお、個体数の少ない C 類は径が大きく、A・B 類とは異なる大型の埴輪であったかと思われるが、A・B 両類の間においては、径や高さにある程度の共通性があり、「大きさ」という点において、同一古墳に樹立される埴輪としての統一がとられていたものと思われる。

【参考文献】

宮崎市教育委員会　2001　『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ』　宮崎市文化財調査報告書第 46 集
宮崎市教育委員会　2002　『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ』　宮崎市文化財調査報告書第 52 集
宮崎市教育委員会　2003　『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅳ』　宮崎市文化財調査報告書第 54 集
宮崎市教育委員会　2004　『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅴ』　宮崎市文化財調査報告書第 57 集

②5 号墳出土土師器

52 ～ 56 は 5 号墳出土の遺物である。遺構の項でも述べたように、5 号墳からは墳丘上、周溝内を含め、埴輪以外の土器類の出土量が乏しかった。52、53 は壺形土器である。いずれも、西側くびれ部付近の周溝内の底面から出土している。52 は、胴部下半の 1/3 ほどが欠損するものの形態を確認することができる。中型の短頸壺である。外傾する。口縁部を有し、端部付近で僅かに内湾する。長胴であるが中位付近で最大径を持つ。淡褐色の焼き色で、混和材には礫を多く含む。調整は粗いナデを施すが、胴部内面の上位には、輪積みの痕跡が残る。底部は欠損するが、丸底ないし、丸底に近い平底を呈していたと考えられる。53 は胴部下半の資料である。52 に比べ、膨らみを持つ胴部で、本来は 52 より大型の壺であったと考えられる。52 と同様に淡褐色の焼き色であるが、混和材には砂を多く含み、ザラッとした手触りである。尖底気味の丸底を呈する。54 ～ 56 は土師器の高坏の資料であるである。いずれも短い脚柱部を持ち、小型の高坏であったと考えられる。54 は脚柱部が直線的に裾部に向かって開くが、55、56 はエンタシス状の膨らみを持ちながら裾部に向けて開く。いずれも裾部との境には稜が入る。坏部に向けても大きく開く状況があるが、坏部の接合方法に違いがあり、54、56 は充填法により接合する。

③19 号地下式横穴墓出土遺物

57 ～ 65 は 19 号地下式横穴墓出土遺物である。57 ～ 63 は 19 号地下式横穴墓の竪坑堆積土の最上層及び遺構検出時に遺構上で認められたものである。57 は小型の甕形土器で、口縁部は弱い屈曲を持ち外に開く。胴部上位に最大径を持ち、口縁部幅とほぼ同じになる。底部は丸底になる。調整、整形ともに粗雑な作りであり、ススの付着も認められ、元々は日用品として使用された可能性がある。58 は完形の小型の壺形土器である。口縁部は単口縁で明瞭な屈曲を持って外傾する。胴部は球体に近く、底部は平底を呈する。全体に器壁が分厚く、特に底部は著しい。外面は丁寧なナデで仕上げられている。59 ～ 63 は高坏の資料である。59 は唯一の坏部である。やや丸みを帯びる受部を有し、弱い稜を持って後円部は大きく外傾する。表面は風化しているが、内外面にミガキが見られる。60 ～ 62 はいずれも短い

高坏の脚部で短い脚柱部である。60、61 はエンタシス状の脚柱部を持つが、62 は裾部に向かってハの字に開く状況がある。いずれも坏部との境は明瞭である。64、65 は鉄鏃で、玄室内で副葬されたものである。いずれも矢柄の遺存はない。64 は圭頭鏃、65 は片刃の短頸鏃である。

④出土位置からみた遺物の出自について

これら出土した遺物のうち、埴輪（1 ～ 51）は墳丘二段目の平坦面上に配置されたものが斜面部や 1 段目のテラス付近に転落した状態で出土したとして違わないと考えられる。57 ～ 65 についても 19 号墳に伴う資料である。問題として残るのが 52 ～ 56 の土師器類の土器である。再度整理すると、52、53 はくびれ部西側の周溝内の底面付近から出土している。付近からはこの 2 点を除いて遺物の出土はなく、墳丘寄りの位置で出土していることから、墳丘上、墳裾周辺からの転落したものと考えたい。後述する 54 ～ 56 の状況を踏まえると、埴輪以外で 5 号墳の構築時期を判断することのできる数少ない資料と考えられる。

次に 54 ～ 56 の一群であるが、後円部北西側の周溝の外縁付近から集中して出土しており、これら以外に周辺の周溝内からの出土遺物はなく、墳丘上に配置されたものの転落とは考えにくい。周溝底面から 10 ～ 20cm ほど浮いた位置で出土しており、周溝の外から流入したような状況が見てとれた。周溝外縁の 3mほど先では 19 号地下式横穴墓が確認されている。これら 54 ～ 56 の高坏と、19 号地下式横穴墓出土の高坏を比較すると、形態的に違いが見られない。これらの状況から 54 ～ 56 は、本来は 19 号地下式横穴墓の墓前祭祀に使用された土器類の一部が、時間の経過により 5 号墳の周溝内に流入したものと判断される。また、その見地に立てば、19 号地下式横穴墓が 5 号墳構築後に造られた判断材料にもなる。19 号地下式横穴墓出土の土師器類は、概ね 5 世紀前半から中頃のものと考えられる。生目古墳群が属する宮崎平野部の大淀川下流域では、この時期に相当する時期の良好な資料に乏しいが、基点となるものとして、江田原第 3 遺跡 SE 1 出土（古墳周溝）の一括資料がある。この資料には TK216 段階のハソウを伴っており、土師器類では特に高坏の出土量が目立つ。これら江田原第 3 遺跡出土の高坏と 19 号出土の高坏を比較すると、坏部における受部と口縁部間の稜の状態、脚部のエンタシス状の脚柱部、脚柱部から裾部への広がり方の状況から、19 号地下式横穴墓の高坏群が古相の様相を呈していると判断される。以上のことから 19 号地下式横穴墓は TK216 段階かもしくは若干それを遡る時期の構築と考えられ、5 号墳もまたそれ以前の構築といえる。

【参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター　1999 『上の原第 3 遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 13 集

新富町教育委員会　1996 『北原牧地区遺跡　上園遺跡 A・B・C 地区（I） 上園遺跡 E 地区（I）』 新富町文化財調査報告書第 13 集

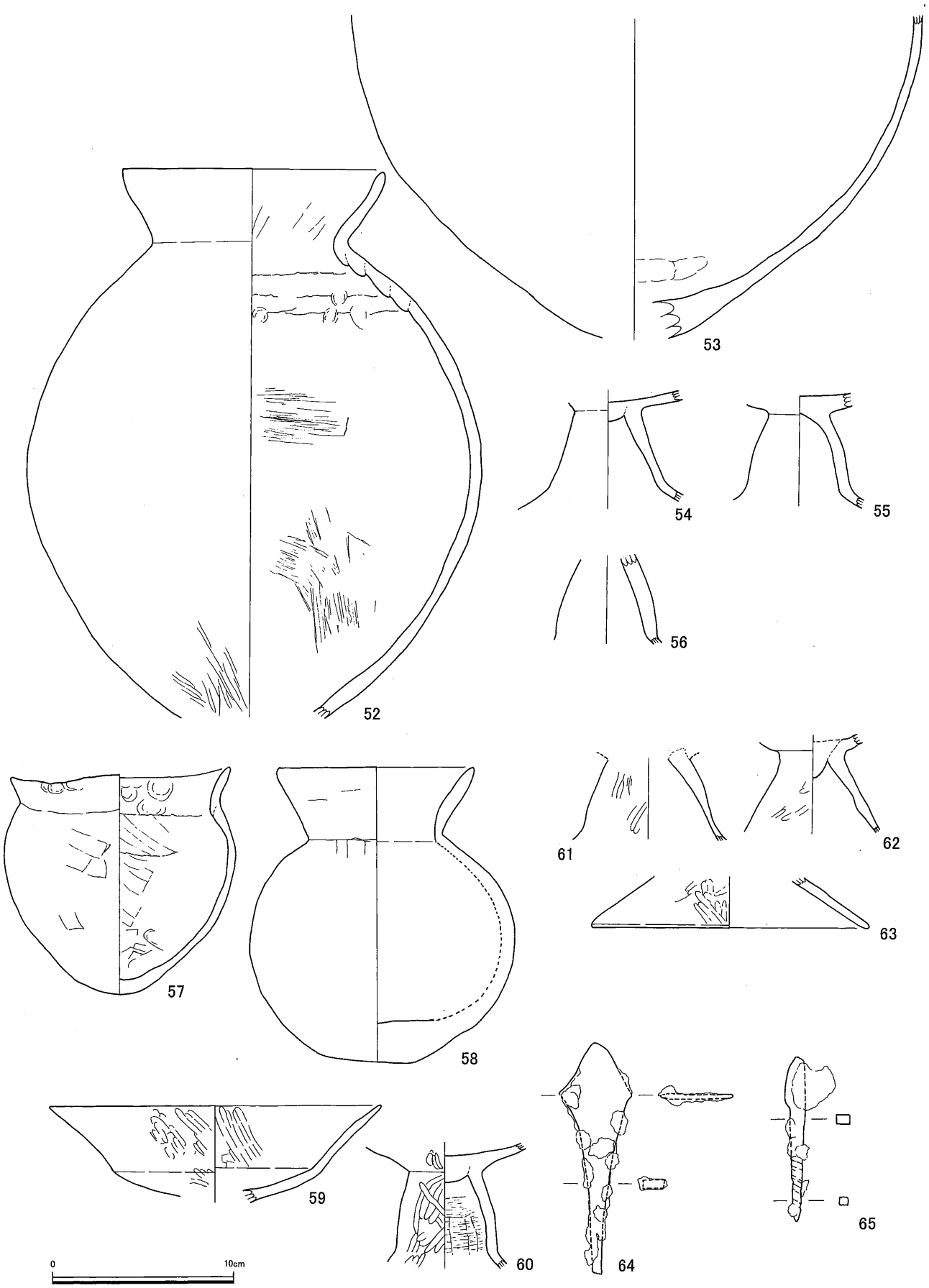
宮崎市教育委員会　2000 『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書 I』 宮崎市文化財調査報告書第 42 集

宮崎市教育委員会　2002 『江田原第 3 遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第 50 集

宮崎市教育委員会　2004 『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書 V』 宮崎市文化財調査報告書第 57 集

今塩屋毅行・松永幸寿　2002 「日向における古墳時代中～後期の土師器―宮崎平野を中心にして―」『古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』 第 5 回九州前方後円墳研究会

松永幸寿　2004 「日向における古式土師器の成立と展開」『西南四国―九州間の交流に関する研究』 研究代表者下條伸行



第38図　生目5号墳出土遺物⑧・19号地下式横穴墓出土遺物（S＝1/3）

第8表　出土埴輪観察表①

	部位	法量(cm)				突帯高(cm)	焼成	色調		調整		胎土	備考	概報報告番号	注記記号
		全高	口	胴	底			外面	内面	外面	内面				
1	完形	39.8～41.6	34.3	18.6	13.6	－	やや良	淡黄色	淡黄色	ハケ(6条/cm)の上からナデ	ナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有	口縁部と胴部の境に突帯　外面及び口縁部内面赤彩　外面黒斑	Ⅲ第8図3・Ⅳ第5図5	IMK5Ⅱa2
2	口～底	39.0	34.5	15.0	15.4	－	やや良	淡黄色	淡黄色	ハケ(10条/cm)	口縁部横ハケ胴部・底部は粘度紐接合後の調整なし	径5mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑	Ⅳ第5図8	IMK5 IC-6
3	口～胴	－	28.0	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ	ナデか	径2mm以下の砂粒を含有	外面赤彩　外面黒斑	Ⅲ第8図2・Ⅳ第5図10	－
4	口縁部	－	33.5	－	－	－	やや良	浅黄橙色	褐灰色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	二重口縁第2口縁	Ⅴ第6図4	IMK5Ⅲb-Ⅱ-29
5	口縁部	－	34.2	－	－	－	やや良	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を含有	二重口縁第2口縁	Ⅳ第6図18	IMK5Ib.305他
6	口縁部	－	32.8	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	内面に二重沈線による線刻　二重口縁	Ⅳ第6図20	IMK5Ib303
7	口縁部	－	－	－	－	－	やや良	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を含有	二重口縁第1口縁外面赤彩	Ⅳ第6図19	IMK5Ib・①4他
8	口縁部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	内面に二重沈線による線刻　二重口縁	Ⅳ第6図21	IMK5Ib311
9	口縁部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ハケ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	二重口縁第1口縁	Ⅳ第6図17	5IC-1
10	口縁部	－	－	－	－	－	やや良	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	内面線刻　二重口縁	Ⅳ第6図22	IMK5Ib.303
11	口縁部	－	36.6	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ	ハケ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	円筒形か	－	IMK5IC-Ⅱ・253等
12	口～胴	－	－	18.9	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	粗いナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有	7と同一個体か外面黒斑	Ⅳ第5図6	IMK5Ib④-2他
13	口～胴	－	－	17.3	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	粗いナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有	6と同一個体か	Ⅳ第5図7	IMK5Ib④-2他
14	胴部	－	－	18.6	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	板状工具ナデ	ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有		－	IMK5Ib・301
15	胴部	－	－	21.2	－	－	やや良	淡黄色	淡黄色	ハケ(7条/cm)	ハケ(7条/cm)	径1mm以下の砂粒を含有	外面スイジ貝文様線刻	Ⅳ第5図11	IMK.5Ib.②-2他
16	胴部	－	－	－	－	－	やや良	淡黄色	灰白色	ナデか	ナデか	径1mm以下の砂粒を多量に含有	外面線刻　15と同一個体か	－	IMK5Ⅲb・Ⅱ・8
17	胴部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	外面線刻	Ⅴ第6図8	IMK-5Ⅲb-Ⅱ-28
18	胴部	－	－	18.6	－	1.3	やや良	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	突帯1条　外面黒斑	Ⅲ第8図4・Ⅳ第5図2	IMK5Ⅱb8 001205他
19	胴部	－	－	15.7	－	－	やや良	淡黄色	淡黄色	板状工具によるナデの上から丁寧なナデ	板状工具ナデ・指ナデ	1mm以下の砂粒を多量に含有	突帯剥落痕　外面微量に赤彩	Ⅳ第6図14	IMK5IC-7-①
20	胴部	－	－	20.4	－	1.2	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ	ナデか	1mm以下の砂粒を多量に含有	突帯1条	Ⅳ第6図13	IMK.5Ib.Ⅱ.206
21	胴部	－	－	19.5	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	板状工具ナデ	2mm以下の砂粒を多量に含有	突帯剥落痕	－	IMK5IC⑦-2
22	胴部	－	－	15.0	－	－	やや良	明褐灰色	明褐灰色	タタキの上からナデ	板状工具ナデ	径1mm以下の砂粒を含有	突帯剥落痕	Ⅳ第6図15	IMK5Ib-302
23	胴部	－	－	20.1	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径1mm以下の砂粒を含有	突帯剥落痕	Ⅳ第6図16	IMK5Ib・208
24	口～胴	－	－	19.8	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	不明	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅳ第5図9	IMK5Ib-①9他
25	口～胴	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	灰白色	不明	不明	径3mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第5図9	IMK5Ⅲb・35
26	胴部	－	－	19.2	－	－	やや良	淡黄色	灰白色	ハケ上からナデか	ハケ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑・赤彩	－	IMK5IC-Ⅱ・273他
27	胴部	－	－	21.9	－	－	やや良	浅黄橙色	にぶい黄橙色	タタキの上からナデ	ナデか	径1mm以下の砂粒を含有		－	IMK5Ib・302
28	胴部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	指ナデ・板状工具ナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	外面沈線1条	－	5Ⅲb-29
29	胴部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ハケ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	外面沈線1条	－	IMK-5Ⅲb-Ⅱ-29
30	胴部	－	－	－	－	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	板状工具ナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	外面沈線1条	－	IMK5Ⅲb38
31	底部	－	－	－	13.1	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	指ナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑	Ⅳ第6図25	IMK5IC.Ⅰ.207
32	胴～底	－	－	－	12.8	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	板状工具ナデか	指ナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅱ第4図1	IMKⅡ5J5
33	底部	－	－	－	12.3	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	指ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑	Ⅳ第6図24	IMK5IC⑤2他
34	底部	－	－	－	10.7	－	やや良	浅黄橙色	灰黄色	板状工具ナデか	板状工具ナデ	径3mm以下の砂粒をまだらに含有		－	IMK5IC-ベルト内-3
35	胴～底	－	－	16.3	16.4	－	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	不明	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅳ第6図30	IMK5Ib③-2

第9表　出土埴輪観察表②

	部位	法量(cm)				突帯高(cm)	焼成	色調		調整		胎土	備考	概報報告番号	注記記号
		全高	口	胴	底			外面	内面	外面	内面				
36	底部	—	—	—	21.6	—	やや良	灰白色	灰白色	ナデか	板状工具ナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	全周	Ⅳ第6図26	ⅢK5ⅠC8
37	底部	—	—	—	13.8	—	やや良	にぶい黄橙色	褐灰色	ナデか	板状工具ナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有	全周	—	ⅢK5ⅠC-⑨
38	底部	—	—	—	13.5	—	やや良	浅黄橙色	灰白色	板状工具ナデ	板状工具ナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅳ第6図28	ⅢK5ⅠC-⑩
39	底部	—	—	—	17.1	—	やや良	浅黄橙色	灰白色	不明	不明	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑	Ⅳ第6図29	ⅢK5ⅠC-Ⅱ・272
40	底部	—	—	—	15.9	—	やや良	浅黄橙色	灰白色	ナデか	ナデか	径2mm以下の砂粒を含有		Ⅳ第6図27	ⅢK5ⅠC-Ⅰ 165 他
41	底部	—	—	—	16.1	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅱ第4図2	ⅢKⅡ5C-4
42	底部	—	—	—	17.6	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	不明	径5mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5Ⅰb300
43	底部	—	—	—	11.6	—	やや良	灰白色	浅黄橙色	不明	不明	径1mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5Ⅰb-Ⅱ 86
44	底部	—	—	—	10.2	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	不明	径2mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5ⅠC 一括
45	底部	—	—	—	14.0	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	不明	不明	径3mm以下の砂粒を多量に含有	底面木葉痕	—	ⅢK5ⅠC-Ⅰ-68
46	底部	—	—	—	11.8	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5ⅠCⅡ-246
47	底部	—	—	—	11.4	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径2mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5Ⅰb304
48	底部	—	—	—	13.6	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径1mm以下の砂粒を多量に含有	外面黒斑	Ⅴ第6図7	ⅢK5ⅢB-73
49	底部	—	—	—	14.9	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅱ第4図3	ⅢKⅡ5J2
50	底部	—	—	—	15.2	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有		—	ⅢK5ⅠC-カクラン
51	底部	—	—	—	14.4	—	やや良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデか	板状工具ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有	底面木葉痕	Ⅴ第6図6	ⅢK5Ⅲb 周溝一括

第 10 表　出土土師器観察表

	器種	部位	出土位置	法量(cm)				色調		調整		胎土	備考	概報報告番号	注記記号
				全高	口	胴	底	外面	内面	外面	内面				
52	壺	口～胴	5号墳西側くびれ部付近周溝底面	(31.5)	14.5	25.0	—	淡黄	褐	ナデ	ハケナデ	径2mm以下の砂粒を多量に含有	底部欠損	Ⅰ第9図6 Ⅳ第5図1	ⅢK5G-1
53	壺	胴～底	5号墳西側くびれ部付近周溝底面	—	—	—	—	淡黄	褐灰	ナデか	ナデか	径3mm以下の砂粒を多量に含有	底部欠損	Ⅰ第9図7	ⅢK5G-2
54	高杯	脚柱	後円部北西側周溝外縁	—	—	—	—	橙	橙	不明	不明	径1mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第6図3	ⅢK5Ⅲb-76
55	高杯	脚柱	後円部北西側周溝外縁	—	—	—	—	浅黄橙	橙	不明	不明	径2mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第6図1	ⅢK5Ⅲb-76
56	高杯	脚柱	後円部北西側周溝外縁	—	—	—	—	黄橙	橙	ナデか	ナデ	径2mm以下の砂粒を含有		Ⅴ第6図2	ⅢK5Ⅲb-54
57	甕	完形	19号地下式横穴墓竪坑内堆積土上層	13.0	12.0	13.0	丸	橙	褐	ナデ	ハケナデ	径4mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図11	ⅢK 19号地下5
58	壺	完形	19号地下式横穴墓竪坑内堆積土上層	16.5	11.0	15.0	5.0	橙	黄橙	ナデ	ナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図12	ⅢK 19号地下1
59	高杯	杯	19号地下式横穴墓竪坑上位	—	18.5	—	—	にぶい橙	褐	ミガキ	ミガキ	径1mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図13	ⅢK 19号地下2
60	高杯	脚柱	19号地下式横穴墓竪坑上位	—	—	—	—	橙	にぶい褐	ミガキ	ケズケ	径3mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図14	ⅢK 19号地下3
61	高杯	脚柱	19号地下式横穴墓竪坑内堆積土上層	—	—	—	—	橙	橙	ミガキ	ナデ	径3mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図15	ⅢK 19号地下3
62	高杯	脚柱	19号地下式横穴墓竪坑内堆積土上層	—	—	—	—	橙	橙	ミガキ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図16	ⅢK 19号地下
63	高杯	脚裾	19号地下式横穴墓竪坑上位	—	—	15.5	—	浅黄橙	橙	ミガキ	ナデ	径1mm以下の砂粒を多量に含有		Ⅴ第8図17	ⅢK 19号地下

第Ⅲ章　まとめ

第１節　５号墳出土埴輪の時間的位置付けについて

埴輪は、普遍的な形態を持ち、古墳時代においてほぼ通時的に用いられたものであること、多量に用いられた墳丘表飾物であるために比較的資料が得られ易いことなどから、古墳の時間軸上の位置付けを考察する上で、極めて有用な要素として用いられている。

しかし、生目５号墳出土の埴輪は、他に類を見ない特殊なものであるために、埴輪という遺物本来の持つ、古墳編年上の決定的要素という役を果たさせるに、非常に困難な資料である。５号墳出土の埴輪は、その形態から大きく３種に分類されることは、第Ⅱ章の埴輪の項で述べたところであるが、いずれも特異な形態を有し、既存の円筒埴輪編年、壺形埴輪編年に合致させることができない。

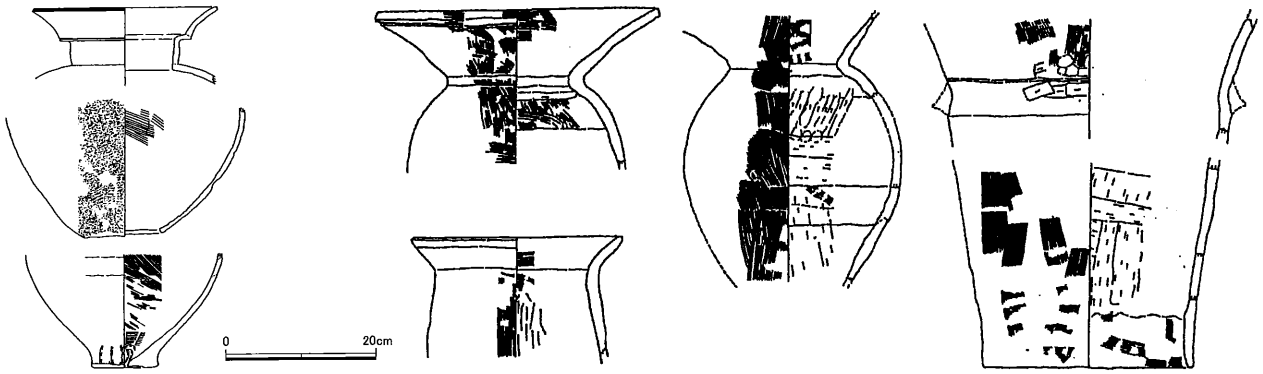
ただし、そのような中でも５号墳出土埴輪の編年的位置付けを検討する上で有用と思われるのが、底部の成形法である。古墳時代前半期に九州で広く用いられた壺形埴輪、所謂、底部穿孔二重口縁壺には、底部孔の成形法に二種がある。即ち、刀子等を用いて底に穿孔を施す刳り貫き成形によるものと、製作の当初から孔の設けられた、ドーナツ状の基底に粘土紐を積み上げて胴部を成形していく積み上げ成形によるものである(竹中 2004)。

前者には福岡県三国の鼻１号墳や佐賀県金立銚子塚古墳、熊本県弁天山古墳などが該当し、集成編年３期までに位置付けられる古墳を主とする。後者の成形法は円筒埴輪の影響によって成立したもので、福岡県老司古墳や沖出古墳、黒埼観世音塚古墳、熊本県院塚古墳など、集成編年４期・５期の古墳を中心とする。

５号墳の埴輪も、いずれのタイプも積み上げ成形によって底部孔が形作られており、集成編年４・５期の壺形埴輪に並行する段階のものと位置付けられる。

南九州において、同種の成形法による壺形埴輪、ないし円筒埴輪の範疇に含まれない特殊な埴輪は、生目５号墳以外に、生目 14 号墳と鹿児島県飯盛山古墳に見られる。有馬義人氏はこれらの一群を「擬似埴輪類」と呼称し、集成編年５期（ないし６期）に位置付けられる女狭穂塚古墳を契機とする円筒埴輪、形象埴輪の導入によって、基本的には姿を消す、としている(有馬 2000, 2004)。

この一群のものを比較すると、５号墳出土埴輪のうち、壺状の胴部のものと生目 14 号墳の埴輪とは、その製作技法などに大差はなく、時間差を見出すのが難しい。しかし、その組成を見ると、５号墳では壺状



〈西都原13号墳〉　〈飯盛山古墳〉

第 39 図　円筒埴輪以前の南九州の埴輪（S＝1/10）

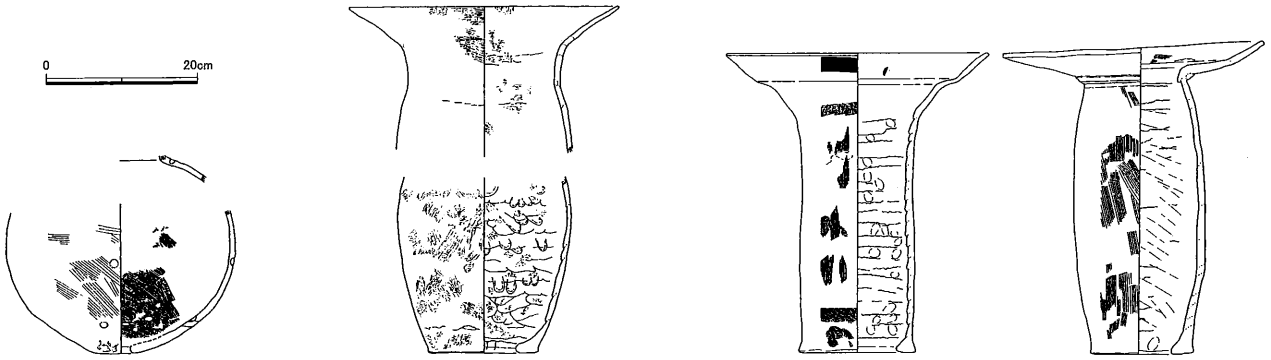
のものの他に円筒状の胴部を持つ埴輪も採用されているのに対し、14 号墳には円筒状のものはなく、壺状のもののみで構成されている。5 号墳の円筒状の埴輪は、壺状の埴輪と同じ、二重口縁の退化した口縁部を持つことから、基本的には壺系の埴輪に、円筒埴輪の一部要素を取り入れて成立したものと考えられ、分類上は壺形埴輪の範疇に含まれるものかもしれない。しかし、生目 14 号墳には見られない、円筒埴輪からの直接的な影響という新出の要素があり、14 号墳に後出するものと理解できる。ただし、先述のとおり、壺状の埴輪においてその製作法にほとんど差異がないことから、その時間的な差は極めて僅かなものであったと考えられる。

5 号墳の埴輪は、類例のないものだけに、埴輪資料そのものから時間的な位置付けを詳細に為すには限界がある。「集成編年 4 期から 5 期」、「相対的に生目 14 号墳に後出する」という位が限界であろう。では現象面から見れば、どうであろうか。

生目古墳群では、この「集成編年 4 期から 5 期」に該当する古墳として墳長 101m の 22 号墳がある。22 号墳からは周溝内から集成編年 4 期に比定できる土師器が出土しており（宮崎市教委 2006）、現在の生目古墳群研究における、数少ない時間軸上の定点のひとつとなっている。この 22 号墳からは、球形胴の壺に底部穿孔を施した壺形埴輪が出土しているが、5 号墳、14 号墳に類するような異形の埴輪は出土していない。また、現在までに前方部周辺の周溝部を中心として、やや広めの調査区を設けているが、「埴輪」の出土はごくわずかで、5 号墳、14 号墳に見られる埴輪の多量樹立は行われていなかったようである。

これらから 22 号墳は 5 号墳、14 号墳に先行すると考えられ、「埴輪」を持つ生目古墳群の首長墓の相対的順番は、22 号墳→14 号墳→ 5 号墳となる。なお、これらの古墳の立地は、生目古墳群の載る南北に長い跡江丘陵の中でも、北側、南側、その中間地点と、それぞれに異なり、その首長墓系譜が単系列か複数系列かは慎重に検討する必要がある。特に、墳長 100m を超す大型前方後円墳である 22 号墳と、50m 前後の中小規模前方後円墳である 5 号墳・14 号墳とでは、同時期並行の古墳である可能性も考慮に入れるべきであるが、埴輪の様相からは、明確に上記の相対的順番となり、時間軸上の上限としては、14 号墳・5 号墳が集成編年 4 期の 22 号墳より遡ることはない。

次に下限の問題であるが、これについては、5 号墳に円筒埴輪の要素が見られる埴輪の存在することが重要である。5 号墳の埴輪には、直立する胴部を持つものや、突帯を持つものがあり、円筒埴輪の影響を受けていることは確実である。ただし 5 号墳の埴輪は、胴部から直接、二重口縁の退化した口縁部に繋がるその形状や 1 条のみの突帯、透かし孔の欠落など変容が大きい。円筒埴輪を基として一部情報の欠落が見られるなどという度合いのものではなく、あくまで壺形埴輪を基として発展し、その中に円筒埴輪の一部属性を取り込んだという印象のものである。円筒埴輪からの影響とは言っても、円筒埴輪工人の関与などといった直接的なものではない。想像するに、5 号墳の埴輪を製作した工人は、円筒埴輪



〈生目22号墳〉　〈生目14号墳〉　〈生目5号墳〉

第 40 図　生目古墳群の埴輪（S=1/10）

を見たことすらなかったのではないか。円筒埴輪の影響とは、円筒埴輪という存在の伝聞情報という程度のものではなかったかと思われる。

南九州における円筒埴輪の初現例は、集成編年５期に比定される西都原古墳群中の女狭穂塚古墳である。女狭穂塚古墳の埴輪は川西編年Ⅲ期、共通編年Ⅲ－２段階に該当し、畿内地域からの派遣工人の手で生産が行われたと思しき、王陵系埴輪である（高橋 1993, 犬木 2007, 竹中 2008 等）。これをもって南九州に初めて円筒埴輪が登場し、次の集成編年６・７期段階には、南九州の前方後円墳築造域全体において、本格的な円筒埴輪生産が展開されることとなる。

女狭穂塚古墳と同じく川西編年Ⅲ期に比定される円筒埴輪は、一ツ瀬川を挟んで対岸に位置する祇園原古墳群中の大久保塚古墳などに採用されている。これらは、少なくとも円筒埴輪と呼ぶにふさわしい形状を持っており、生目５号墳のような特異なものではない。この段階の円筒埴輪は、女狭穂塚古墳の所在する一ツ瀬川流域にしか見られず、限定された地域のみでの導入であるために、円筒埴輪製作の情報が生目古墳群の所在する大淀川流域などには伝わらなかった可能性もある。その場合、畿内地域直系とでも言うべき女狭穂塚古墳の埴輪と、「埴輪」と呼ぶに躊躇するほど異形な生目５号墳の埴輪が同時に存在していた可能性もあろう。

しかし先述の生目５号墳の様相は、南九州に相当なインパクトを持って登場したであろう女狭穂塚古墳の王陵系埴輪が、地理的にそこまで隔たりのない場所に存在している段階の所産とは考え難い。同時の存在であれば、生目５号墳の埴輪にも、円筒埴輪からのより具体的な影響が見出せて当然と思われるからである。

以上より、生目５号墳の埴輪は、女狭穂塚古墳登場以前のものと考えたい。つまり、生目５号墳と 14 号墳の埴輪は、集成編年４期の生目 22 号墳と集成編年５期の女狭穂塚古墳の間にあり、かつ、５号墳は 14 号墳に若干後出する、ということになる。時間的な位置付けとしては、やや感覚的ではあるが、14 号墳が集成編年４期末、５号墳が集成編年５期初め、というところになろうか。

女狭穂塚古墳登場以前においては、西都原 13 号墳、同 100 号墳、大淀３号墳などにおいて壺形埴輪祭祀が行われ、その流れの中で、生目 14 号墳や飯盛山古墳、そして生目５号墳に見られるような壺形埴輪を独自に発展させた特殊な埴輪が登場する。有馬氏が「擬似埴輪類」と称したこれらの一群は、南九州における壺形埴輪祭祀爛熟期の所産とも言えるだろう。生目５号墳の埴輪は、南九州における地域独自の色彩が強い埴輪祭祀が、畿内的な（あるいは普遍的な）埴輪祭祀へと切り替わる過渡期の所産と位置付けられる。

【参考文献】

有馬義人　2000　「宮崎県の埴輪－その導入と展開－」『九州の埴輪　その変遷と地域性』　第３回九州前方後円墳研究会発表要旨資料集

有馬義人　2004　「日向地方における埴輪の導入と展開」『宮崎県地方史研究紀要』第 30 輯　宮崎県立図書館

犬木　努　2007　「西都原の埴輪から見えてくるもの －カタチ・技術・工人・組織－」『巨大古墳の時代－九州南部の中期古墳－』　西都原考古博物館

川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 号２

高橋克壽　1993　「西都原 171 号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第７号　宮崎県

竹中克繁　2004　「九州壺形埴輪研究序論」『熊本古墳研究』第２号　熊本古墳研究会

竹中克繁　2008　「王陵系埴輪『地域受容』の一類型－古墳時代中期における南九州の埴輪生産－」『古代文化』第 59 号　財団法人古代学協会

埴輪検討会編　2003a 『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会
埴輪検討会編　2003b 『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会
宮崎市教育委員会　1996 『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 28 集
宮崎市教育委員会　2006 『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅵ』宮崎市文化財調査報告書第 61 集
宮崎市教育委員会　2007 『史跡生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅶ』宮崎市文化財調査報告書第 65 集

第２節　５号墳出土土師器について

前提として５号墳は墳丘表面、周溝表面のほぼ全体の調査をおこなったのにもかかわらず、土師器の出土が非常に乏しい。その上、後円部北西側周溝の外縁付近から出土した土師器の一群は、その出土位置から 19 号地下式横穴墓所産のものと考えることが妥当であろう。となるとその出土位置から５号墳の構築時期を推定するに援用できるものとしては、西側くびれ部付近の周溝内から出土した壺形土器の２点のみとなる。うち、その形態を残すものは 52 のみである。52 は復元高が 33 ～ 35ｃｍ程度の中型の短頸壺である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外傾する。胴部は長胴で、中ほどに最大径を持つ。調整は粗く、内面の頸部付近には、輪積みの痕跡を残す。長胴の壺は弥生時代後期からの在地の系譜であるが、時代の経過と共に調整の粗さが目立ち始め、内面の輪積みの痕跡が残る状況は５世紀になりよくみられる。また中型の短頸壺は TK216 段階に併行する時期以降には口縁部が直立気味に造られるが、52 にはまだその傾向は見られない。

以上の状況から 52 は５世紀の前半でも早い段階の所産と位置付けられ、前節の埴輪で示された時期とも違いは感じられない。

【参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター　1999 『上の原第３遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 13 集
松永幸寿　2003 「日向における古式土師器の成立と展開」『西南四国―九州間の交流に関する研究』研究代表者下條伸行
宮崎市教育委員会　2003 『江田原第３遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 50 集

第３節　19 号地下式横穴墓について

構築年代

19 号地下式横穴墓はその出土した遺物から、５世紀中葉の築造と考えられる。５号墳が出土した埴輪から本報告書で述べているように集成編年５期初めであるため、19 号地下式横穴墓は５号墳より後出するものと言える。

構築状況

19 号地下式横穴墓は、前項で述べたように竪坑上面を板状のもので閉塞した可能性が想定される。竪坑の規模の大きさと閉塞板の支えと考えられる柱痕の大きさから想定の範囲を出るものではないが、仮に竪坑上面閉塞として類例をたどるのであれば、内陸部のえびの盆地域に位置する島内地下式横穴墓群が挙げられる。ただし、当地下式横穴墓群において検出されている竪坑上面閉塞の地下式横穴墓はそのすべてが溶結凝灰岩の板石での閉塞であり、木板のものはない（えびの市教委 2001)。しかし、当地下式横穴墓群の閉塞材は比較的近距離の所からの採掘であるため、入手しやすい材での閉塞と考えると生目古墳群内においては木板が適当かと考えることもできる。また、島内地下式横穴墓群内では別類として分けられているものの、羨門閉塞に地山の塊を用いているタイプがあり、その点においても、シラスの塊で閉塞をしている 19 号地下式横穴墓と共通するところである。

北郷泰道氏は、竪坑上部閉塞の平入りの地下式横穴墓が地下式板石積石室墓の影響下に成立したとし、当該地域において先行して存在する墓制に引きずられる形で変容を遂げるとしている（北郷2006)。宮崎市域において、現在まで地下式板石積石室墓の発見例はなく、19号地下式横穴墓以外の竪坑上部閉塞の地下式横穴墓も確認されていない。独自的、単発的な発生とも考えられる中、これまでの地下式横穴墓研究と地理的環境から、内陸部からの伝播と想定され、19号地下式横穴墓の構築年代を加味すると、そのスピードは、これまで考えられているものより速いと言わざるをえない。

構築位置

19号地下式横穴墓は、5号墳の北西側の周溝外に造られている、単独の地下式横穴墓と考えられる。概要で述べたような古墳の周溝床面に竪坑を設けたり、周溝立ち上がりの傾斜を利用したり、竪坑直上に封土を設けるといった生目古墳群内で見られる地下式横穴墓の特徴は見られず、生目古墳群内の地下式横穴墓の中では、稀な例となる。出土遺物から、5号墳より後に造られたと考えられるが、5号墳の周溝内ではなく、わずか2mほど離れて周溝外に造られたことについては、意図的な要素も考えられる。意図的として推考するならば、生目古墳群内の半数以上の地下式横穴墓が古墳の周溝内に造られているという現在までの調査結果を踏まえ、古墳は周溝も含めて、当時の有力者の墓であり、その墓域に立ち入れる人物というのは、その古墳に埋葬された有力者と関係性が深い人物であったと考えられる。いわば、19号地下式横穴墓の被葬者と5号墳の埋葬された有力者は、関係性が薄いもしくは縁遠いと言えるのではないだろうか。生目古墳群内では、古墳の周溝内に造られている地下式横穴墓について、完掘まで至っているケースはほとんどないが、対岸の下北方古墳群の1号墳では、その周溝内から1基、周溝外から2基の地下式横穴墓が見つかり、調査が行われている（宮崎市教委2008)。それによると、周溝内の下北方16号地下式横穴墓は、前方部前面の周溝内に竪坑を掘り、玄室は墳丘内に構築されている。構築時期は、玄室内出土遺物から下北方1号墳築造の直後と考えられ、周溝外の2基は、出土遺物から時期的に大きく後出するようである。当報告書において、地下式横穴墓と古墳との関係性については論じられていないが、下北方16号地下式横穴墓は、その構築時期から1号墳に追随して造られたものであり、その関係性は深く、周溝外の2基は、時期的な隔たりがあるものとして、下北方1号墳の被葬者と関係性が薄いと考えられる。この調査結果は、本文をさらに裏付けるものであるといえる。

今回の19号地下式横穴墓の調査結果を踏まえると、古墳の周溝内に造られる地下式横穴墓というのは、その古墳の陪塚的な目的をもって造られており、その築造年代は、古墳の築造時期と同時期もしくはその直後と捉えることができるのではないかと考えられる。現在、生目古墳群で確認されている45基の地下式横穴墓のうち34基は古墳の周溝内より見つかっており、完掘例や陥没坑のプランなどから大半が平入りの地下式横穴墓と想定される（第7表）。その中でも、14・21・22号墳の3基の前方後円墳が発掘調査の結果から21号墳は4世紀中（※註1)、22号墳は4世紀後半、14号墳は4世紀末の築造とされ、それぞれ周溝内から地下式横穴墓が検出されている。それぞれの地下式横穴墓については、検出までであり、出土遺物からの築造年代は不明であるが、仮に前方後円墳に属するものであるならば、その築造年代は4世紀代に遡る可能性があると考えることができる。これまでの地下式横穴墓研究の中で、小木原遺跡蕨地区（宮崎県えびの市）の調査では横口式土壙墓が発見され、地下式横穴墓の発生が4世紀末から5世紀初頭まで遡る可能性があるとし、西都原地区酒元ノ上横穴墓群、国分、堂ヶ島（同県西都市）、牛牧（同県高鍋町）の調査では地下式横穴墓が7世紀中葉まで確実に残るという調査結果を踏まえ、地下式横穴墓は宮崎県内陸部において平野部に先行する形で発生し、内陸部を中心として盛んに造られ、時期を経て順次、平野部に造られていったという考えが大方であったが、本報告において、地下式横穴墓の発生・伝播の流れ等を含む内陸部と平野部の相互関係に新たな課題を提

示することとなった。

※註１　21 号墳については、現在未報告。平成 19・20 年度に発掘調査。平成 22 年度に発掘調査ならびに概要報告書刊行予定

【参考文献】
えびの市教育委員会　2001　『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第 29 集
東憲章　2001　「日向（宮崎県）の地下式横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』　第４回九州前方後円墳研究会大会資料集　九州前方後円墳研究会
本郷泰道　2006　「再論・南境の民の墓制－地下式横穴墓研究の現在－」『宮崎県立西都原博物館研究紀要』第２号　西都原考古博物館
宮崎市教育委員会　2006　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅵ』　宮崎市文化財調査報告書第 61 集
宮崎市教育委員会　2007　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅶ』　宮崎市文化財調査報告書第 65 集
宮崎市教育委員会　2008　『下北方１号墳周辺遺跡』　宮崎市文化財調査報告書第 71 集

第４節　総括

今回報告した５号墳について、その築造時期について古墳群内の外表施設の状況から外観してみたい。ここまでの生目古墳群内における相対的系譜は、21 号墳（集成２～３期）→3 号墳（3 期）→22 号墳（4 期始）→14 号墳（4 期末）→5 号墳（5 期初）→7 号墳（8 期）の順で、本報告内で整理された。これらの古墳はこれまでの調査で外表施設の状況が解ってきており、古墳間で共通点と相違点がある。まず、葺石は 21 号墳を除く５基の古墳で施されるが、７号墳では墳丘の上段斜面のみという特異な形態である。また、葺石を施す墳丘も、各段のテラス及び平坦面にも敷石を施すのが３号墳と 14 号墳で、22 号墳もその可能性が高い。さらに３号墳と 22 号墳では墳丘墳端の周囲に幅 1.0mほどの犬走り状の敷石帯が巡る。埴輪の樹立は 21 号墳、22 号墳、14 号墳、5 号墳で認められ、5 世紀後半築造の７号墳に埴輪の樹立がない（第 11 表）。7 号墳は一種規格外の前方後円墳である。埋葬主体に地下式横穴墓を採用する可能性があるなど、特異な形態があり、外表施設でもその状況がある。

５号墳以前の古墳では、定点を３号墳にした場合、葺石は５号墳まで採用されるものの、墳丘平坦面の敷石は 14 号墳まで、墳丘周囲の敷石帯は 22 号墳までの採用である。印象的な表現とはなるが、５号墳以前の古墳は基底部の根石列や区画石の配置など、５号墳より精美な石葺（葺石・敷石）の状況がみられる。このことは技術の抽象化のひとつと考えられ、跡江の丘陵上での長期間に渡る古墳造りが、時代の流れ（権力の衰退）によって前方後円墳の規模の縮小と同様、外表施設も淘汰せざるをえない状況になったためだと考えられる。もっとも外表施設の技法からでは、５号墳の実年代に迫ることはできないが、少なくとも 14 号墳の後に５号墳を築造し

古墳番号		21 号墳	3 号墳	22 号墳	14 号墳	5 号墳	7 号墳
前方後円墳集成編年		2～3 期	(3 期)	4 期始	4 期末	5 期初	8 期
葺石	なし	■					
	斜面全体		■	■	■	■	
	上段のみ						■
テラス・平坦面敷石			■		■		
墳丘周囲敷石			■	■			
埴輪		■		■	■	■	

第 11 表　生目古墳群内既調査前方後円墳外表施設整理

たことについては提言することができる。

平成10年度以降の発掘調査以後、生目古墳群における地下式横穴墓の存在が注目され始めた。これまでに確認された地下式横穴墓の多くが、前方後円墳の周囲に造られる。先述したとおり、生目古墳群とは大淀川を挟んで対岸に対峙する下北方古墳群でも、同様のことが明らかとなっている。江戸時代の記録ではあるが、生目古墳群からも程近い大淀川支流の本庄川河畔の段丘上に立地する本庄古墳群の猪の塚古墳でも前方後円墳と地下式横穴墓の関係を示唆するものがある。一方で、宮崎県内では県央の一ツ瀬川流域の西都原古墳群や祇園原古墳群などでも古墳の発掘調査が進み、地下式横穴墓の検出例も多い。しかし、現在までのところ大淀川流域でみられるような前方後円墳との関係を想起できる例は確認されていない。故に前方後円墳と地下式横穴墓が共生する事実は大淀川下流域における一般的墓制としてとらえてよいのかもしれない。生目古墳群における前方後円墳の縮小化と、時を同じくして前方後円墳の築造を開始する下北方古墳群を対比させ、これを首長の権力の移動と捉える推論もあるが、互いの古墳群が前方後円墳と地下式横穴墓の共生を有する特徴を持つことを踏まえれば、それほどドラマティックな展開を考えるよりも、むしろ新たな墓域の展開という必然的な行為としてとらえることができるのではないだろうか。

【参考文献】

宮崎市教育委員会　2002　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ』　宮崎市文化財調査報告書第52集

宮崎市教育委員会　2003　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅳ』　宮崎市文化財調査報告書第54集

宮崎市教育委員会　2004　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅴ』　宮崎市文化財調査報告書第57集

宮崎市教育委員会　2006　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅵ』　宮崎市文化財調査報告書第61集

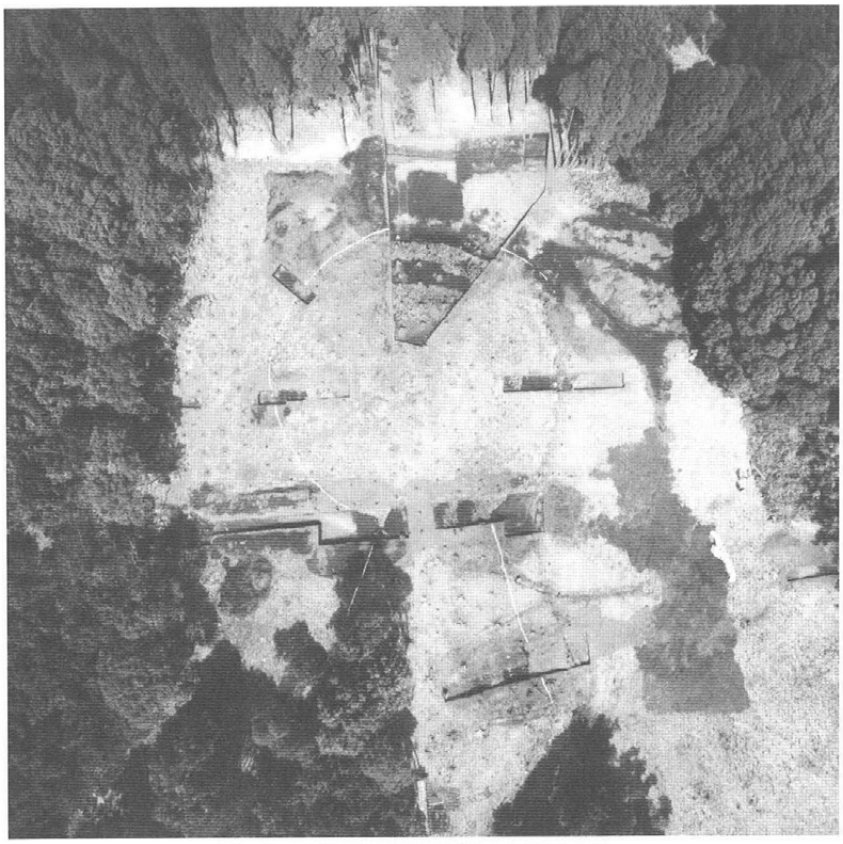
宮崎市教育委員会　2007　『史跡生目古墳群　保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅶ』　宮崎市文化財調査報告書第65集

東憲章　2001　「日向（宮崎県）の地下式横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』　第4回九州前方後円墳研究会大会資料集　九州前方後円墳研究会

東憲章　2005　「前方後円墳と地下式横穴墓」『季刊考古学90号　―前方後円墳とは何か―』　石野博信編　雄山閣

宮崎市教育委員会　2008　『下北方1号墳周辺遺跡』　宮崎市文化財調査報告書第71集

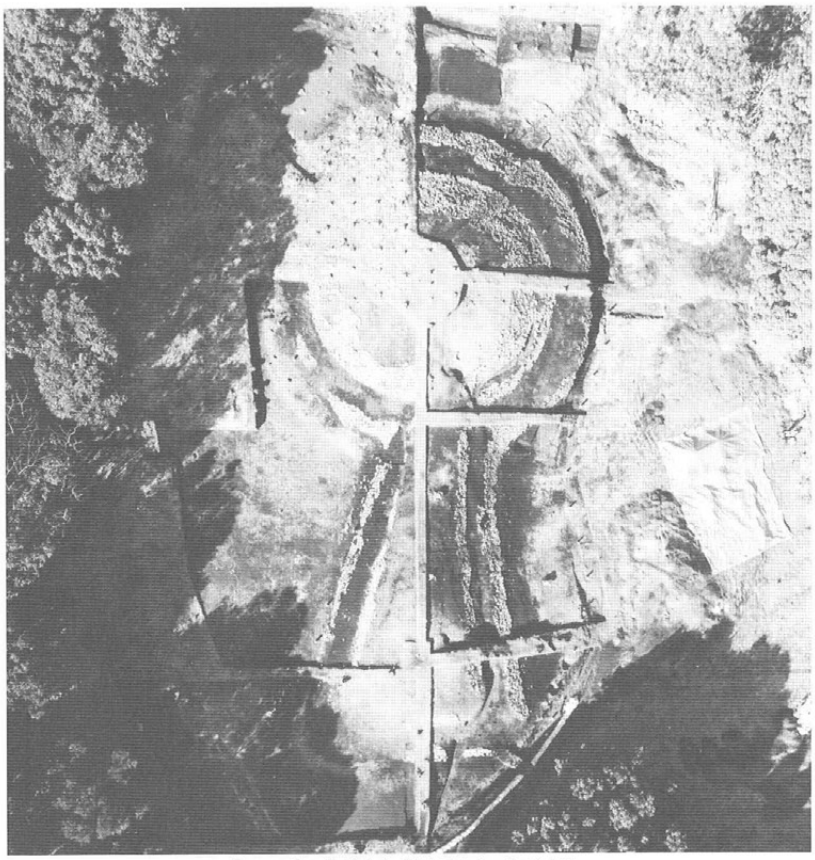
図版1　発掘調査状況①



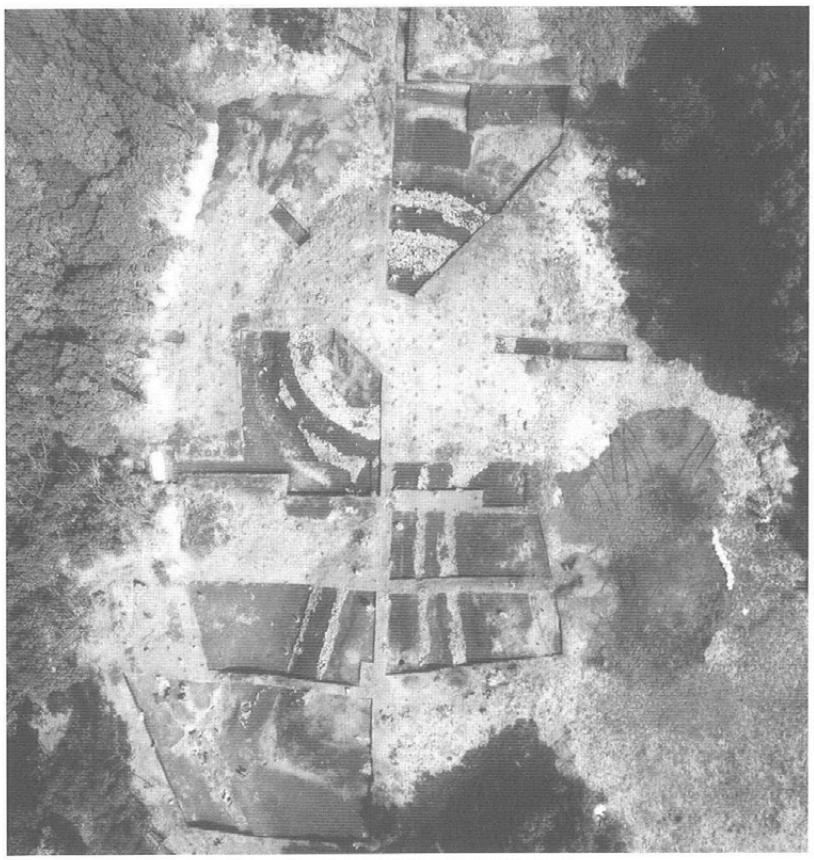
平成 10 年度調査状況（上空より）

平成 11 年度調査状況（上空より）

図版2　発掘調査状況②



平成 12 年度調査状況（上空より）



平成 13 年度調査状況（上空より）

図版3　発掘調査状況③

平成 14 年度調査状況（上空より）

平成 15 年度調査状況（上空より）

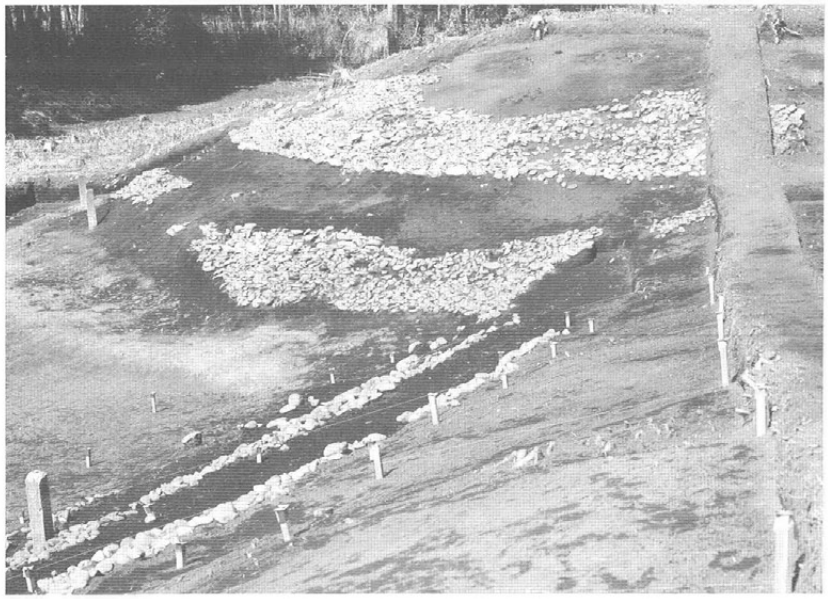
図版4　発掘調査状況④

樹木伐採後の5号墳（平成 11 年ごろ）

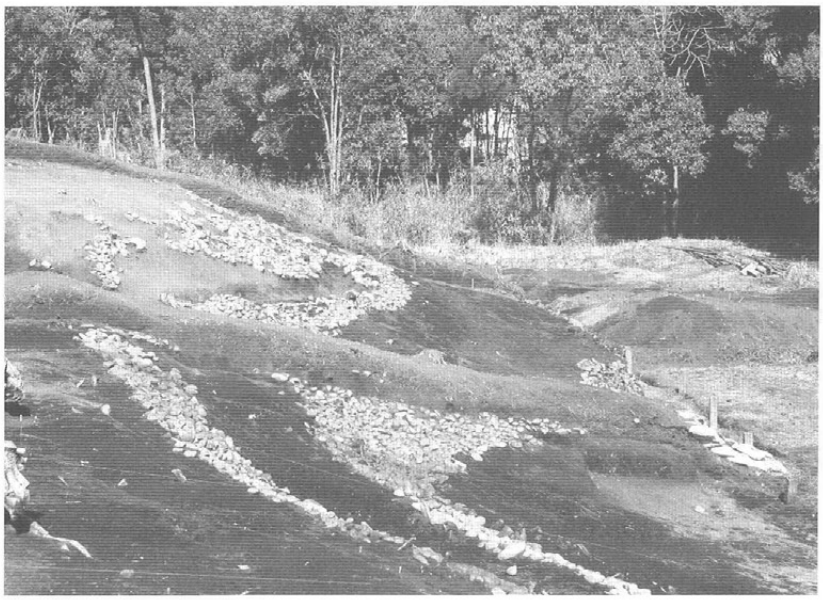
後円部北東部調査状況

後円部北西部調査状況

図版5　発掘調査状況⑤



後円部南西部調査状況（前方部より）



後円部南東部調査状況（前方部より）

前方部より後円部を望む

図版6　発掘調査状況⑥

後円部北西部の葺石の状況

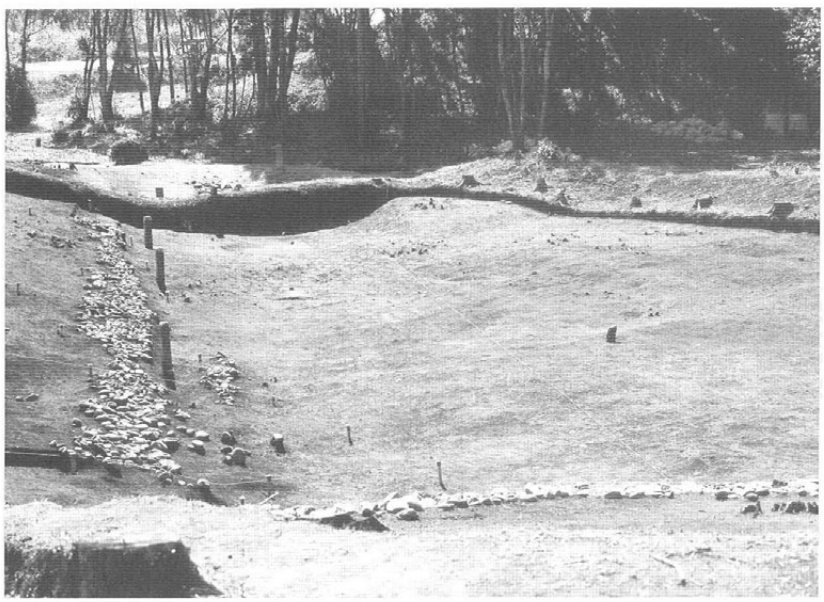
西側周溝から後円部南西側を望む

後円部から前方部西側を望む

図版7　発掘調査状況⑦

前方部東側の状況

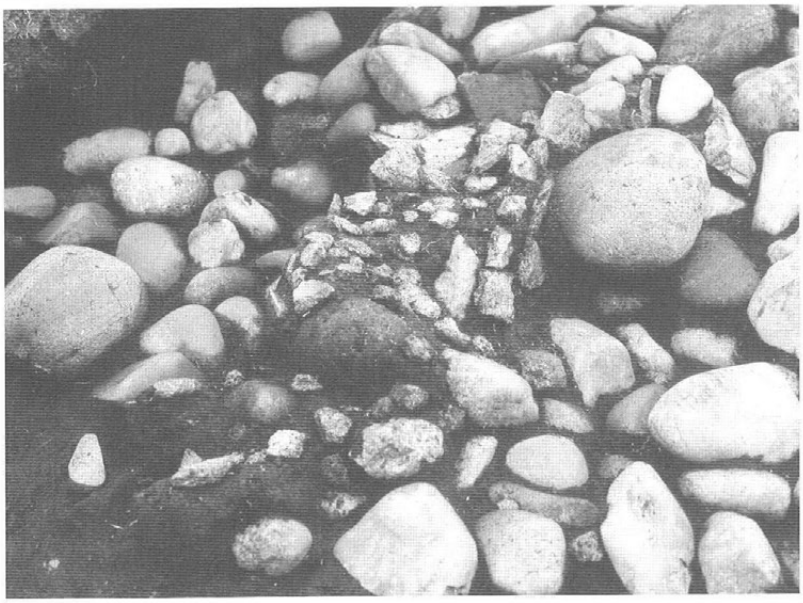
前方部西側の基底部の状況



前方部西側周溝

図版8　発掘調査状況⑧

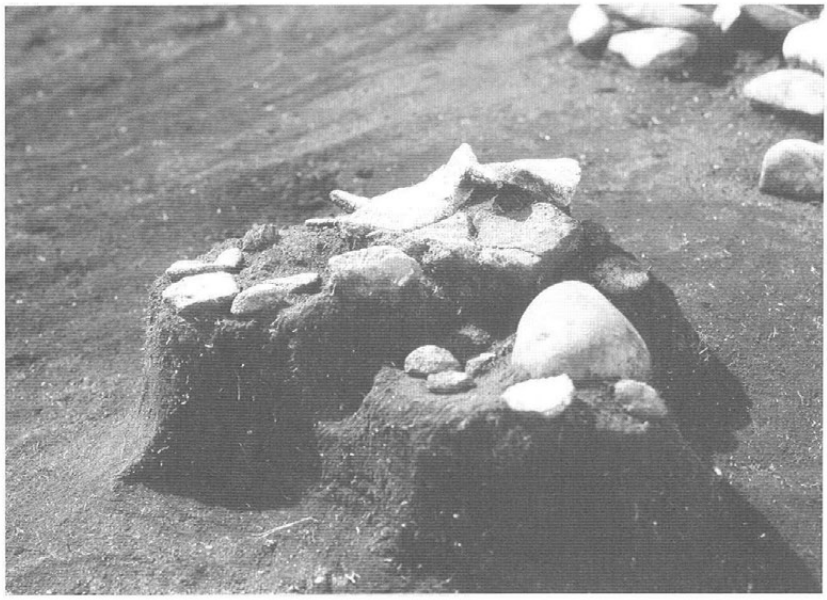
後円部周囲の周溝



埴輪出土状況①

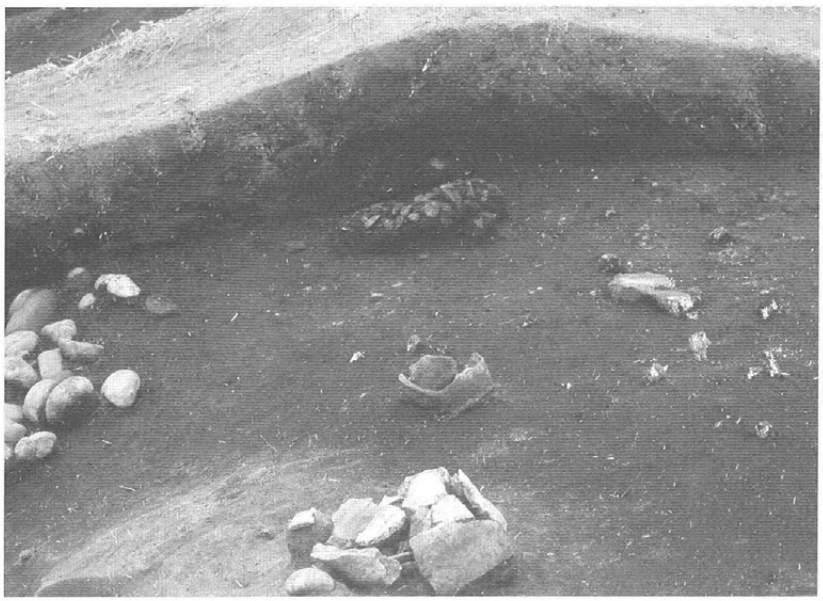
埴輪出土状況②

図版9　発掘調査状況⑨



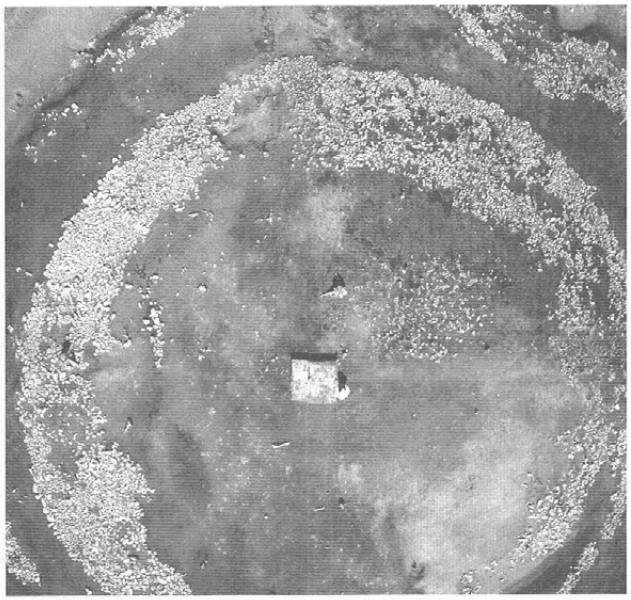
埴輪出土状況③

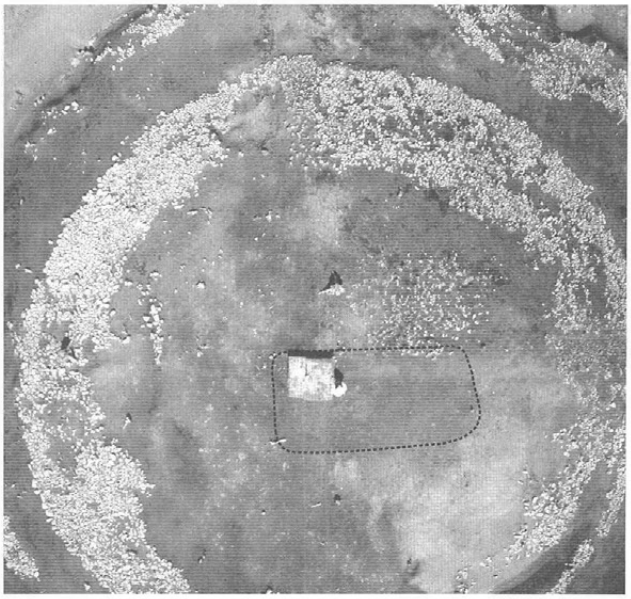
埴輪出土状況④



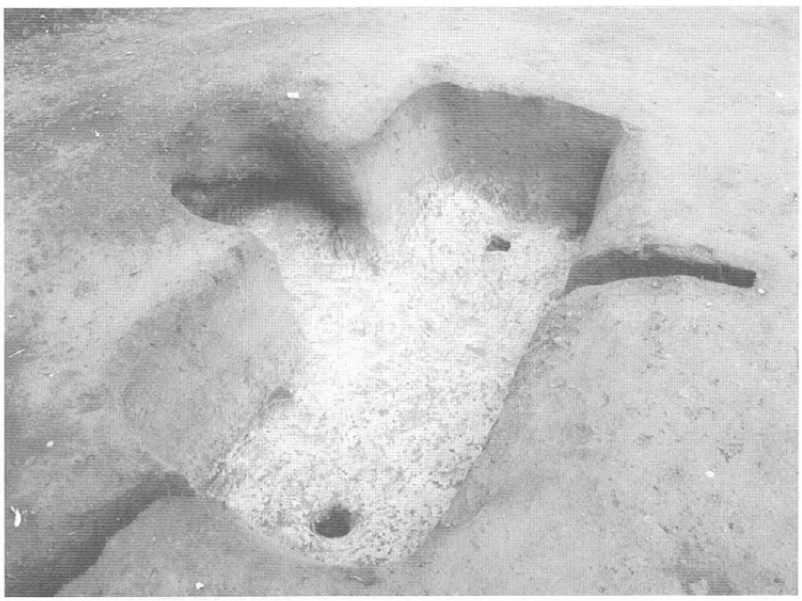
埴輪出土状況⑤

図版 10　発掘調査状況⑩

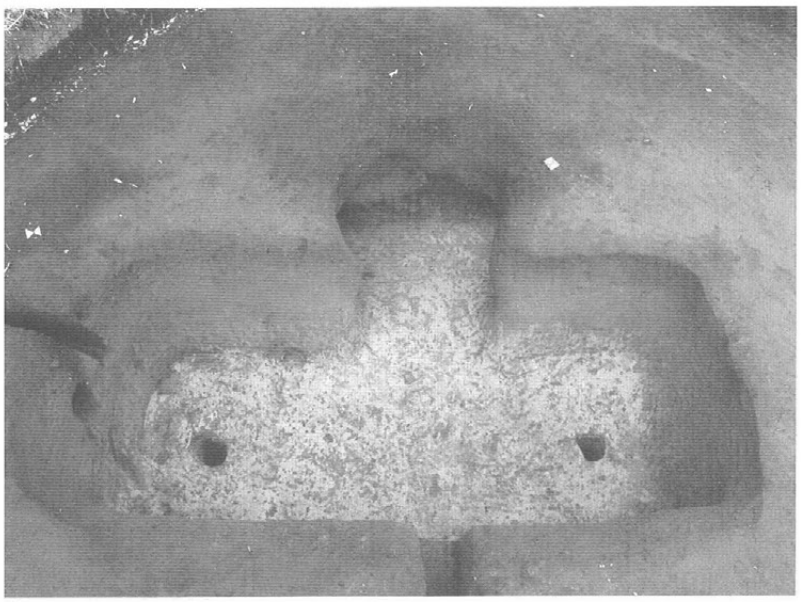




後円部墳頂平坦面の状況
（右は墓坑の位置）

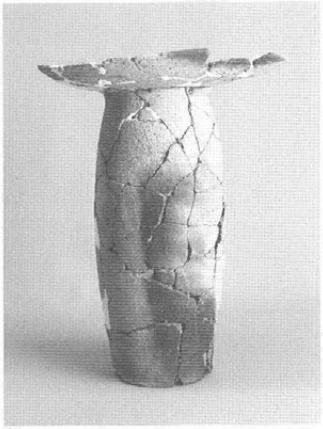


19 号地下式横穴墓①

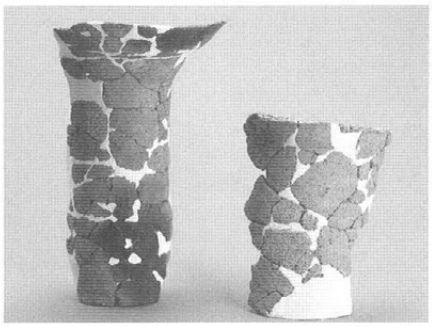


19 号地下式横穴墓②（手前竪坑、奥玄室）

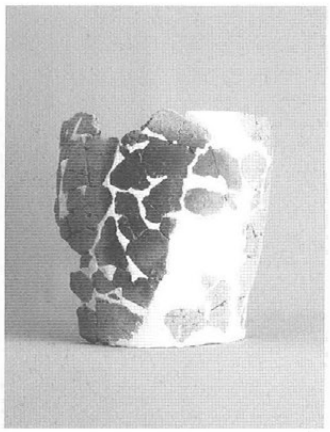
図版 11　出土遺物



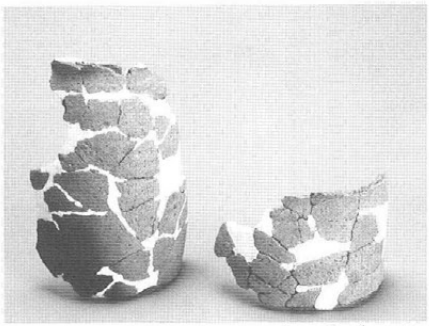
1



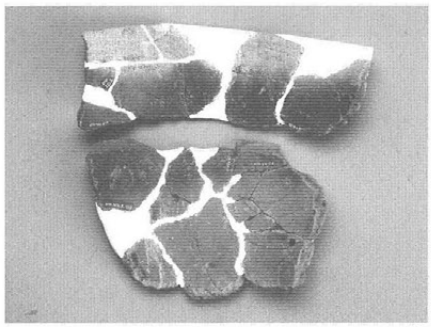
左：2　右：24



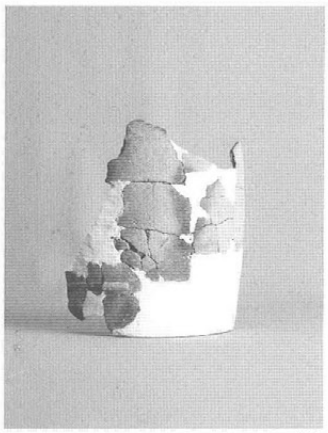
3



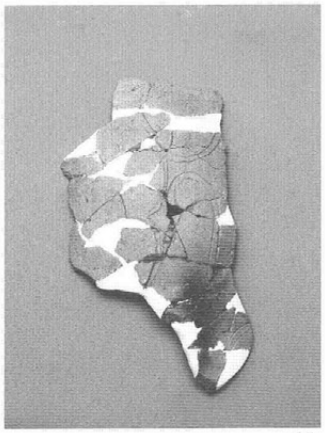
左：12　右：13



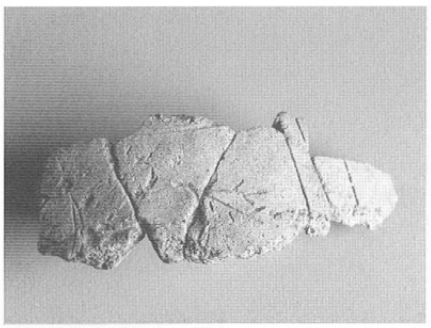
7



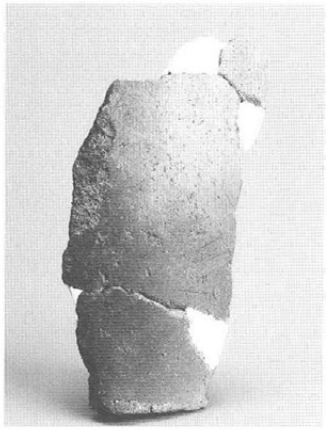
14



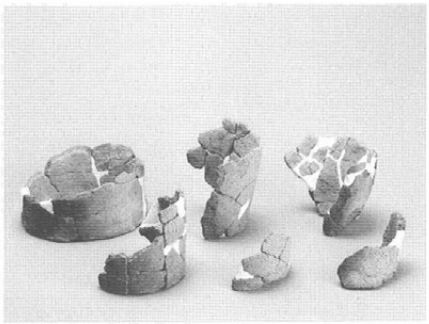
15



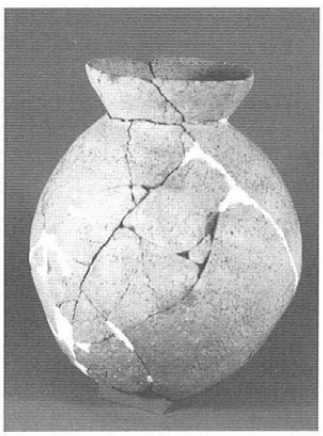
17



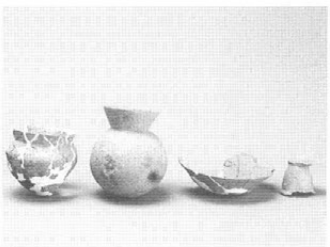
32



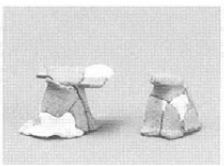
奥左より 36・33・31
手前左より 35・40・31



52



左より 57・58・59・60



左より 54・55

右より 64・65

報告書抄録

ふりがな	いきめこふんぐん
書名	生目古墳群Ⅰ
副書名	生目5号墳発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第80集
編集者名	稲岡洋道
編集機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号　TEL(0985)21－1836
発行年月日	2010年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
いきめごふんぐん 生目5号墳	みやざきけんみやざき 宮崎県宮崎 しおおあざあとえ 市大字跡江	45201	5	31°56′54″ 付近	131°23′15″ 付近	19981215～19990331 19991213～20000331 20001213～20010331 20010910～20020228 20020926～20030326	2738m²	保存整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構等	主な遺物	特記事項
生目古墳群	古墳群	古墳時代	生目5号墳 墳丘 前方後円墳 葺石 埴輪 周溝	埴輪 土師器砕片 土師器 壺形土器	
			19号地下式横穴墓	土師器 壺形土器 甕形土器 高杯 鉄鏃 圭頭鏃 短頸鏃	

宮崎市文化財調査報告書　第80集
生目古墳群Ⅰ
生目５号墳発掘調査報告書

2010年3月
発　行　　宮崎市教育委員会